

靈界通信 小桜姫物語

浅野和三郎

青空文庫

舌代

本物語は謂わば家庭的に行われたる靈界通信の一にして、そこには些の誇張も夾雜物もないものである。が、其の性質上記の如きところより、之を発表せんとするに当りては、亡弟も可なり慎重な態度を採り。靈告による祠の所在地、並に其の修行場などを實地に踏査する等、いよいよ其の架空的にあらざる事を確かめたる後、始めて之を雑誌に掲載せるものである。

靈界通信なるものは、純真なる媒者の犠牲的行為によつてのみ信を措くに足るものが得らるのであつて、媒者が家庭的であるか否かには、大なる關係がなさそうである。否、家庭的なものの方が寧ろ不純物の夾雜する憂なく、却つて委曲を尽し得べしとさえ考えらるるのである。

それは兎に角として、また内容価値の如何も之を別として、亡弟が心を籠めて遣せる一産物たるには相違ないのである。今や製本成り、紀念として之を座右に謹呈するに当たり、この由来の一端を記すこと爾り。

昭和十二年三月

浅野正恭

序

靈界通信——即ち靈媒の口を通じ或は手を通じて靈界居住者が現界の我々に寄せる通信、例を挙げれば Gerildine Cummins の *Beyond Human Personality* は所謂「自動書記」の所産である。此書中に含まれる論文は故フレデリク・マイヤーズ——詩人として令名があるが、特に心霊科学に多大の努力貢献をした人——が靈界よりカムミンスの手を仮りて書いたものと信ずる旨をオリバ・ロツヂ卿、ローレンス・デヨンス卿が証言した。（昨年十二月十八日の『*The Two Words*』所掲）

カムミンスの他の自動書記は是迄四五種ある。其文体は各々相違して居る。又彼の自著小説があるが、是は全く右数種の自動書記と相違している。心霊科学に何等の実験がなく、潜在意識の所産などと説く懷疑者の迷を醒ますに足ると思う。

小櫻姫物語は解説によれば鎌倉時代の一女性がT夫人の口を借り数年に亘って話たるものを淺野和三郎先生が筆記したのである。但し『T夫人の意識は奥の方に微かに残っている』から私の愚見に因れば多少の Fiction は或はあり得ぬとは保障し難い。

しかしこれらを斟酌しても本書は日本に於いては破天荒の著書である。是を完成し終つた後、先生は二月一日突然発病し僅々三十五時間で逝いた。二十余年に亘り、斯学の為めに心血を灑ぎ、あまりの奮闘に精力を竭尽して斃れた先生は斯学における最大の偉勲者であることは曰う迄もない。

私は昨年三月二十二日、先生と先生の令兄浅野正恭中将と岡田熊次郎氏とに伴して駿河台の主婦の友社来賓室に於て九條武子夫人と語る靈界の座談会に列した。主婦の友五月号に其の筆記が載せられた。

日本でこの方面の研究は日がまだ浅い、この研究に従事した福来友吉博士が無知の東京帝大理学部排斥により同大学を追われたのは二十余年前である。英国理学の大家、エレクトロン首先研究者、クルクス管の発明者、ローヤル・ソサイティ会長の故クルツクス、ソルボン大学教授リシエ博士（ノーベル勲章受領者）、同じくローヤル・ソサイティ会長オリバ・ロツヂ卿……これら諸大家の足許にも及ばぬ者が掛かる偉大な先進の努力と研究とのあるを全く知らず、先入が主となるので、井底の蛙の如き陋見から心靈現象を或は無視し或は冷笑するのは気の毒千万である。浅野先生が二十余年に亘る研究の結果の数種の著述心靈講座、神霊主義と共に本書は日本に於ける斯学にとりて重大な貢献である。

仙台に於いて

土井晩翠

解説

——本書を繙かるる人達の為に——

浅野和三郎

本篇を集成したるものは私でありますが、私自身をその著者というのは当らない。私はただ入神中のT女の口から発せらるる言葉を側で筆録し、そして後で整理したというに過ぎません。

それなら本篇は寧ろT女の創作かというに、これも亦事實に当てはまっていない。入神中のT女の意識は奥の方に微かに残つてはいるが、それは全然受身の状態に置かれ、そして彼女とは全然別個の存在——小櫻姫と名告る他の人格が彼女の体躯を支配して、任意に口を動かし、又任意に物を視せるのであります。従つてこの物語の第一の責任者はむしろ右の小櫻姫かも知れないのであります。つまりところ、本書は小櫻姫が通信者、T女が受信者、そして私が筆録者、

總計三人がかりで出来上つた、一種特異の作品、所謂靈界通信なのであります。現在欧米の出版界には、斯う言つた作品が無数に現われて居りますが、本邦では、翻訳書以外にはあまり類例がありません。

T女に斯うした能力が初めて起つたのは、実に大正五年の春の事で、数えて見ればモ一二十年の昔になります。最初彼女に起つた現象は主として靈視で、それは殆んど申分なきまでに的確明瞭、よく頭幽を突破し、又遠近を突破しました。越えて昭和四年の春に至り、彼女は或る一つの動機から靈視の他に更に靈言現象を起すことになり、本人とは異つた他の人格がその口頭機關を占領して自由自在に言語を發するようになりました。『これで漸くトーカーができ上がった……』私達はそんな事を言つて飲んだものであります。『小桜姫の通信』はそれから以後の産物であります。

それにしても右の所謂『小桜姫』とは何人か？ 本文をお読みななれば判る通り、この女性こそは相州三浦新井城主の嫡男荒次郎義光の奥方として相当世に知られている人なのであります。その頃三浦一族は小田原の北條氏と確執をつづけていましたが、武運拙く、籠城三年の後、荒次郎をはじめ一族の殆んど

ど全部が城を枕に打死を遂げたことはあまりにも名高き史的事蹟であります。その際小
 櫻姫がいかなる行動に出たかは、歴史や口碑の上ではあまり明らかでないが、彼女
 自身の通信によれば、落城後間もなく病にかかり、油壺の南岸、浜磯の仮
 寓でさびしく帰幽したらしいのであります。それからあらぬか、同地の神明社内には現
 に小桜神社（通称 若宮様）という小社が遺つて居り、今尚お里人の尊崇
 の標的になつて居ります。

次に当然問題になるのは小櫻姫とT女との関係でありますが、小櫻姫の告ぐ
 る所によれば彼女はT女の守護霊、言わばその霊的指導者で、両者の間
 柄は切つても切れぬ、堅き因縁の羈絆で縛られているといふのであります。それに就
 きては本邦並に欧米の名ある霊媒によりて調査をすすめた結果、ドーも事実とし
 て之を肯定しなければならぬやうであります。

尚お面白いのは、T女の父が、海軍将校であつたために、はしなくも彼女の出
 生地がその守護霊と関係深き三浦半島の一角、横須賀であつたことであります。
 さらに彼女はその生涯の最も重要な時期、十七歳から三十三歳までを三浦半
 島で暮らし、四百年前彼女の守護霊が親める山河に自分も親しんだのであります。

これは単なる偶然か、それとも幽冥の世界からのとりなしか、神ならぬ身には容易に判断し得る限りではありません。

最後に一言して置きたいのは筆録の責任者としての私の態度であります。小櫻姫の通信は昭和四年春から現在に至るまで足掛八年に跨がりて現われ、その分量は相当沢山で、すでに数冊のノートを埋めて居ります。又その内容も古今に亘り、顕幽に跨り、又或る部分は一般的、又或る部分は個人的と言った具合に、随分まちまちに入り乱れて居ります。従つてその全部を公開することは到底不可能で、私としては、ただその中から、心靈的に観て参考になりそうな箇所だけを、成るべく秩序を立てて拾い出して見たに過ぎません。で、材料の取捨選択の責は当然私が引受けなければなりません。が、しかし通信の内容は全然原文のままで、私意を加へて歪曲せしめたような箇所はただの一箇所もありません。その点は特に御留意を願いたいと存じます。

(十一、十、五)

一、その生立

修しゆぎ行ぎやうも未み熟じよく、思しり慮りよも足たりない一人ひとりの昔むかしの女じよ性せいがおこがましくもここにまかり出でる幕まくでないことはよく存ぞんじて居おりまするが、斯こうも再さい々さいお呼よび出だしに預あずかり、是ぜ非ひくわしい通つう信しんをと、つづけざまにお催さい促そくを受けましては、ツイその熱ねつ心しんにほだされて、無む下げにおことわりもできなくなつて了しまつたのでございます。それに又また神かみさまからも『折せつ角かくであるから通つう信しんしたがい』との思おほ召しめでございしますので、今こん回かいいよいよ思おもひ切きつてお言葉ことばに従したがうことにいたしました。私わたくしとしてはせいぜい古い記き憶おくを辿たどり、自じ分ぶんの知しつてゐること、又また自また分じぶんの感かんじたまを、作つくらず、飾かぎらず、素すな直ちよくに申もう述しよべることにいたします。それがいささかなりとも、現げん世せの方かた々がたの研けん究きゆうの資たし料りやうともなればと念ねんじて居おります。何どう卒ぞあまり過か分ぶんの期のぞ待みをかけず、お心こころ安やすくおきき取りくださいますように……。ただ私わたくしとして、前まもつ以もつてここに一つお断ひとりして置おきたいことがございます。それは私の現げん世せ生活いかつの模も様ようをあまり根ね掘ほり葉は掘ほりお訊たずねになられぬことでございます。私わたくしにはそれが何なによりつらく、今いま更さら何なんの取とり得えもなき、昔むかしの身み上うへなどを露つゆほども物もの語がたりたくはございま

せぬ。こちらの世界へ引移つてからの私どもの第一の修行は、成るべく早く醜い地上の執着から離れ、成るべく速かに役にも立たぬ現世の記憶から遠ざかることでございませう。私どもはこれでもいろいろと工夫の結果、やつとそれができて参つたのでございます。で、私どもに向つて身上嘸をせいと仰ツしやるのは、言わば辛うじて治りかけた心の古疵を再び抉り出すような、随分惨たらしい仕打なのでございます。幽明の交通を試みらるる人達は常にこの事を念頭に置いて戴きとう存じます。そんな訳で、私の通信は、主に私がこちらの世界へ引移つてからの経験……つまり幽界の生活、修行、見聞、感想と言つたような事柄に力を入れて見たいのでございませう。又それがこの道にたずさわる方々の私に期待されるところかと存じます。むろん精神を統一して凝乎と深く考え込めば、どんな昔の事柄でもはつきり想ひ出すことができないではありません。しかもその当時の光景までがそっくりそのまま形態を造つてありありと眼の前に浮び出てまいります。つまり私どもの境涯には殆んど過去、現在、未来の差別はないのでございまして。……でも無理にそんな真似をして、足利時代の絵巻物をくりひろげてお目にかけて見たところで、大した価値はございません。現在の私としては到底そんな気分にはなりかねるのでございます。

と申しまして、私が今いきなり死んでからの物語を始めたのでは、何やらあまり唐と
 うとつ 突……現世と来世との連絡が少しも判らないので、取りつくしまがないように思われ
 るかた 筋丈をかいつまんで申上げることに致しましょう。乗りかけた船とやら、これも現世
 筋丈をかいつまんで申上げることに致しましょう。乗りかけた船とやら、これも現世
 と通信を試みる者の免れ難き運命——業かも知れませぬ……。

私は——実は相州荒井の城主三浦道寸の息、荒次郎義光と申す者の妻だ
 つたものにございます。現世の呼名は小櫻姫——時代は足利時代の末期——今から約
 四百余年の昔でございます。もちろんこちらの世界には昼夜の区別も、歳月のけじめも
 ありませぬから、私はただ神さまから伺つて、成るほどそうかと思う丈のことに過ぎませ
 ぬ。四百年といえは現世では相当長い星霜でございますが、不思議なものでこちらでは
 さほどにも感じませぬ。多分それは凝平と精神を鎮めて、無我の状態で居る
 期間が多い故でございましょう。

私が生家でございますか——生家は鎌倉にありました。父の名は大江廣信——代
 々鎌倉の幕府に仕へた家柄で、父も矢張りそこにとめて居りました。母の名は袈
 裟代、これは加納家から嫁いでまいりました。両親の間には男の児はなく、たった一

とつぶだねおんなこ
粒種の女の児があつたのみで、それが私なのでございます。従つて私は小供の時から随
分大切に育てられました。別に美しい程でもありませんが、体軀は先ず大柄な方で、
それに至つて健康でございましたから、私の処女時代は、全く苦勞知らずの、丁度春
の小禽そのまま、楽しいのんびりした空氣に浸つていたのでございます。私の幼い時分に
は祖父も祖母もまだ存命で、それはそれは眼にも入れたいほど私を寵愛してくれま
した。好い日和の折などには私はよく二三の腰元どもに傳れて、長谷の大仏、江の島
の弁天などにお詣りしたものでございます。寄せてはかえす七里ヶ浜の浪打際の貝
拾いも私の何より好きな遊びの一つでございました。その時分の鎌倉は武家の住居の
建ち並んだ、物静かな、そして何やら無骨な市街で、商家と言つても、品物は皆奥
深く仕舞い込んでありました。そうそう私はツイ近頃不図した機会に、こちらの世界
から一度鎌倉を覗いて見ましたが、赤瓦や青瓦で葺いた小さな家屋のぎっしり
建て込んだ、あのけげげしさには、つくづく呆れて了いました。
『あれが私の生れた同じ鎌倉かしら……。』私はひとりそうつぶやいたような次第で：
…。

その頃の生活状態をもっと詳しく物語れと仰つしやいますか——致方がござ

いませぬ、お喋りの序でに、少しばかり想い出して見ることにいたしましょう。もちろん、順序などは少しも立つて居りませぬから何卒そのおつもりで……。

二、その頃の生活

先ずその頃の私達の受けた教育につきて申上げてみましょうか——時代が時代ゆえ、教育はもう至つて簡単なもので、学問は読書、習字、又歌道一通り、すべて家庭で修めました。武芸は主に薙刀の稽古、母がよく薙刀を使いましたので、私も小供の時分からそれを仕込まれました。その頃は女でも武芸一通りは稽古したものでございませぬ。処女時代に受けた私の教育というのは大体そんなもので、馬術は後に三浦家へ嫁入りしてから習いました。最初私は馬に乗るのが厭でございましたが、良人から『女子でもそれ位の事は要る』と言われ、それから教えてもらいました。実際にやってみると馬は至つて穏和しいもので、私は大へん乗馬が好きになりました。乗馬袴を穿いて、すっかり服装がかわり、白鉢巻をするのです。主に城内の馬場で稽古したのですが、後には乗馬で鎌倉へ実家帰りをしたこともございます。従者も男子の

みでは困りますので、一人の腰元にも乗馬の稽古を致させました。その頃ちよつと外に出るにも、少くとも四五人の従者は必らずついたもので……。

今度はその時分の物見遊山のお話なりといたしましょうか。物見遊山と申してもそれは至つて單純なもので、普通はお花見、汐干狩、神社仏閣詣で……そんな事は只今と大した相違もないでしょうが、ただ當時の男子にとりて何よりの娯樂は猪狩り兎狩り等の遊びでございました。何れも手に手に弓矢を携え、馬に跨つて、大へんな騒ぎで出掛けたものでございます。父は武人ではないのですが、それでも山狩りが何よりの道樂なものでした。まして筋骨の逞ましい、武家育ちの私の良人などは、三度の食事を一度にしてもよい位の熱心さでございました。『明日は大楠山の巻狩りじや』などと布達が出ると、乗馬の手入れ、兵糧の準備、狩子の勢揃い、まるで戦争のような大騒ぎでございました。

そうそう風流な、やさしい遊びも少しはありました。それは主として能狂言、猿樂などで、家来達の中にそれぞれその道の巧者なのが居りまして、私達も時々見物したものでございます。けれども自分でそれをやった覚えはございません。京とは異つて東国は大体武張つた遊び事が流行つたものでございますから……。

衣服調度類でございますか——鎌倉にもそうした品物売り捌く商人の店があるにはありましたが、さきほども申した通り、別に人目を引くように、品物を店頭に陳列するような事はあまりないようでございました。呉服物なども、良い品物は皆特別に織らせたもので、機織がなかなか盛んでございました。尤もごく高価の品は鎌倉では間に合わず、矢張りはあるる京に逃えたように記憶して居ります。

それから食物……これは只今の世の中よりずっと簡単なように見受けられます。こちらの世界へ来てからの私達は全然飲食をいたしませぬので、従つてこまかいことは判りませぬが、ただ私の守護しているこの女（T夫人）の平生の様子から考え見ますと、今の世の調理法が大へん手数のかかるものであることはうすうす想像されるのでございます。あの大そう甘い、白い粉……砂糖とやら申すものは、もちろん私達の時代にはなかつたもので、その頃のお菓子というのは、主に米の粉を固めた打菓子でございました。それでも薄つすりと舌に甘く感じたように覚えて居ります。又物の調味には、あの甘草という薬草の粉末を少し加えましたが、ただそれは上流の人達の調理に限られ、一般に使用するものではなかつたように記憶して居ります。むろん酒もございました……濁つては居りませぬが、しかしそう透明つたものでもなかつたよう

に覚えて居ります。それから飲料としては桜の花漬、それを湯呑みに入れて白湯をさして客などにすすめました。

斯う言つたお話は、あまりつまらな過ぎますので、何卒これ位で切り上げさせて戴きましよう。私のようなあの世の住人が食物や衣類などにつきて遠い遠い昔の思い出語りをいたすのは何やらお門違いをしているようで、何分にも興味が乗らないで困つてしまいます……。

三、興入れ

やがて私の娘時代にも終りを告ぐべき時節がまいりました。女の一生の大事はいうまでもなく結婚でございまして、それが不幸、運不運の大きな岐路となるのでございしますが、私とてもその型から外れる訳にはまいりませんでした。私の三浦へ嫁ぎましたのは丁度二十歳の春で、山桜が真盛りの時分でございました。それから荒井城内の十幾年の武家生活……随分楽しかった思い出の種子もないではございませぬが、何を申してもその頃は殺伐な空気の漲つた戦国時代、北條某とやら申す老

るなりあがもの戦鬪を挑まれ、幾度かはげしい合戦の拳句の果が、あの三年
 猶い成上り者から戦鬪を挑まれ、幾度かはげしい合戦の拳句の果が、あの三年
 越しの長の籠城、とうとう武運拙く三浦の一族は、良人をはじめとして殆んど全部城
 まくらうちじにしま
 を枕に打死してしまいました。その時分の不安、焦燥、無念、痛心……今でこそす
 っかり精神の平静を取り戻し、別にくやしいとも、悲しいとも思わなくなりましたが、
 とうじわたくしむね
 当時の私どもの胸には正に修羅の業火が炎々と燃えて居りました。恥かしながら私は一
 じかみさまうら
 時は神様も怨みました……人を呪いもいたしました……何卒その頃の物語り丈は差控
 えさせて戴きます……。

おおえけひとりむすめなぜよそとつ
 大江家の一人娘が何故他家へ嫁いだか、と仰せでございますか……あなたの誘い出し
 のお上手なものにはほんとうに困つて了います……。ではホンの話の筋道だけつけて了
 うことに致しましょう。現世の人間としては矢張り現世の話に興味を有たるか存じ
 ませぬが、私どもの境涯からは、そう言った地上の事柄はもう別に面白くも、
 おかしくも何ともないのでございます……。
 わたくしみうけよめい
 私が三浦家への嫁入りにつきましては別に深い仔細はございません。良人は私の父が見
 込んだのでございます。『たのもしい人物じゃ。あれより外にそちが良人と冊くべきも
 こ
 のはない……』ただそれっきりの事柄で、私はおとなしく父の仰せに服従したまで

でございます。現代いまのよの人達ひとたちから頭脳あたまが古いと思おもわれるか存ぞんじませぬが、古いにも、新しいにも、それがその時代じだいの女おんなの道みちだったのでございます。そして父ちちのつもりでは、私わ達夫婦たぐしたちうふの間に男児あいだ だんしが生うまれたら、その一人ひとりを大江家おおえけの相續者そうぞくしゃに貰もらい受うける下心したごころだつたらしいのでございます。

見合みあいでございますか……それは矢張り見合みあいもいたしました。良人おつとの方ほうから実家さとへ訪たずねてまいったように記憶きおくして居おります。今いまも昔むかも同じこと、私わたしは両親りやうしんから召よばれて挨拶あいさつに出でたのでございます。その頃良人ころおつとはまだ若わこうございました。たしか二十五歳さい、横よこた縦てそろ揃そろつた、筋骨きんこつの逞たくまましい大柄おおがらの男子おとこで、色いろは余あまり白しろい方ほうではありません。目鼻立めはなだち尋常じんじよう、髭ひげはなく、どちらかといえは面長おもながで、眼尻めじりの釣つつた、きりつとした容貌かおだちの人ひとでした。ナニ歴史れきしに八十人にんじき力ちからの荒武者あらむしやと記しるしてある……ホホホ良人おつとはそんな怪物ばけものではございません。弓馬きゆうばの道みちに身みを入れる、武張ぶばつた人ひとではございましたが、八十人にんじき力ちからなどというのは嘘うそでございます。氣立きだても存外ぞんがい優やさしかつた人ひとで……。

見合みあいの時ときの良人おつとの服装ふくそうでございませう——服装ふくそうはたしか狩衣かりぎぬに袴はかまを穿はいて、お定さだまりの大だい小しょう二腰ふたこし、そして手てには中啓ちゆうけいを持もつて居おりました……。

婚礼こんれいの式しきのことは、それは何卒どうぞおきき下さらないで……格別かくべつ変かわつたこともございま

せん。調度類は前まえ以て先方せんぽうへ送り届けて置いて、後あとから駕籠かごにのせられて、大きな
 行列ぎやうれつを作つくつて乗り込んだまでの話はなしで……式しきはもちろん夜分やぶんに挙げたのでございませう。
 すべては皆夢みなゆめのようで、今更いまさらその当時とうじを想い出して見たところみで何なんの興味きやうみも起りませ
 ん。こちらの世界せかいへ引越ひきこして了しまへば、めいめい向むきが異ちがつて、ただ自分じぶんの歩あゆむべき途みちを一
 心不亂しんぷらんに歩あゆむ丈あゆ、従したがつて親子おやこも、兄弟きやうだいも、夫婦ふうふも、こちらではめつたにつきあいをし
 ているものではございませぬ。あなた方もいずれはこちらの世界せかいへ引移ひきうつつて来こられるで
 しょうが、その時ときになれば私わたくしどもの現在げんざいの心持こころもちがだんだんお判わかりになります。『そ
 んな時代じだいもあつたかナ……』遠とおい遠とおい現世げんせの出来事できごとなどは、ただ一片ぺんの幻影げんえいと化かしてしま
 います。現世げんせの話はなしは大概たいがいこれで宜よろしいでしょう。早はやくこちらの世界せかいの物語ものがたりに移うつりた
 いと思おもいますか……。

ナニ私わたくしが死ぬる前後ぜんごの事情じしようを物語ものがたれと仰おほつしやるか……。それではごく手短てみじかにそれ
 だけ申もうしあ上げることに致いたしましょう。今度こんどこそ、いよいよそれつきりでおしまいでござい
 ます……。

四、落城から死

足掛三年に跨る籠城……月に幾度となく繰り返される夜打、朝駆、矢合わせ、切り合い……どつと起る喊の声、空を焦す狼火……そして最後に武運いよいよ尽きてのあの落城……四百年後の今日思い出してみる丈でも気が滅入るように感じます。

戦鬪が始まってから、女子供はむろん皆城内から出されて居りました。私の隠れていた所は油壺の狭い入江を隔てた南岸の森の蔭、そこにホンの形ばかりの仮家を建てて、一族の安否を気づかいながら侘すまいをして居りました。只今私が祀られてあるあの小桜神社の所在地——少し地形は異いましたが、大体あの辺だったのでございます。私はそこで対岸のお城に最後の火の手の挙るのを眺めたのでございます。『お城もとうとう落ちてしまった……最早良人もこの世の人ではない……憎ツクき敵……女ながらもこの怨みは……。』

その時の一念は深く深く私の胸に喰い込んで、現世に生きている時はもとよりのこと、死んでから後も容易に私の魂から離れなかつたのでございます。私がどうやらその後人並みの修行ができて神心が湧いてまいりましたのは、偏に神様のおさとしと、それから私のために和やかな思念を送つてくださった、親しい人達の祈願の賜なのでご

ざいます。さもなければ私などはまだなかなか済すくわれる女性じよせいではなかったかも知れませぬ……。

兎とにも角かくにも、落城らくじよう後の私は女おんなながらも再さい拳きよをはか図るつもりで、僅わずばかりの忠義ちゆうぎな従者じゆしやに護まもられて、あちこちに身を潜ひそめて居おりました。領地りようちない内の人民じんみんも大へん私わたくしに對して親切しんせつにかばってくれました。――が、何を申まうしても女の細腕おんなほそうで、力ちからと頼たのむ一族ぞく郎党ろうとうの数かずもよくよく残のこり少すくなになつて了しまつたのを見みましては、再さい拳きよの計劃けいかくの到底とうてい無益むやくであることが次第しだい次第しだいに判わかつてまいりました。積つもる苦勞くろう、重かさなる失望しつぼう、ひしひしと骨身ほねみにしみる寂さびしさ……私の軀わたくしからだはだんだん衰すい弱じやくしてまいりました。

幾月いくつきかを過すごす中に、敵てきの監視みはりもだんだん薄うすらぎましたので、私は三崎わたくしみさきの港みなとから遠とおくもない、諸磯もろいそと申もうす漁村ぎよそんの方ほうに出てまいりましたが、モ―その頃の私ころわたくしには世よの中なかが何なにやら味気あじけなく感じかんられて仕しようがないのでした。

実家さとの両親りやうしんは大へんに私の身わたくしみの上うえを案あんじてくれました、しのびやかに私の仮宅わたくしかりずまいを訪おとずれ、鎌倉かまくらへ歸かえれとすめてくださるのでした。『良人おつともなければ、家いえもなく、又跡またあとをつぐべき子供こどもとてもない、よくよくの独り身ひとりみ、兎も角かくも鎌倉かまくらへ戻もどつて、心こころ静しずかに余生よせいを送おくるのがよいと思うおもうが……。』いろいろ言葉ことばを尽つくしてすすめられたのでありますが、

私わたくしとしては今更いまさら親元おやもとへもどる氣持きもちにはドーあつてもなれないのでした。私わたくしはきつぱりと断ことわりました。――

『思おぼしめし召めしはまことに有難ありがとうございますが、一たん三浦家みうらけへ嫁とつぎました身みであれば、再びふたたびこの地ちを離はなれたくは思おもひませぬ。私わたくしはどこまでも三崎みさきに留とどまり、亡なき良人おつとをはじめ、

一族ぞくの後あとを弔とむらうたいのでございます……。』

私わたくしの決心けっしんの飽あくまで固かたいのを見て、両親りやうしんも無下むげに歸家きかをすすめることもできず、そのまま空むなしく引取ひきとつて了しまりました。そして間まもなく、私わたくしの住宅すまいとして、海うみから二三丁ちよみ引込つこんだ、小高こたかい丘おかに、土塀どべいをめぐらした、ささやかな隠宅いんたくを建ててくださいました。私わたくしはそこで忠実ちゆうじつな家来けらいや腰元こしもとを相手あいてに余生よせいを送り、そしてそこでさびしくこの世よの氣い息きを引き取とつたのでございます。

落城らくじようご後それが何年なんねんになるかと仰おツしやるか――それは漸ようやく一年余ねんあまり私わたくしが三十四歳さいの時ときでございました。まことに短命たんめいな、つまらない一生しやうがい涯はでありました。

でも、今いまから考かんがえれば、私わたくしにはこれでも生前せいぜんから幾いくらか靈覺れいかくのようなものが恵めぐまれていたらしいのでございます。落城らくじようご後間もなく、城跡しろあとの一部ぶに三浦一族みうらぞくの墓はかが築きずかれましたので、私わたくしは自分の住居じゆうきよからちよいちよい墓参ぼさんをいたしましたが、墓はかの前まえで眼めを瞑つむつ

て拜おがんで居おりますと、良人おとの姿すがたがいつもありありと眼めに現あらわれるのでございます。当時の
 私わたくしは別に深ふかくは考かんがえず、墓はかに詣まいれば誰だれにも見みえるものであらう位くらいに思おもっていました。私わたくしが
 三浦みうらの土地とちを離はなれる氣きがしなかつたのも、つまりはこの事ことがあつた為ためでございました。
 とうじわたくしと
 当時の私わたくしに取りましては、死しんだ良人おとに逢あうのがこの世よに於おける、殆ほとんど唯ゆい一の慰い安あん、
 殆ほとんど唯ゆい一の希き望ぼうだつたのでございます。『何なんとしても爰ここから離はなれたくない……』私わたくしは
 一ずにそう思おもひ込こんで居おりました。私わたくしは別に婦道ふどうが何どうの、義理ぎりが斯こうのと言いつて、六ヶ
 しい理窟りくつから割わり出だして、三浦みうらに踏ふみとどまつた訳わけでも何なんでもございませぬ。ただそうし
 たいからそうしたまでの話はなしに過すぎなかつたのでございます。
 でも、私わたくしが死ぬしるまで三浦家みうらけの墳墓ふんぼの地ちを離はなれなかつたという事ことは、その領地りょうちの人じん
 民みんの心こころによほど深ふかい感かん動どうを与あたえたやうでございました。『小櫻姫こざくらひめは貞女ていじよの亀鑑かがみで
 ある』などと、申もうしまして、私わたくしの死し後ごに祠堂やしろを立て神かみに祀まつつてくれました。それが現いまも
 残のこっている、あの小桜神社こざくらじんじやでございませぬ。でも右申みぎもうしあ上げたとおわたくしり、私わたくしは別べつに貞女ていじよ
 の亀鑑かがみでも何なんでもございませぬ。私わたくしはただこまでも自じ分ぶんの勝手かつてを通とした、一本氣ほんきの女じよせ
 性せいだつたに過すぎないのでございませぬ。

五、臨終

きのすすまぬ現世時代の話も一通り片づいて、私は何やら身が軽くなつたように感じ
 ます。そちらから御覧になつたら私達の住む世界は甚だたよりのないように見えるか
 も知れませぬが、こちらから現世を振りかえると、それは暗い、せせこましい、空虚な世
 界——何う思い直して見ても、今更それを物語ろうという気分にはなり兼ねます。とり
 わけ私の生涯などは、どなたのよりも一層つまらない一生だったのでございますから
 ……。

え、まだ私の臨終の前後の事情がはつきりしていないと仰つしやるか……：そういう
 えばホンにそうでございます。では致方がございませぬ、これから大急ぎで、ひと
 とお通しそれを申上げて了うことに致しましょう。
 まえの
 前にも述べたとおり、私の軀はだんだん衰弱して来たのでございます。床について
 もさつぱり安眠ができません……箸を執つても一向食物が喉に通らない……：心の中は
 ただむしやくしや……、口惜しい、怨めしい、味気ない、さびしい、なさけない……：何が
 なに
 何やら自分にもけじめのない、さまざまの妄念妄想が、暴風雨のように私の衰えた軀

の内うちをかけめぐって居いるのです。それにお恥はずかしいことには、持もって生うまれた負まけずぎらい
 の気き性しょう、内ない実じつは弱よわいくせに、無む理りにも意い地じを通とうとして居いるのでございませうから、
 つまりは自分じぶんで自分じぶんの身みを削けずるようなもの、新あたしい住居じゅうきに移うつってから一年ねんとも経たたない中うち
 に、私わたくしはせめてもの心こころ遣やりなる、あのお墓はかまい参まゐりさえもできないまでに、よくよく憔悴やみほう
 けて了しまいました。一ひとと口くちに申もうしたらその時じぶん分の私わたくしは、消きえかかった青松葉あおまつばの火ひが、プス
 プスと白しろい煙けむりを立て燻たてつているような塩梅あんばいだったのでございます。
 わたくしおもまくらつ 私が重おもい枕まくらに就ついて、起居たちいも不自由ふじゆうになつたと聞きいた時に、第一だいいちに馳はせつけて、なに
 くれと介抱かいほうに手てをつくしてくれましたのは矢張やはり鎌倉かまくらの両親りょうしんでございました。
 『斯こうかけ離はなれて住すんで居いては、看護みとりに手てが届とどかんで困こまるのじやが……。』めつきり小髻こびん
 に白しろいものが混まじるようになった父ちちは、そんな事ことを申もうして何なにやら深ふかい思案しあんに暮くれるのでした。
 おおかた内心ないしんでは私わたくしの事ことを今いまからでも鎌倉かまくらに連つれ戻もどりたかつたのでございましたらう。
 大方きしょう 気性かの勝かつた母ははは、口くちに出だしては別べつに何なんとも申もうしませんでしたが、それでも女おんなは矢張やはり
 女おんな、小蔭こかげへまわってそつと泪なみだを拭ぬぐいて長太息といきを漏もらしているのでございました。
 『いつまでも老おいたる両親りょうしんに苦勞くろうをかけて、自分じぶんは何なんという親不孝おやふこう者ものであらう。
 いつそのことすべてをあきらめて、おとなしく鎌倉かまくらへ戻もどって専心せんしん養生ようじょうにつとめよ

うかしら……。』そんな素直な考えも心のどこかに囁かないでもなかったのですが、次ぎの瞬間には例の負けざらいが私の全身を包んで了うのでした。『良人は自分の眼の前で打死したではないか……。憎いのはあの北條……縦令何事があるうとも、今更おめおめと親許などに……。』

鬼の心になり切った私は、両親の好意に背き、同時に又天をも人をも怨みつづけて、生甲斐のない日子を算えていましたが、それもそう長いことではなく、いよいよ私にとりて地上生活の最後の日が到着いたしました。

現世の人達から観れば、死というものは何やら薄気味のわるい、何やら縁起でもないものに思われるでございましょうが、私どもから観れば、それは一足の蛾が繭を破つて脱け出るのにも類した、格別不思議とも無気味とも思われない、自然の現象に過ぎませぬ。従つて私としては割合に平気な気持で自分の臨終の模様をお話しすることができるのでございます。

四百年も以前のこと、大変記憶は薄らぎましたが、ざっと私のその時の実感を述べますと——何よりも先ず目立つて感じられるのは、気がだんだん遠くなつて行くことで、それは丁度、あのうたた寝の気持——正気のあるような、又無いような、何んとも

言えぬうつらうつらした気分なのでございます。傍からのぞけば、顔が痙攣たり、冷たい脂汗が滲み出たり、死ぬる人の姿は決して見よいものではございませんが、自分が死んで見ると、それは思いの外に楽な仕事でございます。痛いも、痒いも、口惜しいも、悲しいも、それは魂がまだしっかりと軀の内部に根を張っている時のこと、臨終が近づいて、魂が肉のお宮を出たり、入ったり、うろろろするようになりますは、それ等の一切はいつとはなしに、何所かえ消える、というよりか、寧ろ遠のいて了います。誰かが枕辺で泣いたり、叫んだりする時にはちよつと意識が戻りかけますが、それとてホンの一瞬の間で、やがて何も彼も少しも判らない、深い深い無意識の雲霧の中へとくぐり込んで了うのです。私の場合には、この無意識の期間が二三日つづいたと、後で神さまから教えられました、どちらかといえ二三日というのは先ず短い部類で、中には幾年幾十年と長い長い睡眠をつづけているものも稀にはあるのでございます。長いにせよ、又短かにせよ、兎に角この無意識から眼をさました時が、私たちの世界の生活の始まりで、舞台がすっかりかわるのでございます。

六、幽界の指導者

いよいよこれから、こちらの世界のお話になります、最初はまだ半分足を現世にかけているようなもので、矢張り娑婆臭い、おきき苦しい事実ばかり申上げることにになりそうでございます。——ナニその方が人間味があつて却つて面白いと仰つしやるか……。御冗談でございます。話すものの身になれば、こんな辛い、恥かしいことはないのです……。

これは後で神様からきかされた事でございますが、私は矢張り、自力で自然に眼を覚ましたというよりか、神さまのお力で眼を覚まして戴いたのだそうでございます。その神さまというのは、大國主神様のお指図を受けて、新しい歸幽者の世話をしてくださる方なのでございます。これにつきては後で詳しく申上げますが、兎に角新たに幽界に入つたもので、斯う言つた神の神使、西洋で申す天使のお世話に預からないものは一人もございませんので……。

幽界で眼を覚ました瞬間の気分でございますか——それはうつとりと夢でも見ているような氣持、そのくせ、何やら心の奥の方で『自分の居る世界はモ―異つて……』と言つた、微かな自覺があるのです。四辺は夕暮の色につつまれた、いかにも森

閑とした、丁度山寺にでも臥て居るような感じでございます。

そうする中に私の意識は少しづつ回復してまいりました。

『自分はとうとう死んで了ったのか……。』

死の自覚が頭脳の内部ではつきりすると同時に、私は次第に激しい昂奮の暴風雨の中に

にまき込まれて行きました。私が先ず何よりつらく感じたのは、後に残した、老いたる両

親のことでした。散々苦勞ばかりかけて、何んの報ゆるところもなく、若い身上で、

先立つてこちらへ引越して了った親不孝の罪、こればかりは全く身を切られるような思

いがするのです。『済みませぬ済みませぬ、どうぞどうぞお許しくださいませ……。』何

回私はそれを繰り返して血の涙に咽んだことでしよう！

そうする中にも私の心は更に他のさまさまの暗い考えに掻き乱されました。『親にさえ

背いて折角三浦の土地に踏みとどまりながら、自分は遂に何の仕出かしたこともなかつ

た！何んという腑甲斐なさ……。何んという不運の身の上……。口惜しい……。悲しい……。情

けない……。』何が何やら、頭脳の中はただごちやごちやするのみでした。

そうかと思えば、次ぎの瞬間には、私はこれから先きの未知の世界の心細さに

慄い戦っているのです。『誰人も迎えに来てくれるものはないのかしら……。』私はま

るで真暗闇の底無しの井戸の内部へでも突き落されたように感ずるのでした。

ほとんど気でも狂うかと思われました時に、ひよくりと私の枕辺に一人の老人が姿を現しました。身には平袖の白衣を着て、帯を前で結び、何やら絵で見覚えの天人らしい姿、そして何んともいえぬ威厳と温情との兼ね具った、神々しい表情で凝乎と私を見つめて居られます。『一体これは何誰かしら……』心は千々に乱れながらも私は多少の好奇心を催さずに居られませんでした。

このお方こそ、前に私がちよつと申上げた大国主神様からのお神使なのでございます。私はこのお方の一方ならぬ導きによりて、辛くも心の闇から救い上げられ、尚おその上に天眼通その他の能力を仕込まれて、ドーやらこちらの世界で一人立ちができるようになったのでございます。これは前にものべた通り、決して私にのみ限ったことではなく、どなたでも皆神様のお世話になるのでございますが、ただ身魂の因縁とでも申しましようか、めいめいの踏むべき道筋は異なります。私などは随分きびしい、険しい道を踏まねばならなかった一人で、苦勞も一しお多かつたかわりに、幾分か他の方より早く明るい世界に抜け出ることにもなりました。ここで念の爲めに申上げて置きますが、私を指導してくだすった神様は、お姿は普通の老人の姿を執つて居られますが、

実は人間ではございませぬ。つまり最初から生き通しの神、あなた方の自然霊というもののなです。斯う言つた方のほうが、新しい帰幽者を指導するのに、まつわる何の情実もなく、人霊よりもよほど具合が宜しいと申すことでございます。

七、祖父の訪れ

私がお神使の神様から真先きに言いきかされたお言葉は、今ではあまりよく覚えても居りませぬが、大体こんなような意味のものでございました。――

『そなたはしきりに先刻から現世の事を思い出して、悲嘆の涙にくれているが、何事がありても再び現世に戻ることは協わぬのじゃ。そんなことばかり考えていると、良い境涯へはとて進めぬぞ！ これからは俺がそなたの指導役、何事もよくききわけて、尊い神さまの裔孫としての御名を汚さぬよう、一時も早く役にもたため現世の執着から離れるよう、しっかりと修行をして貰いますぞ！ 執着が残っている限り何事もだめじや……。』

が、その場合の私には、斯うした神様のお言葉などは殆んど耳にも入りませんでした。

わたくし
私はいろいろの難題を持ち出してさんざん神様を困らせました。お恥かしいことなが

ら、罪滅ぼしのつもりで一つ二つここで懺悔いたして置きます。

わたくしも
私が持ちかけた難題の一つは、早く良人に逢いたいという註文でございました。

『現世で怨みが晴らせなかったから、良人と二人力を合わせて怨霊となり、せめて仇敵を取り殺してやりたい……。』——これが神さまに向つてのお願いなのでございますか

ら、神さまもさぞ呆れ返つて了われたことでしょう。もちろん、神様はそんな註文

に应じてくださる筈はございませぬ。『他人を怨むことは何より罪深い仕業であるから許

すことはできぬ。又良人には現世の執着が除れた時に、機会を見て逢わせてつかわす……

。』いとも穩かに大体そんな意味のことを諭されました。もう一つ私が神様にお願

したのは、自分の遺骸を見せて呉れとの註文でございました。当時の私には、せめて

一度でも眼前に自分の遺骸を見なければ、何やら夢でも見て居るような気持ちで、あきら

めがつかなくて仕方がないのでした。神さまはしばし考えていられたが、とうとう私の願

いを容れて、あの諸磯の隠宅の一と間に横たわつたままの、私の遺骸をまざまざと見

せてくださいました。あの瘦せた、蒼白い、まるで幽霊のような醜く自分の姿——

私は一と目見てぞつとして了いました。『モ—結構でございます。』覚えずそう言つて

御免を蒙つて了いましたが、この事は太へん私の心を落つかせるのに効能があつたようでございました。

まだ外にもいろいろありますが、あまりにも愚かしい事のみでございしますので、一と先ずこれで切り上げさせて戴きます。現在の私とて、まだまだ一向駄眼でございしますが、帰幽当座の私などはまるで醜くい執着の凝塊、只今想い出しても顔が赭らんで了います……。

兎に角神様も斯んなきわけのない私の処置にはほとほとお手を焼かれたらしく、いろいろと手をかえ、品をかえて御指導の労を執つてくださいましたが、やがて私の祖父……私より十年ほど前に歿りました祖父を連れて来て、私の説諭を仰せつけられました。何にしろとても逢われないものと思ひ込んでいた肉親の祖父が、元の通りの慈愛に溢れた温容で、泣き悶えている私の枕辺にひよつくりとその姿を現わしたのですから、その時の私のうれしさ、心強さ！

『まあお爺さまでございますか！』私は覺えず跳び起きて、祖父の肩に取り縋つて了いました。帰幽後私の暗い暗い心胸に一点の光明が射したのは実にこの時が最初でございました。

祖父はさまざまに私をいたわり、且つ励ましてくれました。――

『そなたも若いのに歿なつて、まことに氣の毒なことであるが、世の中はすべて老少不定、壽命ばかりは何んとも致方がない。これから先きはこの祖父も神さまのお手伝として、そなたの手引きをして、是非ともそなたを立派なものに仕上げて見せるから、こちらへ来たとして決して決して心細いことも、又心配なこともない。請合つて、他の人達よりも幸福なものにしてあげる……。』

祖父の言葉には格別これと取り立てていうほどのこともないのですが、場合が場合なので、それは丁度しとすると降る春雨の乾いた地面に浸みるように、私の荒んだ胸に融け込んで行きました。お蔭で私はそれから幾分心の落付きを取り戻し、神さまの仰せにもだんだん従うようになりました。人を見て法を説くとやら、こんな場合には矢張り段違いの神様よりも、お馴染みの祖父の方が、却つて都合のよいこともあるものと見えます。私の祖父の年齢でございすか――たしか祖父は七十余りで歿りました。白哲で細面の、小柄の老人で、齒は一本なしに抜けて居ました。生前は薄い頭髮を茶筌に結っていました。幽界で私の許に訪れた時は、意外にもすっかり頭顱を丸めて居りました。私と異つて祖父は熱心な仏教の信仰者だった為めでございます……

…。

八、岩窟

話が少し後に戻りますが、この辺で一つ取りまゝとめて私の最初の修行場、つまり、私がかちらの世界で真先きに置かれました境涯につきて、一通り申述べて置くことに致したいと存じます。実は私自身も、初めてこちらの世界に眼を覚ました当座は、只一瞬に口惜しいやら、悲しいやらで胸が一ぱいで、自分の居る場所がどんな所かというような事に、注意するだけの心の余裕とでもなかつたのでございます。それに四辺が妙に薄暗くて気が滅入るようで、誰しもあんな境遇に置かれたら、恐らくあまり朗かな気分にはなれそうもないかと考えられるのでございます。

が、その中、あの最初の精神の暴風雨が次第に収まるにつれて、私の傷けられた頭脳にも少しづつ人心地が出てまいりました。うとうとしながらも私は考えました。——『私は今斯うして、たつた一人法師で寝ているが、一たいここは何んな所かしら……』私に死んだものとすれば、ここは矢張り冥途とやうに相違ないであろうが、しかし私は三途

の川らしいものを渡つた覚えはない……閻魔様らしいものに逢つた様子もない……何が何やらさっぱり腑に落ちない。モ―少し光明が射してくれると良いのだが……。』

私は少し枕から頭部を擡げて、覚束ない眼つきをして、あちこち見したのでございます。最初は、何やら濛氣でもかかつているようで、物のけじめも判りかねましたが、その中不図何所からともなしに、一条の光明が射し込んで来ると同時に、自分の置かれてある所が、一つの大きな洞穴――岩屋の内部であることに気づきました。私は、少なからずびつくりしました。――

『オヤオヤ！ 私は不思議な所に居る……私は夢を見ているのかしら……それとも爰は私の墓場かしら……。』

私は全く途方に暮れ、泣くにも泣かれないような氣持で、ひしと枕に嚙りつくより外に詮術もないのでした。

その時不意に私の枕辺近くお姿を現わして、いろいろと難有い慰めのお言葉をかけ、又何ぐれと詳しい説明をしてくださったのは、例の私の指導役の神様でした。痒い所へ手が届くと申しましようか、神様の方では、いつもチャーンとこちらの胸の中を見すかしていて、時と場合にぴったり当てはまつた事を説ききかせてくださるのでございま

すから、どんなに判りの悪い者でも最後にはおとなしく耳を傾けることになって了います。
 私などは随分我執の強い方でございますが、それでもだんだん感化されて、肉身のお祖父様のようにお慕い申上げ、勿体ないとは知りつつも、私はいつしかこの神様を『お爺さま』とお呼び申上げるようになって了いました。前にも申上げたとおり私のような者がドーやら一人前のものになることができましたのは、偏にお爺さまのお仕込みの賜でございます。全く世の中に神様ほど難有いものはございません。善きにつけ、悪しきにつけ、影身に添いて、人知れず何彼とお世話を焼いてくださるのでございます。それがよく判らないばかりに、兎角人間はわが俣が出たり、慢心が出たりして、飛んだ過失をしでかすことにもなりますので……。これはこちらの世界に引越して見ると、だんだん判つてまいります。

うつかりつまらぬ事を申上げてお手間を取らせました。私は急いで、あの時、神様が幽界の修行の事、その他に就いて私に言いきかせて下されたお話の要点を申上げることに致しましょう。それは大体斯うでございました。――

『そなたは今岩屋の内部に居ることに気づいて、いろいろ思い惑つて居るらしいが、この岩屋は神界に於いて、そなたの修行の為に特にこしらえてくだされた、難有い

道場であるから、当分比所でみつしり修行を積み、早く上の境界へ進む工夫をせねばならぬ。勿論ここは墓場ではない。墓は現界のもので、こちらの世界に墓はない……。現在そなたの眼にはこの岩屋が薄暗く感ずるであらうが、これは修行が積むにつれて自然に明るくなる。幽界では、暗いも、明るいもすべてその人の器量次第、心の明るいものは何所に居ても明るく、心の暗いものは、何所へ行つても暗い……。先刻そなたは三途の川や、閻魔様の事を考えていたらしいが、あれは仏者の方便である。嘘でもないが又事実でもない。あのようなものを見せるのはいと容易いがただ我國の神の道として、一切方便は使わぬことにしてある……。そなたはただ一人この道場に住むことを心細いと思うてはならぬ。入口には注連縄が張つてあるので、悪魔外道の類は絶対に入ることはできぬ。又たとえ何事が起つても、神の眼はいつも見張つているから、少しも不安を感ずるには及ばぬ……。すべて修行場は人によりてめいめい異う。家屋の内部に置かるるものもあれば、山の中に置かるる者もある。親子夫婦の間柄でも、一所には決して住むものでない。その天分なり、行状なりが各異うからである。但し逢おうと思えば差支ない限りいつでも逢える……。』

一応お話が終った時に、神様はやおら私の手を執つて、扶け起こしてくださいました。

『そなたも一つ元氣を出して、歩いて見るがよい。病氣は肉体のもので、魂に病氣はない。これから岩屋の模様を見せてつかわす……。』

私はついふらふらと起き上りましたが、不思議にそれつきり病人らしい氣持が失せて了い、同時に今迄敷いてあつた寢具類も烟のように消えて了いました。私はその瞬間から現在に至るまで、ただの一度も寢床の上に臥たいと思つた覚えはございません。

それから私は神様に導かれて、あちこち歩いて見て、すっかり岩屋の内外の模様を知ることができました。岩屋は可なり巨きなもので、高さとは幅さは凡そ三四間、奥行は十間余りもございました。そして中央の所がちよつと折れ曲つて、斜めに外に出るようになつて居ります。岩屋の所在地は、相当に高い、岩山の麓で、山の裾をくり抜いて造つたものでございました。入口に立つて四辺を見ると、見渡す限り山ばかりで、海も川も一つも見えません。現界の景色と比べて別に格段の相違もありませぬが、ただこちらの景色の方がどことなく淨らかで、そして奥深い感じが致しました。岩屋の入口には、神様の言われましたとおり、果たして新しい注連縄が一筋張つてありました。

九、神鏡

ひと通り見物が済むと、私達は再び岩屋の内部へ戻つて来ました。すると神様は私に向い、早速修行のことにきて、囁んでくくめるようにいろいろと説きさとしてくださるのでした。

『これからのそなたの生活は、現世のそれとはすっかり趣が変るから一時も早くそのつもりになつてもらわねばならぬ。現世の生活にありては、主なるものが衣食住の苦労、大概の人間はただそれきりの事にあくせくして一生を過して了うのであるが、こちらでは衣食住の心配は全然ない。大肉体あつての衣食住で、肉体を棄てた幽界の住人は、できる丈早くそうした地上の考えを頭脳の中から払いのける工夫をせなければならぬ。それからこちらの住人として何より慎まねばならぬは、怨み、そねみ、又もろもろの欲望……そう言つたものに心を奪われるが最後、つまりは幽界の亡者として、いつまで経つても浮ぶ瀬はないことになる。で、こちらの世界で、何よりも大切な修行というのは精神の統一で、精神統一以外には殆んど何

にも物もないといえる。つまりこれは一心不乱に神様を念じ、神様と自分を一体にまとめて了って、他の一切の雑念妄想を払いのける工夫なのであるが、実地に行つて見ると、これは思ひの外に六ヶしい仕事で、少しの油断があれば、姿はいかに殊勝らしく神様の前に坐つていても、心はいつしか悪魔の胸に通つてゐる。内容よりも外形を尙ぶ現世の人の眼は、それで結構くらませることができて、こちらの世界ではそのごまかしはきかぬ。すべては皆神の眼に映り、又或る程度お互の眼にも映る……。で、これからそなたも早速この精神統一の修行にかからねばならぬが、もちろん最初から完全を望むのは無理で、従つて或る程度の過失は見逃しもするが、眼にあまる所はその都度きびしく注意を与えるから、そなたもその覚悟で居てもらいたい。又何ぞ望みがあるなら、今の中に遠慮なく申出るがよい。無理のないことであるならすべて許すつもりであるから……。』

ようや漸く寢床を離れたと思えば、モ一すぐこのようなきびしい修行のお催促で、そのときわたくしづいぶんつら時の私は随分辛いことだ、と思ひました。その後こちらで様子を窺つて居りますと、人によりては随分寛やかな取扱ひを受け、まるで夢のような、呑気らしい生活を送つてゐるものも沢山見受けられますが、これはドーいう訳か私にもよく判りませぬ。私

などはとりわけ、きびしい修行を仰せつけられた一人のようで、自分ながら不思議で
なりませぬ。矢張りこれも身魂の因縁とやら申すものでございましょうか……。

それは兎も角も、私は神様から何ぞ望みのものを言えと言われ、いろいろと考え抜いた末にたつた一つだけ註文を出しました。

『お爺さま、何うぞ私に一つの御神鏡を授けて戴き度う存じます。私はそれを御神体としてその前で精神統一の修行を致そうと思ひます。何かの目標がないと、私にはとても神様を拜むような気分になれそうもございませぬ……。』

『それは至極尤もな願ひじや、直ちにそれを戴いてつかわす。』

お爺さまは快く私の願ひを入れ、ちよつとあちらを向いて黙禱されましたが、モータの瞬間には、白木の台座の附いた、一体の御鏡がお爺さまの掌に載っていました。右の御鏡は早速岩屋の奥の、程よき高さの壁の凹所に据えられ、私の礼拝の最も神聖な目標となりました。それからモータ四百余年、私の境涯はその間に幾度も幾度も変わりましたが、しかし私は今も尚おその時戴いた御鏡の前で静座黙禱をつづけて居るのでございます。

十、親子の恩愛

参考の爲めに少し幽界の修行の模様をききたいと仰つしやいますか……。宜しうございます。私の存じていることは何なりとお話し致しますが、しかし現界で行るのと格別の相違もございますまい。私達とて矢張り御神前に静座して、心に天照すおおみかみさまの御名を唱え、又八百万の神々にお願ひして、できる丈きたない考えを払ひのける事に精神を打ち込むのでございます。もとより肉体はないのですから、現世で行るような、齋戒沐浴は致しませぬ。ただ齋戒沐浴をしたと同一の淨らかな氣持になればよいのでございまして……。

それで、本當に深い深い統一状態に入つたとなりますと、私どもの姿はただ一つの球になります。ここが現世の修行と幽界の修行との一ばん目立つた相違点かも知れませぬ。人間ではどんなに深い統一に入つても、軀が残りません。いかに御本人が心で無と觀じましても、側から觀れば、その姿はチャーンと其所に見えて居ります。しかるに、こちらでは、眞実の精神統一に入れば、人間らしい姿は消え失せて、側からのぞいても、たつた一つの白っぽい球の形しか見えませぬ。人間らしい姿が

残^{のこ}つて居るようでは、まだ修^{しゆぎ}行^{ぎやう}が積^つんでいない何^{なに}よりの証^{しょうこ}拠^こなのでございます。

『そなたの、その醜^{みにく}るしい姿^{すがた}は何^{なん}じや！ まだ執^{しゆう}着^{じやく}が強^{つよ}過^くぎるぞ……。』私^{わたくし}は何^{なん}度^ど醜^{みにく}るし

い姿^{すがた}をお爺^{じいさま}様^{さま}に見^みつけられてお叱^こ言^{ごん}を頂^{ちやうだい}戴^{だい}したか知^しれませぬ。自分^{じぶん}でも、こんな事^{こと}

では駄^だ目^めであると思^{おも}い返^{かえ}して、一生^{しやうげんめい}懸^{けん}命^{めい}神^{かみ}様^{さま}を念^{ねん}じて、飽^{あく}まで浄^{きよ}らかな氣^き分^{ぶん}を続^{つづ}けよ

うとあせるのでございしますが、あせればあせるほど、チラリチラリと暗^{くら}い影^{かげ}が射^さして来^きて

統^{とう}一^{いつ}を妨^{さまた}げて了^{しま}います。私^{わたくし}の岩^{いわ}屋^やの修^{しゆぎ}行^{ぎやう}というのは、つまり斯^こうした失^{しつぱい}敗^{はい}とお叱^こ

言^{ごん}の繰^くりかえしで、自分^{じぶん}ながらほとほと愛^{あい}想^{そう}が尽^つきる位^{くらい}でございしました。私^{わたくし}というものは

よくよく執^{しゆう}着^{じやく}の強^{つよ}い、罪^{つみ}の深^{ふか}い、女^{じよ}性^{せい}だつたのでございましょう。——この生^{せい}活^{かつ}が何^な

年^{ねん}位^{くらいつづ}続^{つづ}いたかとお訊^{たず}ねでございますか……。自分^{じぶん}では一切^{さいむちゆう}夢^む中^{ちゆう}で、さほどに永^{なが}い

とも覚^{おぼ}えませんでした、後^{あと}でお爺^{じい}さまから伺^{うかが}いますと、私^{わたくし}の岩^{いわ}屋^やの修^{しゆぎ}行^{ぎやう}は現^{げん}世^せの年^ね

数^{すう}にして、ざつと二十年^{ねんあま}余^{あま}りだつたとの事^{こと}でございます。

現^{げん}世^せ的^{てき}執^{しゆう}着^{じやく}の中^{なか}で、私^{わたくし}にとりて、何^{なに}よりも断^たち切^きるのに骨^{ほね}が折^おれましたのは、前^{まへ}申^{もう}す

とお^や矢^や張^はり、血^ちを分^わけた両^{りやうしん}親^{たい}に對^{たい}する恩^{おん}愛^{あい}でございしました。現^{げん}世^せで何^{なん}一つ孝^{こう}

行^{ぎやう}らしい事^{こと}もせず、ただ一人^{ひとり}先^{さき}立^たつてこ^こちらの世界^{せかい}に引^ひ越^こして了^{しま}つたのかと考^{かんが}えますと、

何^{なん}ともいえずつらく、悲^{かな}しく、残^{のこ}り惜^おしく、相^{あい}濟^すまなく、坐^いても立^たつても居^お居^おられないよう

に感ぜられるのでございました。人間何がつらいと申しても、親と子とが順序をかえて死ぬるほど、つらいことはないように思われます。無論私には良人に対する執着もございしました。しかし良人は私よりも先きに歿なつて居り、それに又神さまが、時節が来れば逢わしてもやると申されましたので、そちらの方の断念は割合早くつきました。ただ現世に残した父母の事はどうあせりましてもあきらめ兼ねて悩み抜きました。そんな場合には、神様も、精神統一も、まるきりあつたものではございませぬ。私はよく間近の岩へ齧りついて、悶え泣きに泣き入りました。そんな真似をしたところで、一たん死んだ者が、とても現世へ戻れるものでない事は充分承知して居るのですが、それで矢張り止めることができないのでございます。

しかも何より困るのは、現世に残っている父母の悲嘆が、ひしひしと幽界まで通じて来ることでございました。両親は怠らず、私の墓へ詣でて花や水を手向け、又十日祭とか、五十日祭とか申す日には、その都度神職を招いて鄭重なお祭祀をしてくださるのでした。修行未熟の、その時分の私には、現界の光景こそ見えませんでしたが、しかし両親の心に思つていられることは、はつきりとこちらに感じて参るばかりか、『姫や姫や!』と呼びながら、絶え入るばかりに泣き悲しむ母の音声までも響

いて来るのでございます。あの時分のことは今想ひ出しても自ずと涙がこぼれます……。斯う言つた親子の情愛などと申すものは、いつまで経つてもなかなか消えて無くなるものではないようで、私は現在でも矢張り父は父としてなつかしく、母は母として慕わしく感じます。が、不思議なもので、だんだん修行が積むにつれて、ドーやら情念の発作を打消して行くのが上手になるようでございます。それがつまり向上なのでございましょうかしら……。

十一、守刀

軀がなくなつて、こちらの世界に引移つて来ても、現世の執着が容易に除れるものではない事は、すでに申上げましたが、序でにもう少しここで自分の罪過を申上げて置くことに致しましょう。口頭ですつかり悟つたようなことを申すのは何でもありませんが、実地に當つて見ると思ひの外に心の垢の多いのが人間の常でございます。私も時々こちらの世界で、現世生活中に大へん名高かつた方々にお逢ひすることがございますが、そうきれいに魂が磨かれた方ばかりも見当りませぬ。『あんな名僧知識と謳われた

方がまだこんな薄暗い境涯に居るのかしら……。『時々意外に感ずるような場合もあるのでございます。』

さてお約束の懺悔でございますが、私にとりて、何より身にしみているのを一つお話し致しましょう。それは私の守刀の物語でございます。忘れもしませぬ、それは私が三浦家へ嫁入りする折のことでございました、母は一振りの懐剣を私に手渡し、『これは由緒ある御方から母が拝領の懐剣であるが、そなたの一生の慶事の記念に、守刀としてお譲りします。肌身離さず大切に所持してもらいます……。』

両眼に涙を一ぱい溜めて、赤心こめて渡された記念の懐剣——それは刀身とい、又装具といい、まことに申分のない、立派なものでございましたが、しかし私に取りましては、懐剣そのものよりも、それがなつかしい母の形見であることが、他の何物にもかえられぬほど大切なのでございました。私は一生涯その懐剣を自分の魂と思つて肌身に附けて居たのでした。

いよいよ私の病勢が重つて、もうとても難しいと思われました時に、私は枕辺に坐つて居られる母に向かつて頼みました。『私の懐剣は何卒このまま私と一緒に棺の中に納めて戴きとうございますが……。』すると母は即座に私の願を容れて、『その通りに

してあげますから安心するうちに……。』と、私の耳元に口を寄せて力強く囁いてくださいました。

私がこちらの世界に眼を覚ました時に、私は不図右の事柄を想い出しました。『母はあんなに固く請合つてくださったが、果して懐剣が遺骸と一緒に墓に収めてあるかしら……。』『そう思うと私はどうしてもそれが気懸りで耐らなくなりました。とうとう私はある日指導役のお爺様に一伍一什を物語り、『若しもあの懐剣が、私の墓に収めてあるものなら、どうぞこちらに取寄せて戴きたい。生前と同様あれを守刀に致し度うございます……。』とお依みました。今の世の方々には守刀などと申しても、或は頭に力強く響かぬかも存じませぬが、私どもの時代には、守刀はつまり女の魂、自分の生命から二番目の大切な品物だったのでございます。神様もこの私の願を無理からぬ事と思召めされたか、快くお引受けしてくださいました。そして例のとおり、ちよつと精神の統一をして私の墓を透視されましたが、すぐにお判りになったものと見え『フムその懐剣なら確かに彼所に見えている。宜しい神界のお許しを願つて、取寄せてつかわす……。』

そう言われたかを見ると、次ぎの瞬間には、お爺さまの手の中に、私の世にも懐か

しい懐劍かいけんが握にぎられて居おりました。無論むろんそれは言いわば刀かたなの精せいだけで、現世げんせの刀かたなではないのでございましょうが、しかしいかに査しらべて見みても、金粉きんぶんを散ちらした、濃こい朱塗しゆぬりの装具つくりといい、又またそれを包つつんだ真紅しんくの錦欄きんらんの袋ふくろといい、生前せいぜん現世げんせで手慣てなれたものに寸分すんぶんの相違そうゐもないのでした。私わたくしは心こころからうれしくお爺様じいさまに厚あつくお礼れいを申もう上げました。私わたくしは右みぎの懐劍かいけんを現在げんざいにとても大切たいせつに所持しよじして居おります。そして修しゆぎ行ぎやうの時ときにはいつも之これを御鏡みかがみの前まえへ備そなへることにして居おるのでございます。これなどは、一段だんも二段だんも上うへの方かたから御覽ごらんになれば、やはり一種しゆしゆの執着じやくと言いわるるかも存ぞんじませぬが、私わたくしどもの境涯きやうがいでは、どうしてもまだ斯こうした執着しやくからは離はなれ切きれないのでございます。

十二、愛馬との再会

岩屋いわやの修しゆぎ行ぎやう中ちゆうに、モ一ひとつちよつと面白おもしろい話はなしがございますから、序ついでに申上もうしあげることに致いたしましょう。それは私わたくしが、こちらで自分じぶんの愛馬あいばに再会さいかいしたお話はなしでございます。

前にもお話し致しましたが、私は三浦家へ嫁入りしてから初めて馬術の稽古をいたしました。最初は馬に乗るのが何やら薄気味悪いように思われましたが、行つて居ります内にだんだんと乗馬が好きになつたと言ふよりも、寧ろ馬が可愛くなつて来たのでございます。乗り馴らした馬というのは、それはモー不思議なほど可愛くなるもので、事によつて経験のないお方には、その真実の味はお判りにならぬかも知れません。わたくしあいばもう私の愛馬と申しますのは、良人がいろいろと搜した上に、最後に、これならば、と見立ててくれたほどのことがございまして、それはそれは優しい、美事な牡馬でございまして。背材はそう高くはございませぬが、総体の地色は白で、それに所々に黒の斑点の混つた美しい毛並は今更自慢するではございませぬが、全く素晴らしいもので、私がそれに乗つて外出をした時には、道行く者も足を停めて感心して見惚れる位でございました。ナニ乗者に見惚れたのではないかと仰つしやるか……。御冗談ばかり、そんな酔狂な者は只の一人だつてございませぬ。私の馬に見惚れたのでございませぬ……。

そうそうこの馬の命名につきましては、良人と私との間に、なかなかの悶着がございまして。私は優しい名前がよいと思ひまして、さんざん考え抜いた末にやつと『鈴懸』という名を思いついたのでございます。すると良人は私と意見が違ひまして、それ

は余り面白くない、是非『若月』にせよと言ひ張つて、何と申しても肯き入れないの
 です。私は内心不服でたまりませんでした、もともと良人が見立ててくれた馬ではあ
 るし、とうとう『若月』と呼ぶことになつて了いました。『今度は私が負けて置きます。
 かしこの次ぎに良い馬が手に入つた時はそれは是非鈴懸と呼ばせていただきます……
 』私はそんなことを良人に申したのを覚えて居ります。しかしそれから間もなく、あの
 北條との戦鬪が起つたので、私の望みはどうとう遂げられずに終りました。
 とに角名前につきては最初斯んないきさつがありましたものの、私は若月が好きで
 好きで耐らないのでした。馬の方でも亦私によく馴染んで、私の姿が見えようものなら、
 さもうれしいと言つた表情をして、あの巨きな軀をすり附けて来るのでした。
 落城後私があちこち流浪をした時にも、若月はいつも私に附添つて、散々苦勞を
 してくれました。で、私の臨終が近づきました時には、私は若月を庭前へ召んで
 貰つて、この世の訣別を告げました。『汝にもいろいろ世話になりました……。』心の中
 でそう思つた丈でしたが、それは必らず馬にも通じたことであらうと考えられます。これ
 ほど可愛がつた故でもございましょう、私が岩屋の内部で精神統一の修行をして
 いる時に、ある時思いも寄らず、若月の姿が私の眼にはつきりと映つたのでございます。

『事ことによると若月わかつきは最もう死しんだのかも知しれぬ……。』

そう感かんじましたので、お爺じいさまにお訊たずねして見みますと、果はたしてこちらの世せ界かいに引越ひきこして居いるとの事ことに、私わたくしは是非ぜひ一ひと目昔めかしの愛馬あいばに逢あつて見みたくて耐たまらなくなりました。

『甚はなはだ勝手かつてなお願ねがひながら、一度若月どわかつきの許もとへ連つれて行いつてくださる訳わけにはまいりますまいか……。』

『それはいと易やすいことじや。』と例れいの通とおりお爺じいさまは親切しんせつに答こたへてくださいました。

『馬うまの方ほうでもひどくそなたを慕したっているから一度は逢あつて置おくがよい。これから一しよ緒つに連つれて行いつて上あげる……。』

幽界ゆうかいでは、何所どこをドー通とうつて行ゆくのか、途とちゆう中のことは殆ほとんど判わかりませぬ。そこが幽界ゆうかいの旅たびと現世げんせの旅たびとの大たいした相違そういてん点てんでございますが、兎とも角かくも私わたくし達たちは、瞬またたき間まに途とちゆう中ちゆうを通とおり抜ぬけて、或ある一ひとつの馬うまの世せ界かいへまいりました。そこには見渡みわたす限かぎり馬うまばかりで、他ほかの動物いきものは一ひとつも居おりません。しかし不思議ふしぎなことには、どの馬うまもどの馬うまも皆みな違くない駿馬しゅんめばかりで、毛並けなみのものじやもじやした、イヤに脚あしばかり太ふとい駄馬だばなどは何処どこにも見みかけないのです。

『私わたくしの若月わかつきも爰こゝに居いるのかしら……。』

そう思い乍ら、不図向うの野原を眺めますと、一頭の白馬が群れを離れて、飛ぶが如くに私達の方へ馳け寄つてまいりました。それはいうまでもなく、私の懐かしい、愛馬でございました。

『まア若月……汝、よく来てくれた……。』

私は心から嬉しく、しきりに自分にまつわり附く愛馬の鼻を、いつまでもいつまでも軽く撫でてやりました。その時の若月のうれしげな面持……私は覚えぬ涙ぐんで了つたのでございました。

しばらく馬と一緒に遊んで、私は大へん軽い氣持になつて戻つて来ましたが、その後二度と行つて見る氣にもなれませんでした。人間と動物との間の愛情にはいくらかあつさりしたところがあるものと見えます……。

十三、母の臨終

岩屋の修行中に誰かの臨終に出会つたことがあるか、とのお訊ねでございませうか。——それは何度も何度もあります。私の父も、母も、それから私の手元に召使つて

いた、忠実な一人の老僕なども、私が岩屋に居る時に前後して歿しまして、その都度私はこちらから、見舞に参ったのでございます。何れあなたとしては、幽界から觀た臨終の光景を知りたいと仰ツしやるのでございましょう。宜しうございします。では、標本のつもりで、私の母の歿った折の模様を、ありのままにお話し致ししましょう。わざわざ查べるのが目的で、行つた仕事ではないのですから、むろんいろいろ見落しはございましょう。その点は充分お含みを願つて置きます。機会がありましたら、誰かの臨終の實況を調べに出掛けて見ても宜しうございます。ここに申上げるのはホンの當時の私が觀たまま感じたままのお話でございます。

それは私が歿つてから、最うよほど経つた時……かれこれ二十年近くも過ぎた時でございましょうか、ある日私が例の通り御神前で修行して居りますと、突然母の危篤の報知が胸に感じて参つたのでございます。斯うした場合には必ず何等かの方法で報知がありますもので、それは死ぬる人の思念が伝わる場合もあれば、又神様から特に知らせさせて戴く場合もあります。その他にもまだいろいろあります。母の臨終の際には、私は自力でそれを知つたのでございました。

私はびっくりして早速鎌倉の、あの懐かしい実家へと飛んで行きましたが、モーそ

の時はよくよく臨終が迫つて居りまして、母の靈魂はその肉体から半分出たり、入つたりしている最中でございました。人間の眼には、人の臨終というものは、ただ衰弱した一つの肉体に起る、あの悲惨な光景しか映りませぬが、私にはその外にまだいろいろの光景が見えるのでございます。就中一番目立つのは肉体の外に靈魂——つまりあなたの方の仰つしやる幽体が見えますこと……。

御承知でもございましょうが、人間の靈魂というものは、全然肉体と同じような形態をして肉体から離れるのでございます。それは白っぽい、幾分ふわふわしたもので、そして普通は裸体でございます。それが肉体の真上の空中に、同じ姿勢で横臥している光景は、決してあまり見よいものではございませぬ。その頃の私は、もう幾度も経験がありますので、さほどにも思いませんでしたが、初めて人間の臨終に出会った時は、何とまあ変怪なものかしらんと驚いてしまいました。

最う一つおかしいのは肉体と幽体との間に紐がついて居ること、一番太いのが腹と腹とを繋ぐ白い紐で、それは丁度小指位の太さでございます。頭部の方にもモー一本見えますが、それは通例前のよりもよほど細いようで……。無論斯うして紐で繋がれてゐるのは、まだ絶息し切らない時で、最後の紐が切れた時が、それがいいよその人の

死んだ時でございます。

前申すとおり、私が母の枕辺に参りましたのは、その紐が切れる少し前でございます。母はその頃モ一七十位、私が最後にお目にかかった時とは大変な相違で、見る影もなく、老いさらばいて居りました。私はすぐ耳元に近づいて、『私でございます……』と申しましたが、人間同志で、枕元で呼びかわすのとは異い、何やらそこに一重隔てがあるようで、果してこちらの意思が病床の母に通じたか何うかと不安に感じられました。——尤もこれは地上の母に就いて申上げること、肉体を棄てて了つてからの母の靈魂とは、むろん自由自在に通じたのでございます。母は帰幽後間もなく意識を取りもどし、私とは幾度も幾度も逢つて、いろいろ越し方の物語に耽りました。母は、死ぬる前に、父や私の夢を見たと言つて居りましたが、もちろんそれはただの夢ではないのです。つまり私達の意思が夢の形式で、病床の母に通じたものでございましょう……。

それは兎に角、あの時私は母の断末魔の苦悶の様を見るに見兼ねて、一生懸命母の軀を撫でてやったのを覚えています。これは只の慰めの言葉よりも幾分かききめがあつたようで、母はそれからめつきりと楽になつて、間もなく氣息を引きとつたのでございま

した。すべて何事も赤心をこめて一心にやれば、必らずそれ丈の事はあるもののように
 でございます。

母の臨終の光景について、モ一つ言い残してならないのは、私の眼に、現世の人
 達と同時に、こちらの世界の見舞者の姿が映ったことでございます。母の枕辺には人
 間は約十人余り、何れも眼を泣きはらして、永の別れを惜んでいましたが、それ等の
 達の中で私が生前存じて居りましたのはたった二人ほどで、他は見覚えのない人達
 ばかりでした。それからこちらの世界からの見舞者は、第一が、母よりも先きへ歿つた父、
 つづいて祖父、祖母、肉身の親類縁者、親しいお友達、それから母の守護霊、
 司配霊、産土の御神使、……一々数えたらよほどの数に上つたでございましょう。兎
 に角現世の見舞者よりはずっと賑かでございました。第一、双方の気分がすっかり異い
 ます。一方は自分達の仲間から親しい人を失うのでございしますから、沈み切つて居りま
 すのに、他方は自分達の仲間に親しき人を一人迎えるのでございしますから、寧ろ勇んで
 いるような、陽気な面持をしているのでございます。こんな事は、私の現世生活中
 には全く思いも寄らぬ事柄でございまして……。

他にも気づいた点がまだないではありませんせぬが、拙な言葉でとても言い尽せぬように思

われますので、母の臨終の物語は、ひとまずこれ位にして置きましょう。

十四、守護霊との対面

第一期の修行中に経験した、重なる事柄につきては、以上で大体申上げたつもりでございしますが、ただもう一つここでは是非とも言い添えて置かねばならないとおもいますのは私の守護霊の事でございします。誰にも一人の守護霊が附いて居ることは、心霊に志す方々の御承知の通りでございしますが、私にも勿論一人の守護霊が附いて居り、そしてその守護霊との関係はただ現世のみに限らず、肉体の死後も引きつづいて、切つても切れぬ因縁の絆で結ばれて居るのでございします。もつとも、そうした事柄がはつきり判りましたのはよほど後の事で、帰幽当時の私などは、自分に守護霊などと申すものが有るか、無いかさえも全然知らなかつたのでございします。で、私がこちらの世界で初めて自分の守護霊にお目にかかつた時は、少なからず意外に感じまして、従つてその時の印象は今でもはつきりと頭脳に刻まれて居ります。

ある日私が御神前で、例の通り深い精神統一の状態に入つて居た時でござい

ます、意外にも一人の小柄の女性がすぐ眼の前に現われ、いかにも優さしく、私を見て
 につこりと微笑まれます。打見る所、年齢は二十歳余り、顔は丸顔の方で、緻致
 はさしてよいとも言われませぬが、何所となく品位が備わり、雪なす富士額にくつきり
 と黛が描かれて居ります。服装は私の時代よりはやや古く、太い紐でかがった、広袖
 の白衣を纏い、そして下に緋の袴を穿いて居るところは、何う見ても御所に宮仕えし
 て居る方のように窺われました。

意外なのは、この時初めてお目に懸つたばかりの、全然未知のお方なのにも係らず、
 私の胸に何ともいえぬ親しみの念がむくむくと湧いて出たことで……。それにその表
 情、物ごしがいかにも不思議……先方は丸顔、私は細面、先方は小柄、私は
 大柄、外形はさまで共通の個所がないにも係らず、何所とも知れず二人の間に大
 変似たところがあるのです。つまりは外面はあまり似ないくせに、底の方でよく似て居
 ると言つた、よほど不思議な似方なのでございます。

『あの、どなた様でございますか……。』

漸く心を落つけて私の方から訊ねました。すると先方は不相変にこやかに――
 『あなたは何も知らずに居られたでしょうが、実は自分はあなたの守護霊……あなたの

一身上の事柄は何も彼も良う存じて居るものなのです。時節が来ぬために、これまで蔭に控えて居ましたが、これからは何事も話相手になって上げます。』

私は嬉しいやら、恋しいやら、又不思議やら、何が何やらよくは判らぬ複雑な感情

でその時初めて自分の魂の親の前に自身を投げ出したのでした。それは丁度、幼い

時から別れ別れになつていた母と子が、不図どこかでめぐり合つた場合に似通つたところ

があるかも知れませぬ。何れにしてもこの一事は私にとりてまことに意外な、又まことに

意義のある貴い経験でございました。

激しい昂奮から冷めた私は、もちろん私の守護霊に向つていろいろと質問の矢を

放ち、それでも尚お腑に落ちぬ個所があれば、指導役のお爺様にも根掘り葉掘り問い

つめました。お蔭で私の守護霊の素性はもとより、人間と守護霊の關係、その

他に就きて大凡の事が漸く会得されるようになりました。——あの、それを残らず爰で

物語れと仰つしやるか……宜しうございます。何も御道の為めとあれば、私の存じて居

る限りは逐一申上げて了います。話が少し堅うございまして、何やら青表紙

臭くなるかも知じませぬが、それは何卒大目に見逃がして戴きます。又私の申上げる

ことにどんな誤謬があるかも知計りかねますので、そこはくれぐれもただ一つの参考に

とどめて戴きたいのでございます。私はただ神様やら守護霊様からきかされたところをお取次ぎするのですから、これが誤謬のないものだとは決して言い張るつもりはございません。

十五、生みの親魂の親

なるはなしすじみちとお
成るべく話の筋道が通るよう、これからすべてをひと纏めにして、私が長い年月の間にやつとまとめ上げた、守護霊に関するお話を順序よく申上げて見たいと存じます。それにつきては、少し奥の方まで溯つて、神様と人間との関係から申上げねばなりません。

むかしとわぎひとそもとづ
昔の諺に『人は祖に基き、祖は神に基く』とやら申して居りますが、私はこちらの世界へ来て見て、その諺の正しいことに気づいたのでございます。神と申しますのは、人間がまだ地上に生れなかつた時代からの元の生神、つまりあなたの方の仰つしやる『自我の本体』又は高級の『自然霊』なのでございます。畏れ多くはございますが、我がくに『御守護神』であらせられる邇々藝命様を始め奉り、邇々藝命様に随つて

こころに降臨された天児屋根命、天太玉命などと申す方々も、何れも皆そうした生神様で、今も尚お昔と同じく地の神界にお働き遊ばしてお出でになられます。その本来のお姿は白く光つた球の形でございますが、余ほど真剣な気持で深い統一状態に入らなければ、私どもにもそのお姿を拝することはできません。まして人間の肉眼などに映る氣づかいはございませぬ。尤もこの球の形は、凝とお鎮まり遊ばした時の本来のお姿でございまして、一たんお働きかけ遊ばしました瞬間には、それぞれ異なつた、世にも神々しい御姿にお変り遊ばします。更に又何かの場合に神々がはげしい御力を發揮される場合には莊嚴と言おうか、雄大と申そうか、とても筆紙に尽きれぬ、あの怖ろしい童姿をお現わしになられます。一つの姿から他の姿に移り変わることは、到底造り附けの肉体で包まれた、地上の人間の想像の限りではございませぬ。

無論これ等の元の生神様からは、沢山の御分靈……つまり御子様がお生れになり、その御分靈から更に又御分靈が生れ、神界から靈界、靈界から幽界へと順々に階段がついて居ります。つまりすべてに亘りて連絡はとれて居り乍ら、しかしそのお受持がそれぞれ異うのでございます。こちらの世界をたつた一つの、無差別の世界

かんがと考へることは大變な間違いで、例えば邇々藝命様に於かれましても、一番奥の
 神界に於てお指図遊ばされる丈で、その御命令はそれぞれの世界の代表者、つま
 りその御分靈の神々に伝わるのでございます。おこがましい申分かは存じませぬが、
 その点の御理解が充分でないと、地上に人類の發生した徑路がよくお判りに
 ならぬと存じます。稀薄で、清淨で、殆んど有るか無きかの、光の凝塊と申上げ
 てよいようなお形態をお有ち遊ばされた高い神様が、一足跳びに濃く鈍い物質の世界
 へ、その御分靈を植え附けることは到底できません。神界から靈界、靈界から
 幽界へと、だんだんにそのお形態を物質に近づけてあつたればこそ、ここに初めて地
 上に人類の發生すべき段取に進み得たのであると申すことでございます。そんな
 面倒な手續を踏んであつてさえも、幽から顕に、肉体のないものから肉体のあるもの
 に、移り変わるには、実に容易ならざる御苦心と、又殆んど数えることのできない歲月を閲
 したといふことでございます。一番困るのは物質というものの兎角崩れ易いことで、い
 ろいろ工夫して造つて見ても、皆半途で流れて了い、立派に魂の宿になるような、完全な
 人体は容易に出来上らなかつたそうでございます。その順序、方法、又發生の
 年代等に就いても、或る程度まで神様から伺つて居りますが、只今それを申上げ

ている違はございませぬ。いづれ改めて別の機会に申上ることに致しませう。

兎に角、現在の人間と申すものが、最初神の御分霊を受けて地上に生れたも

のであることは確かでございます。もつとくわしくいうと、男女両柱の神々がそれ

ぞれ御分霊を出し、その二つが結合して、ここに一つの独立した身魂が造られたの

でございます。その際何うして男性女性の区別が生ずるかと申すことは、世にも重

大なる神界の秘事でございますが、要するにそれは男女何れかが身魂の中樞を

受持つかできまる事だそうで、よく氣をつけて、天地の二神誓約の段に示された、古典の

記録を御覧になれば大体の要領はつかめるとのことでございます。

さて最初地上に生れ出でた一人の幼児——無論それは力も弱く、智慧もとぼしく、

そのまま無事に生長し得る筈はございませぬ。誰かが傍から世話をしてくれなけれ

ばとても三日とは生きて居られる筈はございませぬ。そのお世話掛がつまり守護霊と

申すもので、蔭から幼児の保護に当るのでございます。もちろん最初は父母の霊、殊

に母の霊の熱心なお手伝もあります、だんだん生長すると共に、ますます守

護霊の働きが加わり、最後には父母から離れて立派に一本立ちの身となつて了います。

ですから生れた子供の性質や容貌は、或る程度両親に似て居ると同時に、又大変

に守護靈しゅごれいの感化かんかを受け、時ときとすれば殆んど守護靈しゅごれいの再来さいらいと申しても差支さしかえない位くらいのものも少くないのでございます。古事記こじきの神代しんだいの巻まきに、豊玉姫とよたまひめからお生れになられたお子様こさまを、妹の玉依姫いもうとたまよりひめが養育よういくされたところのは、つまりそう言った秘事ひじを暗示あんじされたものだと承ります。

申すまでもなく子供の守護靈しゅごれいになられるものは、その子供の肉親にくしんと深い因縁いんねんの方かた……つまり同一系統どういつけいとうの方かたでございまして、男子だんしには男性だんせいの守護靈しゅごれい、女子じよしには女性じよせいの守護靈しゅごれいが附くのでございます。人類じんるいが地上ちじように発生はっせいした当初とうしよは、専ら自然しぜん靈れいが守護靈しゅごれいの役目やくめを引き受けたと申すことでございしますが、時代じだいが過ぎて、次第しだいに人靈じんれいの数が加わると共に、守護靈しゅごれいはそれ等らなの中から選ばれるようになります。むろん例外れいがいはありましようが、現在げんざいでは数百年前すうひやくねんぜん乃至千年二千年前ねんねんぜんに帰幽きゆうした人靈じんれいが、守護靈しゅごれいとして主に働いてるように見受けられます。私などは帰幽後きゆうご四百年余ねんあまりで、さして新らしい方ほうでも、又さして古い方ほうでもございませぬ。

こんな複雑こみいな事柄ことがらを、私の拙い言葉ことばでできる丈簡単だけかんたんにかいつまんで申上げましたので、さぞお判りにくい事ことであろうかと恐縮きようしゆくして居る次第しだいでございしますが、わたくしの言葉ことばの足りないところは、何卒あなたの方がたほうでよきようにお察さつしてくださいようお願いねがい

致します。

十六、守護靈との問答

岩屋の修行中に私が自分の守護靈と初めて逢ったお話を申し上げたばかりに、ツイ斯んな長談議を致してしまいました。斯んな拙い話が幾分たりともあなた方の御参考になればこの上もなき僥倖でございます。

序に、その際私と私の守護靈との間に行われた問答の一部を一応お話し致して置きますよう。格別面白くもございませぬが、私にとりましてはこれでも忘れ難い思い出の種子なのでございます。

問『あなたが私の守護靈であると仰つしやるなら、何故もつと早くお出ましにならなかつたのでございますか？ 今迄私はお爺様ばかりを杖とも柱とも依りにして、心細い日を送つて居りましたが、若しもあなたのようなやさしい御方が最初からお世話をして下さつたら、どんなにか心強いことであつたでございましょう……。』

答『それは一応尤もなる怨言であれど、神界には神界の掟というものがあるので

す。あのお爺様は昔から産土神のお神使として、新たに帰幽した者を取扱うことにかけてはこの上もなくお上手で、とても私などの足元にも及ぶことではありませぬ。私などは修行も未熟、それに人情味と言ったようなものが、まだまだ大へんに強過ぎて、思い切つてきびしい躰を施す勇気のないのが何よりの欠点なのです。あなたの帰幽当時の、あの烈しい狂乱と執着……とても私などの手に負えたものではありません。うっかりしたら、お守役の私までが、あの昂奮の渦の中に引き込まれて、徒らに泣いたり、怨んだりすることになったかも知れませぬ。かたがた私としては態とさし控えて蔭から見守つて居る丈にとどめました。結局そうした方があなたの身の為めになったのです……。」

問『では今までただお姿を見せないという丈で、あなた様は私の狂乱の状態を蔭からすっかり御覧になつては居られましたので……。』

答『それはもちろんのことでございます。あなたの一身上の事柄は、現世に居つた時のことも、又こちらの世界に移つてからの事も、一切知り抜いて居ります。それが守護霊というものの役目で、あなたの生活は同時に又大體私の生活でもあつたのです。私の修行が未熟なばかりに、随分あなたにも苦勞をさせました……。』

問『まあ勿体ないお言葉、そんなに仰せられますと私は穴へも入りたい思いがいたします……。それにしてもあなた様は何と仰つしやる御方で、そしていつ頃の時代に現世にお生れ遊されましたか……。』

答『改めて名告るほどのものではないのですが、斯うした深い因縁の絆で結ばれている上からは、一通り自分の素性を申上げて置くことに致しましょう。私はもと京の生れ、父は栗屋左兵衛と申して禁裡に仕えたものでございます。私の名は佐和子、二十五歳で現世を去りました。私の地上に居た頃は朝廷が南と北との二つに岐れ、一方には新田、楠木などが控え、他方には足利その他東国の武士どもが附き随い、殆んど連日戦鬪のない日とてもない有様でした……。私の父は旗色の悪い南朝方のもので、従つて私どもは生前に随分数々の苦勞辛酸を嘗めました：』

問『まあそれはお気の毒なお身の上……私の身に引きくらべて、心からお察し致します……。それにしても二十五歳で歿なられたとの事でございますが、それまでずっとお独身で……。』

答『独身で居りましたが、それには深い理由があるのです……。実は……今更物語る

のもつらいのですが、私には幼い時から許嫁の人がありました。そして近い内に黄
 道吉日を択んで、婚礼の式を挙げようとしていた際に、不図起りましたのがあの
 戦乱、間もなく良人となるべき人は戦場の露と消え、私の若き日の楽しい夢は無
 残にも一朝にして吹き散らされてしまいました……。それから私はただ一個の魂の脱け
 た生きた骸……丁度蝕まれた花の蕾のしぼむように、次第に元気を失って、二十五の
 春に、さびしくポタリと地面に落ちて了つたのです。あなたの生涯も随分つらい
 一生ではありましたが、それでも私のにくらぶれば、まだ遙かに花も実もあって、どれ
 丈幸福だったか知れませぬ。上を見れば限りもないが、下を見ればまだ際限もない
 のです。何事も皆深い深い因縁の結果とあきらめて、お互に無益の愚痴などはこぼ
 さぬことに致しましょう。お爺様の御指導のお蔭で近頃のあなたはよほど立派には
 なりましたが、まだまだあきらめが足りないように思います。これから私もちよいち
 よい見まわりにまいり、ともども向上を図りましょう……。』

その日の問答は大体斯なところで終りましたが、斯うした一人のやさしい指導
 者が見つかつたことは、私にとりて、どれ丈の心強さであつたか知れませぬ。その
 後私の守護霊は約束のとおり、しばしば私の許に訪れて、いろいろと有難い援助を与

えてくださいました。私は心から私のやさしい守護靈に感謝して居るものでござい
ます。

十七、第二の修行場

わたくしさいしよの最初の修行場——岩屋の中での物語はひと先ずこの辺でくぎりをつけまし
て、これから第二の山の修行場の方に移ることに致しましょう。修行場の変更など
と申しますと、現世式に考えれば、随分億劫な、何やらどさくさした、うるさい仕
事のように思われましようが、こちらの世界の引越しは至極あつさりしたものでございま
す。それは場所の変更と申すよりは、むしろ境涯の変更、又は気分の変更と申
すものかも知れませぬ。現にあの岩屋にしても、最初は何やら薄暗い陰鬱な処のよう
に感ぜられましたが、それがいつとはなしにだんだん明るくなつて、最後には全然普通
の明るさ、些しも穴の内部という感じがしなくなり、それに連れて私自身の気持ちもず
つと晴れやかになり、戸外へ出掛けて散歩でもして見たいというような風になりました。
たしかにこちらでは気分と境涯とがびつたり一致しているもののように感ぜられ

ます。

ある日わたくし私がいつになく統一とういつの修行しゆぎように倦あきて、岩屋いわやの入口いりぐちまで何なんとはなしに歩あゆみ出でた時ときのこととございました。ひよつくりそこへ現あらわれたのが例れいの指導役しどうやくのお爺じいさんでした。――

『そなたは戸外そとへ出たがつているようじやナ。』

凶星ずしをさされて私は少わたくししきまりが悪わるく感じました。

『お爺じいさま、何どういうものか今日は氣きが落付おちつかないで困こまるのでございます……。私はどこかへ遊あそびに出掛でかけたくなりました。』

『遊あそびに出でたい時ときには出ればよいのじや。俺わしがよい場所ばしょへ案内あんないしてあげる……。』

お爺じいさんまでが今日けふはいつもよりも晴はれ々々しい面持おももちで誘さそつて下さいますので、私も大へんうれしい氣分きぶんになって、お爺じいさんの後あとについて出掛でかけました。

岩屋いわやから少すこし参りますと、モ―そこはすぐ爪先つまさき上あがりになって、右も左も、杉すぎや松まつや、その他の常盤木ときわぎのしんしんと茂しげつた、相当そうとう険しい山やまでございます。あの、現界げんかいの景色けしきと同一どういつ一いつかと仰おつツしやるか……左様さようでございます。格別かくべつ異ちがつても居おりませぬが、ただ現界げんかいの山やまよりは何なにやら奥深おくぶかく、神かみさびて、ものすごくはないかと感かんじられる位くらいのものでご

ざいます。私達の迎る小路のすぐ下は薄暗い谿谷になって居て、樹叢の中をくぐる水音が、かすかにさらさらと響いていましたが、気の故か、その水音までが何となく沈んで聞えました。

『もう少し行つた所に大へんに良い山の修行場がある。』とお爺さんは道々私に話しかけます。

『多分そちの氣に入るであろうと思うが、兎も角も一応現場へ行つて見るとしうか

……』

『何卒お願い致します……。』

私はただちよつと見物する位のつもりで軽く御返答をしたのでした。

間もなく一つの険しい坂を登りつめると、其処はやや平坦な崖地になっていました。

そして四辺にはとても枝ぶりのよい、見上げるような杉の大木がぎっしりと立ち並んで居りましたが、その中の一番大きい老木には注連縄が張つてあり、そしてその傍に白木造りの、小さい建物がありました。四方を板囲いにして、僅かに正面の入口のみを残し、内部は三坪ばかりの板敷、屋根は丸味のついたこけら葺き、どこにも装飾らしいものはないのですが、ただすべてがいかにも神さびて、屋根にも、柱にも、

古い苔が厚く蒸して居り、それが塵一つなき、飽まで淨らかな環境としつくり融け合
 って居りますので、実に何ともいえぬ落付きがありました。私は覚えさず叫びました。

『まあ何という結構な所でございました！ 私、こんなところで暮しとうございます

……。』

するとお爺さんは満足らしい微笑を老顔に湛へて、徐ろに言われました。――

『実はここがそちの修行場なのじや。モ一別に下の岩屋に帰るにも及ばぬ。早速内部
 へ入つて見るがよい。何も彼も一切取り揃えてあるから……。』

私はうれしくもあれば、また意外でもあり、言わるるままに急いで建物の内部へ入つ
 て見ますと、中央正面の白木の机の上には果して日頃信仰の目標である、例の御神
 鏡がいつの間にか据えられて居り、そしてその側には、私の母の形見の、あのなつかしい
 懐剣までもきちんと載せられてありました。

私はわれを忘れて御神前に拝跪して心から感謝の言葉を述べたことでございました。
 大体これが岩屋の修行場から山の修行場へ引越した時の実況でございます。

現世の方から見れば一片の夢物語のように聴えるでございませうが、そこが現世と
 幽界との相違なのだから何とも致方がございませぬ。私どもとても、幽界に入つ

たばかりの当座は、何やらすべてがたよりなく、又飽気なく思われて仕方がなかったもので……。しかしだんだん慣れて来ると矢張りこちらの生活の方が結構に感じられて来ました。僅か半里か一里の隣りの村に行くのにさえ、やれ従者だ、輿物だ、御召換だ……。半日もかかつて大騒ぎをせねばならぬような、あんな面倒臭い現世の生活を送りながら、よくも格別の不平も言わずに暮らせたものである……。私はだんだんそんな風に感ずるようになったのでございます。何れ、あなた方にも、その味がやがてお判りになる時が参ります……。

十八、竜神の話

山の修行場へ移つてからの私は、何とはなしに気分がよほど晴れやかになつたらしいのが自分にも感ぜられました。主なる仕事は矢張り御神前に静座して精神統一をやるのでございますが、ただ合間合間に私はよく室外へ出て、四辺の景色を眺めたり、鳥の声に耳をすませたりするようになりました。

前にも申上げた通り、私の修行場の所在地は山の中腹の平坦地で、崖の上に

立つて眺めますと、立木の隙間からずっと遠方が眼に入り、なかなかの絶景でござい
ます。どこにも平野らしい所はなく、見渡すかぎり山又山、高いのも低いのも、又色の濃
いのも淡いのも、いろいろありますが、どれも皆樹木の茂った山ばかり、尖った岩山な
どはただの一つも見えません。それ等が十重二十重に重なり合つて絵巻物をくり拡げて
いるところは、全く素晴らしい眺めで、ツイうつとりと見とれて、時の経つのも忘れて了
う位でございます。

それから又あちこちの木々の茂みの中に、何ともいへぬ美しい鳥の音が聴えます。それ
は、昔鎌倉の奥山でよくき慣れた時鳥の声に幾分似たところもありますが、
しかしそれよりはもツと冴えて、賑かで、そして複雑つた音色でございます。ただ一人の
話相手とてもない私はどれ丈この鳥の音に慰められたか知れませぬ。どんな種類の鳥か
しらと、ある時念の爲めにお爺さんに伺つて見ましたら、それはこちらの世界でもよほど
珍らしい鳥で、現界には全然棲んでいないと申すことでございました。尤も音色が美
しい割に毛並は案外つまらない鳥で、ある時不図近くの枝にとまっているところを見る
と、大さは鳩位、幾分現界の鷹に似て、頸部に長い毛が生えていました。幽界
の鳥でも矢張り声と毛並とは揃わぬものかしらと感心したことでございました。

もう一つ爰の景色の中で特に私の眼を惹いたものは、向つて右手の山の中腹に、青葉がくれにちらちら見える一つの丹塗のお宮でございました。それはホンの三尺四方位の小さい社なのですが、見渡す限りただ緑の一片しかない中に、そのお宮丈がくつきりと朱く冴えてるので大へんに目立つのでございます。私の心は次第に、そのお宮にひきつけられるようになりました。

で、ある日お爺さんが見舞われた時私は訊ねました。――

『お爺さま、あそこに大そう美しい、丹塗のお宮が見えますが、あれはどなた様をお祀りしてあるのでございますか。』

『あれは竜神様のお宮じや。これからは俺にばかり依らず、直接に竜神様にもお依みするがよい……。』

『竜神様でございますか?』私は大へん意外に感じまして、

『一体それは何ういう神様でございますか?』

『そろそろそちも竜神との深い関係を知つて置かねばなるまい。よほど奥深い事柄であるから、とても一度で腑には落ちまいが、その中だんだん判つて来る……。』
お爺さんはあたかも寺子屋のお師匠さんと言つた面持で、いろいろ講釈をして

くださいました。お爺さまは斯んな風に説き出されました。――

『竜神りゅうじんというのひくちは一口に言いえば元もとの活いき神かみ、つまり人間にんげんが現世このよに現あらわれる前まえから、こちらの世界せかいで働はたらっている神々かみがみじや。時ときとして竜の姿りゅうすがたを現あらわすから竜神りゅうじんには相違そういないが、しかしいつもあんな恐ろしい姿すがたで居いるのではない。時ときと場合ばあいでやさしい神の姿かみすがたにもなれば、又また一つの丸まるい球たまにもなる。現げんに俺わしなども竜神りゅうじんの一人ひとりであるが、そちの指導しどう役やくとして現あらわれる時は、いつも斯このような、老人ろうじんの姿すがたになつて居いる……。ところで、この竜神りゅうじんと人間にんげんとの関係かんけいであるが、人間にんげんの方ほうでは、何も知しらずに、最初さいしよから自分じぶん一つひとの力ちからで生うまれたもののように思おもつて居いるが、実じつは人間にんげんは竜神りゅうじんの分ぶん霊れい、つまりその子孫しそんなのじや。ただ竜神りゅうじんはどこまでもこちらの世界せかいの者もの、人間にんげんは地ちの世界せかいの者ものであるから、幽ゆうから顕けんへの移うつりかわりの仕事しごとはまことに困難こんなんで、長い長い歳月ながながとしつきを経て漸ようやくのことことでモノになつたのじや。詳くわしいことは後あとで追おいひ話わすとして、兎とに角かく人間にんげんは竜神りゅうじんの子孫しそん、汝そちとても元もとへ溯さかのれば、矢張やはりさる尊とうとい竜神りゅうじん様の御末裔みすえなのじや。これからはよくその事ことを弁わきま、あの竜神りゅうじん様のお宮みやへお詣まいりせねばならぬ。又また機会きかいを見て竜神りゅうじん界かいへも案内あんないし、乙姫様おとひめさまにお目通めとおりをさしてもあげる。』

お爺さんのお話は、何なにやらまわりくどいようで、なかなか当時とうじの私わたくしの腑ふに落おち兼かねたこ

とは申すまでもありますまい。殊におかしかったのが、竜宮界だの、乙姫様だのと申すことで、私は思わず笑い出してしまいました。――

『まあ竜宮などと申すものが實際この世にあるのでございますか。――あれは人間の仮構事ではないでしょうか……。』

『決してそうではない。』とお爺さんは飽まで真面目に、『人間界に伝わる、あの竜宮の物語は實際こちらの世界で起つた事実が、幾分尾緒をつけて面白おかしくなっているまでじや。そもそも竜宮と申すのは、あれは神々のおくつろぎ遊ばす所……言わば人間界の家庭の如きものじや。前にものべた通り、こちらの世界は造りつけの現界とは異り、場所も、家屋も、又姿も、皆意思のままにどのようにもかえられる。で、竜宮界のみを竜神の世界と思うのは大きな間違で、竜神の働く世界は、他に限りもなく存在するのである。が、しかし神々にとりて何よりもうれしいのは矢張りあの竜宮界である。竜宮界は主に乙姫様のお指図で出来上つた、家庭的の理想境なのじや。』

『乙姫様と仰ツしやると……。』

『それは竜宮界で一番上の姫神様で、日本の昔の物語に豊玉姫とあるのがつ

まりその御方じや。神々のお好みがあるので、他にもさまさまの世界があちこちに出来てはいるが、それ等の中で、何と申しても一番立ち優っているのは矢張りこの竜宮界じや。すべてがいかに清らかで、優雅で、そして華美な中に何ともいえぬ神々しいところがある。とても俺の口で述べ尽せるものではない。そちも成るべく早く修行を積んで、実地に竜宮界へ行つて、乙姫様にもお目通りを願うがよい……。」

『私のようなものにもそれが協いしましょうか……。』

『それは勿論協う……イヤ協わねばならぬ深い因縁がある。何を隠そう汝はもともと乙姫様の系統を引いているので、そちの竜宮行は言わば一種の里帰りのようなものじや……。』

お爺さんの述べる所はまだしっくり私の胸にはまりませんでした。しかしそれが一方ならず私の好奇心をそそつたのは事実でございました。それからの私は絶えず竜宮界の事、乙姫様の事ばかり考え込むようになり、私の幽界生活に一の大切な転換期となりました。

が、私の竜宮行きはそれからしばらく過ぎてからの事でございました。

十九、竜神の祠

順序じゆんじよとして、これからポツポツ竜宮界りゆうぐうかいのお話を致さねばならなくなりましたが、もともと口の拙くち づたない私が、私よりもつと口の拙くち づたない女の口を使つかつて通信つうしんを致すのでございませうから、さぞすべてがつまらなく、一向こうに多愛たあいのない夢物語ゆめものがたりになつて了しまいそうで、それが何なにより氣きがかりでございませう。と申もうして、この話を省はないて了しまえば私の幽界しゆうかい生活かつ せいかつの記録きろくに大きな孔あなが開あくことになつて筋道すぢみちが立たなくなるとおそれがございませう。まあ致方いたしかたがございませぬ、せいぜい氣きをつけて、私の実地じつちに觀みたまふ、感かんじたまふをそつくり申上もうしあげること致いたしましょう。

ここちよつと申添もうしそえて置おきたいのは、私の修行場しゆぎやうばの右手みぎての山の半腹はんぶくに在ある、あの小さい竜神りゆうじん やしろの祠やしろのことでございます。私は竜宮行りゆうぐうゆきをする前まえに、所中しよちゆうそのお祠やしろへ参拜さんぱいしたのでございませうが、それがつまり私わたくしに取りて竜宮行りゆうぐうゆきの準備じゆんびだったのでございませう。私はそこで乙姫様おとひめさまからいろいろと有難ありがたい教訓おしえやら、お指図さしずやら、又またやさしい慰めのお言葉ことばやらを戴いたきました。お蔭かげで私は自分おれでも氣きがつくほどきめきと元氣げんきが出てまいりました。『その様子ようすなら汝そちも近い内うちに乙姫様おとひめさまのお目通めどおりができそうじや…

：。『指導役のお爺さんもそんなことを言つて私を励ましてくださいました。

ここで私が竜神様のお祠へ行つて、いろいろお指図を受けたなどと申しますと、現世の方々の中には何やら異様にお考えになられる者がなくとも限りませぬが、それは現世の方々が、まだ神社というものの性質をよく御存じない為めかと存じます。お宮というものは、あれはただお賽銭を上げて、拍手を打つて、首を下げて引きさがる為めに出来ている飾物ではないようでございます。赤心籠めて一生懸命に祈願をすれば、それが直ちに神様の御胸に通じ、同時に神様からもこれに対するお応答が降り、時とすればありありとそのお姿までも拝ませて戴けるのでございます……。つまり、すべては魂と魂の交通を狙つたもので、こればかりは実に何ともいえぬほど巧い仕組になつて居るのでございます。私が山の修行場に居りながら、何うやら竜宮界の様子が少しづつ判りかけたのも、全くこの難有い神社参拝の賜でございました。もちろん地上の人間は肉体という厄介なものに包まれて居りますから、いかに神社の前で精神の統一をなされても、そう容易に神様との交通はできませんまいが、私どものように、肉体を棄ててこちらの世界へ引越したものになりますと、殆んどすべての仕事はこの仕掛のみによりて行われるのでございます。十二人間の世界にも近頃電話だの、ラ

才だのという、重宝な機械が發明されたと仰つしやるか……それは大へん結構なことでございます。しかしそれなら尚更私の申上げる事がよくお判りの筈で、社の装置もラジオとやらの装置も、理窟は大體似たものかも知れぬ……。

まあ大へんつまらぬ事を申上げて了いました。では早速これから竜宮行の模様をお話しさせて戴きます……。

二十、竜宮へ鹿島立

こちらの世界の仕事は、何をするにも至極あつさりしてしまひて、すべてが手取り早く運ばれるのでございますが、それでもいよいよこれから竜宮行と決つた時には、そこに相當の準備の必要がありました。何より肝要なのは齋戒沐浴……つまり心身を淨める仕事でございます。もちろん私どもには肉體はないのでございますから、人間のように實地に水などをかぶりは致しませぬ。ただ水をかぶつたような清淨な気分になればそれで宜しいので、そうすると、いつの間にか服装までも、自然に白衣に變つて居るのでございます。心と姿とがいつもぴつたり一致するのが、こちらの世界の掟で、人

間界まがいのように心と姿とを別々べつべつに使い分けることばかりはとてできないのでござい
す。

兎も角も私は白衣姿で、先ず御神前に端坐祈願し、それからあの竜神様のお祠
へ詣でて、これから竜宮界へ参らせて戴きますと御報告申上げました。先方か
ら何とか返答があつたかと仰つしやるか……それは無論ありました。『飲んであなたのお
出でをお待ちして居ります……』とそれはそれは鄭重な御挨拶でございました。
竜神様のお祠から自分の修行場へ戻つて見ると、もう指導役のお爺さんが、そこ
でお待ちになつて居られました。

『準備ができたらずぐに出掛けると致そう。俺が竜宮の入口まで送つてあげる。それ
から先きは汝一人で行くのじゃ。何も修行の爲めである。あまり俺に依る氣になつて
は面白くない……。』

そう言われた時に、私は何やら少し心細く感じましたが、それでもすぐに氣を取り
直して旅仕度を整えました。私のその時の旅姿でございますか……。それは現世の旅
姿そのまま、言わばその写しでございます。かねて竜宮界は世にも奇麗な、華美な
ところと伺つて居りますので、私もそのつもりになり、白衣の上に、私の生前一番好

きな色模様の衣裳を重ねました。それは綿の入った、裾の厚いものでございますので、道中は腰の所で紐で結えるのでございます。それからもう一つ道中姿に無くてはならないのが被衣……私は生前の好みで、白の被衣をつけることにしました。履物は厚い草履でございます。

お爺さんは私の姿を見て、にこにこしながら『なかなか念の入った道中姿じゃナ。おとひめさま乙姫様もこれを御覧なされたらさぞお歓びになられるであろう。俺などはいつも一張羅じゃ……。』

そんな軽口をきかれて、御自身はいつもと同一の白衣に白の頭巾をかぶり、そして長い長い一本の杖を持ち、素足に白鼻緒の藁草履を穿いて私の先きに立たれたのでした。序でにお爺さんの人相書をもう少しくわしく申上げますなら、年齢の頃は凡そ八十位、頭髮は真白、鼻下から顎にかけてのお髭も真白、それから睫毛も矢張り雪のようになり、真白……すべて白づくめでございます。そしてどちらかと云へば面長で、眼鼻立のよく整った、上品な面差の方でございます。私はまだ仙人というものをよく存じませぬが、若し本当に仙人があるとしたら、それは私の指導役のお爺さんのような方ではなからうかと考えるのでございます。あの方ばかりはどこからどこまで、き

れいに枯れ切つて、すっかりあくぬけがして居られます。

山の修行場を後にした私達は、随分長い間険しい山道をば、下へ下へへと降つてまいりました。道はお爺さんが先きに立て案内して下さるので、少しも心配な

ことはありませぬが、それでもところどころ危つかしい難所だと思つたこともございしました。又道中どこへ参りましても例の甲高い霊鳥の鳴声が前後左右の樹間か

ら雨の降るように聴えました。お爺さんはこの鳥の声がよほど好きと見えて、『こればかりは現界ではきかれぬ声じや。』と御自慢をして居られました。

漸く山を降り切つたと思うと、たちまちそこに一つの大きな湖水が現われました。よほど深いものと見えまして、湛えた水は藍を流したように蒼味を帯び、水面には対岸の鬱蒼たる森林の影が、くろぐろと映つて居ました。岸はどこもかしこも皆割つたような巖で、それに松、杉その他の老木が、大蛇のように垂れ下つて居るところは、風情がよいというよりか、寧ろもの凄く感ぜられました。

『どうじや、この湖水の景色は……汝は些と氣に入らんであらうが……。』

『私はこんな陰氣くさい所は厭でございます。でもここは何ぞ縁由のある所でございますか?』

『ここはまだ若い、下級の竜神達の修行の場所なのじや。俺は時々見わりに来るので、善うこの池の勝手を知っている。何も修行じゃ、汝もここでちよつと統一をして見るがよい。沢山の竜神達の姿が見えるであらう……。』

あまり良い気持は致しませんでした、修行とあれば辞むこともできず、私はとある巖の上に坐つて統一状態に入つて見ますと、果して湖水の中は肌の色の黒っぽい、あまり品の良くない竜神さんでぎつしり填つていました。角のあるもの、無いもの、大きなもの、小さなもの、眠っているもの、暴れているもの……。初めてそんな無気味な光景に接した私は、覚えずびくりして眼を開けて叫びました。――

『お爺さま、もう沢山でございます。何うぞもつと晴れやかな所へお連れ下さいませ……。』

二十一、竜宮街道

しばらく湖水の畔を伝つて歩いて居る中に、山がだんだん低くなり、やがて湖水が尽きると共に山も尽きて、広々とした、少しうねりのある、明るい野原にさしかかりまし

た。私達はその野原を貫く細道をどこまでもどこまでも先きへ急ぎました。

やがて前面に、やや小高い砂丘の斜面が現われ、道はその頂辺の所に登って行きます。『何やら由井ヶ浜らしい景色である……。』私はそんなことを考えながら、格別

険しくもないその砂丘に登りつめました。が、さてそこから前面を見渡した時に、

私はあまりの絶景に覚えずはつと氣息づまりました。砂丘のすぐ真下が、えも言われぬ美しい一ツの入江になっているのではありませぬか！

刷毛で刷いたような弓なりになった広い浜……のたりのたりと音もなく岸辺に寄せる真青な海の水……薄絹を拡げたような、はてしもなくつづく浅霞……水と空との融

け合うあたりにほのぼのと浮く遠山の影……それはさながら一幅の絵巻物をくりひろげたような、実に何とも言えぬ絶景でございました。

明けても暮れても、眼に入るものはただ山ばかり、ひたすら修行三昧に永い歳月を送った私でございしますから、尚更この海の景色が気に入ったのでございします、しばらくの間私は全くすべてを打忘れて、砂丘の上に立ち尽して、つくづくと見惚れて了ったのでございました。

『どうじゃ、なかなかの良い眺めであろうが……。』

そう言われて私はやつと自分に戻りました。

『お爺さま、わたくし、こんななごやかな、良い景色は、まだ一度も見たためしがございませぬ……。ここは何と申すところでございますか？』

『これが竜宮界の入口なのじゃ。ここから竜宮はそう遠くない……。』

『竜宮は矢張り海の底にあるのでございますか？』

『イヤイヤあれは例によりて人間どもの勝手な仮構事じゃ。乙姫様は決して魚族の親戚でもなければ又人魚の叔母様でもない……。が、もともと竜宮は理想の別世界なのであるから、造ろうと思えば海の底にでも、又その他の何処にでも造れる。そこが現世の造りつけの世界と大へんに異う点じゃ……。』

『左様でございますか……。』

何やらよくは腑に落ち兼ねましたが、私はそう御返答するより外に致方がないのでした。

『さて』とお爺さんは、しばらく経ってから、いと真面目な面持で語り出しました。

『俺の役目はここまで汝を案内すればそれで済んだので、これから先きは汝一人で行くのじゃ。あれ、あの入江のほとりから、少し左に外れたところに見ゆる真平な街道、

あれをどこまでもどこまでも辿って行けば、その突き当りがつまり竜宮で、道を間違えるような心配は少しもない……。又竜宮へ行ってからは、どなたにお目にかかるか知れぬが、何れにしても、ただ先方のお話を伺う丈では面白くない。気のついたこと、腑に落ちぬことは、少しの遠慮もなく、どしどしお訊ねせんければ駄目であるぞ。すべて神界の掟として、こちらの求める丈しか教えられぬものじゃ。で、何事も油断なく、よくよく心の眼を開けて、乙姫様から愛想をつかされることのないように心懸けてもらいたい……。では俺はこれで帰りますぞ……。』

そう言つて、つと立ち上つたかと思うと、もうお爺さんの姿はどこにも見えませんでした。

例によりてその飽気なき加減と言つたらありません。私はちよつと心ざびしく感じましたが、それはほんの一瞬間のことではございました。私は斯んな場合にいつも肌から離さぬ、例の母の紀念の懷剣を、しっかりと帯の間にさし直して、急いで砂丘を降りて、お爺さんから教えられた通り、あの竜宮街道を真直に進んだのでした。

その後も私は幾度となくこの竜宮街道を通りましたが、何度通つて見ても心地のよいのはこの街道なのでございます。それは天然の白砂をば何かで程よく固めたと言つ

たような、踏み心地で、足触りの良さと申したら比類がありません。そして何所に一点
 の塵とでもなく、又道の両側に程よく配合した大、小さまざまな植込も、実に何
 とも申上げかねるほど奇麗に出来て居り、とても現世ではこんな素晴らしい道路は見ら
 れませぬ。その街道が何の位続いているかとお訊ねですか……さアそれ位の道程かは、
 ちよつと見当がつきかねますが、よほど遠いこと丈は確かでございます。街道の入口
 の辺から前方を眺めても、霞が一带にかかつていて、何も眼に入らませぬが、しばらく
 過ぎると有るか無きかのように、薄つすりと山の影らしいものが現われ、それから又しば
 らく過ぎると、何やらほんのりと丹塗りの門らしいものが眼に映ります。その辺からでも
 竜宮の御殿まではまだ半里位はたつぷりあるのでございます……。何分絵心
 も何も持ち合わせない私の力では、何のとりとめたお話もできないのが、大へんに残念
 でございます。あの美しい道中の眺めの、せめて十分の一なりとも皆様にお伝えし
 たいのでございますが……。

二十二、唐風の御殿

しばらくしてから私はとうとう竜宮界の御門の前に立っていました、それにしても私は四辺の光景があまりにも現実的なをむしろ意外に思ったのでございました。お爺さんの御話から考えて見しても、竜宮はドウやら一の蜃気楼、乙姫様の思召でかりそめに造り上げられる一の理想の世界らしく思われますのに、実地に当って見ますと、それはどこにあぶなげのない、いかにもガツしりとした、正真正銘の現実の世界なのでございます。『若しもこれが蜃気楼なら世の中に蜃気楼でないものは一つもありはしない……。』私は心の中でそう考えたのでございました。

竜宮界の大体の見た感じでございますが——さア一口に申したら、それはお社と言うよりかも、寧ろ一つの大きな御殿と言った感じ、つまり人間味が、たつぷりしているのでございます。そして何処やらに唐風なところがあります。先ずその御門でございしますが、屋根は両端が上方にしゃくれて、大そう光沢のある、大型の立派な瓦で葺いてあります。門柱その他はすべて丹塗り、別に扉はなく、その丸味のついた入口からは自由に門内の模様が窺われます。あたりには別に門衛らしいものも見掛けませんでした。

で、私は思い切つてその門をくぐつて行きましたが、門内は見事な石畳みの舗道に

なつて居り、あたりに塵一つ落ちて居りませぬ。そして両側の広々としたお庭には、形の良い松その他が程よく植え込みになつて居り、奥はどこまであるか、ちよつと見当がつかぬ位でございます。大体は地上の庭園とさしたる相違もございませぬが、ただあんなにも冴えた草木の色、あんなにも香ばしい土の匂いは、地上の何所にも見受けすることはできません。こればかりは実地に行つて見るより外に、描くべき筆も、語るべき言葉もあるまいと考えられます。

御門から御殿まではどの位ありましようか、よほど遠かつたように思われます。御殿の玄関は黒塗りの大きな式台造り、そして上方の庇、柱、長押などは皆眼のさめるような丹塗り、又壁は白塗りでございますから、すべての配合がいかに華美で、明朗で、眼がさめるように感じられました。

私はそこですっかり身づくろいを直しました。むろん心でただそう思いさえすればそれで宜しいので、そうすると今までの旅装束がその場できちんとした謁見の服装に変わるのをごいいます。そんな事でもできなければ、たツた一人で、腰元も連れずに、竜宮の乙姫さまをお訪ねすることはできません。

『御免くださいませ……。』

わたくしおも
私は思い切つてそう案内を乞いました。すると、年の頃十五位に見える、一人の可愛らしい小娘がそこへ現われました。服装は筒袖式の桃色の衣服、頭髮を左右に分けて、背部の方でくるとまるめて居るところは、何う見ても御国風よりは唐風に近いもので、私はそれが却つて妙に御殿の構造にしつくりと当てはまって、大へん美しいように感ぜられました。

『私は小櫻と申すものでございますが、こちらの奥方にお目通りをいたし度く、わざわざお訪ねいたしました……。』

乙姫様とお呼び申すのも何やらおかしく、さりとて神様の御名を申上ぐるのも、何やら改まり過ぎるよう感じられ、ツイうっかり奥方と申上げて了いました。こちらへ来ても矢張り私には現世時代の呼び癖がついてまわつて居たものと見えます。それでも取次ぎの小娘には私の言葉がよく通じたらしく、『承知致しました。少々お待ちくださいませ。』と言つて、踵をかえして急いで奥へ入つて行きました。

『乙姫様に首尾よくお目通りが叶うかしら……。』
私は多少の不安を感じながら玄関前に佇みました。

二十三、豊玉姫と玉依姫

間もなく以前の小娘が再び現われました。

『どうぞおありがとうございます……。』

言われるままに私は小娘に導かれて、御殿の長い長い廊下を幾曲り、ずっと奥まれのひと間に案内されました。室は十畳許りの青畳を敷きつめた日本間でございまして、さが、さりとて日本風の白木造りでもありません。障子、欄間、床柱などは黒塗り、又縁の欄干、底、その他造作の一部は丹塗りと、言った具合に、とてもその色彩が複雑で、そして濃艶なのでございます。又お床の間には一幅の女神様の掛軸がかかつて居り、その前には陶器製の竜神の置物が据えてありました。その竜神が素晴らしい勢で、かつと大きな口を開けて居たのが今も眼の前に残って居ります。あけ放った障子の隙間からはお庭もよく見えましたが、それが又手数のだんだ大そう立派な庭園で、樹草泉石のえも言われぬ配合は、とても筆紙につくせませぬ。京の銀閣寺、金閣寺の庭園も数奇の限りを尽した、大そう贅沢なものとかねてきき及んで居りますので、或る時私はこちらからのぞいて見たことがございますが、竜宮界

のお庭にわに比べるとあれなどはとても段違だんちがいのように見受みうけられました。いかに意匠いしようを
 こらしても、矢張り現世げんせは現世げんせだけの事ことしかできないものと見みえます……。

ナニそのお室へやで乙姫様おとひめさまにお目めにかかったか、と仰おツしやるか——ホホホ大たいそうお待ち
 兼ねかでございますこと……。ではお庭にわの話はなしなどはこれで切り上あげて、早速乙姫様おとひめさまにお
 目通めとおりをしたお話はなしに移うつりましょう。——尤もつと私がその時ときお目めにかかりましたのは、玉依たまより
 姫様ひめさまの方ほうで、豊玉姫様とよたまひめさまではございませぬ。申もうすまでもなく竜宮界りゅうぐうかいで第一だいの乙
 姫様おと仰おツしやるのが豊玉姫様とよたまひめさま、第二だいの乙姫様おとひめさまが玉依姫様たまよりひめさま、つまりこの両
 方たは御姉妹ごきようだいの間あいだがら柄えいということになつて居おるのでございしますが、何分なにぶんにも竜宮
 界かいの事はあまりにも奥おくが深く、私わたくしにもまだ御両方おふたかたの関係かんけいがよく判わかつて居おりませぬ。
 お二人ふたりが果はたして本当ほんとうに御姉妹ごきようだいの間あいだがら柄えいなのか、それとも豊玉姫とよたまひめの御分靈ごぶんれいが玉
 依姫りひめでおりになるのか、何どうもその辺へんがまだ充じゅう分ぶん私の腑ふに落おちないのでございま
 す。ただしそれが何どうあろうとも、この御二方おふたかたが切きつても切きれぬ、深い因縁いんねんの姫神ひめがみ
 であらせられることは確たしかでございます。私は其その後幾度ごいくたびも竜宮界りゅうぐうかいに参まり、そして
 幾度いくたびも御両方おふたかたにお目めにかかつて居おりますので、幾分いくぶんその辺へんの事情じじようには通つうじて居い
 つもりでございます。

この豊玉姫様と言われる御方は、第一の乙姫様として竜宮界を代表遊ばされる、尊い御方だけに、矢張りどことなく貫禄がございます。何となく、竜宮界の女王様と言った御様子が自然にお軀に備わって居られます。お年齢は二十七又は三十位にお見受けしますが、もちろん神様に實際のお年齢はありませぬ。ただ私達の眼にそれだけに拝まれるというだけで……。それからお顔は、どちらかといえば下づくれの面長、眼鼻立ちの中で何所かが特に取り立てて良いと申すのではなしに、どこもかしこもよく整った、まことに品位の備わった、立派な御標致、そしてその御物越しは至つてしとやか、私どもがどんな無様な事柄を申し上げても、決してイヤな色一つお見せにならず、どこまでも親切に、いろいろと訓えてくださいます。その御同情の深いこと、又その御気性の素直なことは、どここの世界を捜しても、あれ以上の御方が又たあろうとは思われませぬ。それでいて、奥の方には凛とした、大そうお強いところも自ずと備わっているのをごいいます。

第二の乙姫様の方は、豊玉姫様に比べて、お年齢もずつとお若く、やつと二十か二か位に思われます。お顔はどちらかといえば円顔、見るからに大そうお陽気で、お召物などはいつも思い切った華美造り、丁度桜の花が一時にぱつと咲き出でたという

ような趣おもむきがございます。私が初めてお目めにかかった時ときのお服装なりは、上衣うわぎが白しろの薄物うすもので、
 それに幾枚いくまいかの色物いろものの下着したぎを襲かさね、帯おびは前で結むすんでダラリと垂たれ、その外ほかに幾条いくすじか
 の、ひらひらした長ながいものを捲まきつけて居おられました。これまで私わたくしどもの知しっている服ふく
 装うの中なかでは、一番ばん弁天べんてん様さまのお服装みなりに似にて居いるように思おもわれました。

兎とに角かくこの両方ふたかたは竜宮りゅうぐう界切かいきつての花形はながたであらせられ、お顔かおもお気性きしょうも、何所どこ
 やら共通きようつうの所ところがあるのでございますが、しかし引ひきつづいて、幾代いくだいかに亘わたりて御ご
 分靈れいを出だして居おられる中うちには、御性質ごせいしつの相違そういが次第しだい次第しだいに強つよまって行き、末すえの人間にんげん
 界かいの方ほうでは、豊玉とよたま姫系ひめけいと玉依たまより姫系ひめけいとの区別くべつが可かなりはつきりつくようになって
 居おります。概がいして豊玉とよたま姫ひめの系統けいとうを引ひいたものは、あまりはしやいだところがなく、どち
 らかといえばしとやかで、引込ひっこみ思案しあんでございます。これに反はんして玉依たまより姫ひめ系統けいとうの方かたは
 至いたつて陽氣ようきで、進すすんで人ひと中なかにも出でかけてまいります。ただ人ひと並なみみすぐれて情義なさけ深ふかい
 ことは、お両方ふたかたに共通きようつうの美点みでんで、矢張り御姉妹ごきょうだいの血筋ちすじは争あらそわれないように見受みうけ
 られます……。

あれ、又またしても話はなしが側路わきみちへそれで先走さきばしつて了しまいました。これから後あとへ戻もどつて、私わたくしが
 初はじめて玉依たまより姫様ひめさまにお目めにかかった時ときの概況がいきようを申上もうしあげることことに致いたしましょう。

二十四、なさけの言葉

先刻も申上げたとおり、私は小娘に導かれて、あの華麗な日本間に通され、そして薄絹製の白の座布団を与えられて、それへ坐つたのでございますが、不図自分の前面のところを見ると、そこには別に一枚の花模様はなもようの厚い座布団が敷いてあるのに気づきました。『きつと乙姫様がここへお坐りなさるのであらう。』——私はそう思いながら、乙姫様に何と御挨拶を申上げてよいか、いろいろと考え込んで居りました。

と、何やら人の気配を感じましたので頭をあげて見ますと、天から降つたか、地から湧いたか、モーいつの間にやら一人の眩いほど美しいお姫様がキチンと設けの座布団の上にお坐りになられて、にこやかに私の事を見守つてお出でなさるのです。私はこの時ほどびつくりしたことはめつたにございませぬ。私は急いで座布団を外して、両手について叩頭をしたまま、しばらくは何と御挨拶の言葉も口から出ないのでした。

しかし、玉依姫様の方では何所までも打解けた御様子で、尊い神様と申上げるよりはむしろ高貴の若奥方と言つたお物越しで、いろいろと優しいお言葉をかけくださ

るのでした。――

『あなたが竜宮へお出でなさることは、かねてからお通信がありましたので、こちらでもそれを楽しみに大へんお待ちしていました。今日はわたくしが代つてお逢いしますが、この次ぎは姉君様が是非お目にかかるとの仰せでございます。何事もすべてお心易く、一切の遠慮を棄てて、訊くべきことは訊き、語るべきことは語つてもらいます。あなた方が地の世界に降り、いろいろと現界の苦勞をされるのも、つまりは深き神界のお仕組で、それがわたくし達にも又となき良い學問となるのです。きけばドウやらあなたの現世の生活も、なかなか楽なものではなかったやうで……。』

いかにもしんみりと、溢るるばかりの同情を以て、何くれと話しかけてくださいますので、いつの間にやら私の方でも心の遠慮が除り去られ、丁度現世で親しい方と膝を交えて、打解けた気分でもよやまの物語に耽ると言つたやうなことになります。歸幽以來何十年かになります、私が斯んな打寛いだ、なごやかな氣持を味わつたのは実にこの時が最初でございました。

それから私は問われるままに、鎌倉の実家のこと、嫁入りした三浦家のこと、北條との戦鬭のこと、落城後の侘住居のことなど、有りのままにお話ししました。

玉依姫様はたまよりひめさまはうなづ一々首肯しながら私の物語に熱心に耳を傾けてくだされ、最後に私が独りさびしく無念の涙に暮れながら若くて歿つたことを申上げますと、あの美しい顔をばいとど曇らせて涙さえ浮べられました。――

『それはまアお氣毒な……あなたも随分つらい修行をなさいました……。』
たツた一言ではございますが、私はそれをきいて心から難有いと思いました。私の胸に積り積れる多年の鬱憤もドウやらその御一言できれいに洗い去られたように思いました。

『斯んな優しい神様にお逢いすることができて、自分は何と幸福な身の上であろう。自分はこのから修行を積んで、斯んな立派な神様のお相手をしてあまり恥かしくないように、一時も早く心の垢を洗い浄めねばならない……。』
私は心の底で固くそう決心したのでした。

二十五、竜宮雑話

ひととおわたくしみのうえばなし
一と通り私の身上嘸が済んだ時に、今度は私の方から玉依姫様にいろいろの事

をお訊ねしました。何しろ竜宮界の初上り、何一つ弁えてもいない不束者のこととでございますから、随分つまらぬ事も申上げ、あちらではさぞ笑止に思召されたこととでございましょう。何をお訊ねしたか、今ではもう大分忘れて了いましたが、標本のつもりで一つ二つ想い出して見ることに致しましょう。

真先きに私がお訊ねしたのは浦島太郎の昔噺のことでございました。――

『人間の世には、浦島太郎という人が竜宮へ行つて乙姫さまのお婿様になつたという名高いお伽噺がございますが、あれは實際あつた事柄なのでございましょうか……。』

すると玉依姫様はほとお笑い遊ばしながら、斯う訓えてくださいました。――

『あの昔噺が事実そのままでないことは申すまでもなければ、さりとて全く跡方もないというのではありませぬ。つまり天津日継の皇子彦火々出見命様が、姉君の御婿君にならせられた事実を現世の人達が漏れきいて、あんな不思議な浦島太郎のお伽噺に作り上げたのでございましょう。最後に出て来る玉手箱の話、あれも事実ではありませぬ。別にこの竜宮に開ければ紫の煙が立ちのぼる、玉手箱と申すようなものはありませぬ。あなたもよく知るとおり、神の世界はいつまで経つても、露かわ

りのない永遠の世界、彦火々出見命様と豊玉姫様は、今も昔と同じく立派な御夫婦の御間柄でございます。ただ命様には天津日繼の大切な御用がおりになるので、めつたに御夫婦揃つてこの竜宮界にお寛ぎ遊ばすことはありませぬ。現に只今も命様には何かの御用を帯びて御出ましになられ、乙姫様は、ひとりさびしくお不在を預かつて居られます。そんなところが、あのお伽噺のつらい夫婦の別離という趣向になつたのでございましょう……。」

そう言つて玉依姫には心持ちお顔を赧く染められました。

それから私は斯んな事もお訊きました。――

『斯うして拝見致しますと竜宮は、いかにもきれいで、のんきらしく結構に思われますが、矢張り神様にもいろいろつらい御苦労がおりなさるのでございましょう?』

『よい所へお氣がついてくれました。』と玉依姫様は大そうお歡びになつてくださいました。

『寛いで他にお逢いする時には、斯んな奇麗な所に住んで、斯んな奇麗な姿を見せて居れど、わたくし達とていつも斯うしてのみはいないのです。人間の修行もなかなか辛くはあろうが、竜神の修行とて、それにまさるとも劣るものではありません。現

世には現世の執着があり、靈界には靈界の苦勞があります。わたくしなどは今が修
 行の真最中、寸時もうかうかと遊んでは居りませぬ。あなたは今斯うしている私
 の姿を見て、ただ一人のやさしい女性と思うであろうが、実はこれは人間のお客
 様を迎える時の特別の姿、いつか機会があつたら、私の本当の姿をお見せすること
 もあります。兎に角私達の世界にはなかなか人間に知られない、大きな苦勞が
 あることをよく覚えていてもらいます。それがだんだん判つてくれば、現世の人間もあ
 まり我俣を申さぬようになりましょう……。』

こんな真面目なお話をなさる時には、玉依姫様のあの美しいお顔がきりりと引きし
 まつて、まともに拝むことができないほど神々しく見えるのでした。

私がその日玉依姫様から伺ったことはまだまだ沢山ございますが、それはいつか
 別の機会にお話することにして、ただ爰では是非附け加えて置きたいことが一つございま
 す。それは玉依姫の靈統を受けた多くの女性の中に弟橘姫が居られることで
 ございます。『あの人はわたくしの分靈を受けて生まれたものであるが、あれが一ばん
 名高くなつて居ります……。』そう言われた時には大そうお得意の御模様が見えていま
 した。

ひとと通りおききたいことをおききしてから、お暇乞いをいたしますと『又是非何うぞ近い中に……。』という有難いお言葉を賜りました。私は心から朗かな気分になって、再び例の小娘に導かれて玄関に立ち出で、そこからはただ一氣に途中を通過して、無事に自分の山の修行場に戻りました。

二十六、良人との再会

前回の竜宮行のお話は何となく自分にも氣乗りがいたしましたが、今度はドーも億劫で、氣おくれがして、成ろうことなら御免を蒙りたいように感じられてなりませぬ。帰幽後生前の良人との初対面の物語……婦女の身にとりて、これほどの難題はめつたにありません。さればとて、それが話の順序であれば、無理に省いて仕舞う訳にもまいりませぬ。本当に困つて居るのでございまして……。十二成るべく詳しく有りのままを話せと仰つしやるか。そんなことを申されると、尚更談話がし難くなつてしまいます。修行未熟な、若い夫婦の幽界に於ける初めての会合——とても他人さまに吹聴するほど立派なものでないに決つて居ります。おきき苦しい点は成るべく発

表なさらぬようくれぐれもお依みして置きます……。

いつかも申上げた通り、私がこちらの世界へ参りましたのは、良人よりも一年余り遅

れて居りました。後で伺いますと、私が死んだことはすぐ良人の許に通知があつたそうで

ございますが、何分当時良人はきびしい修行の真最中なので、自分の妻が死ん

だとして、とてもすぐ逢いに行くというような、そんな女々しい気分にはなれなかつたそう

でございます。私は又私で、何より案じられるのは現世に残して置いた両親のことば

かり、それに心を奪われて、自分よりも先へ死んで了っている良人のことなどはそれほど

気にかからないのでした。『時節が来たら何れ良人にも逢えるであらう……。』そんな風

にあつさり考えていたのでした。

右のような次第で、帰幽後随分永い間、私達夫婦は分れ分れになつたきりでござ

いました。むろん、これがすべての男女に共通のことなのか何うかは存じませぬ。こ

れはただ私達がそうであつたと申す丈のことで……。

そうする中に私は岩屋の修行場から、山の修行場に進み、やがて竜宮界の訪

問も済んだ頃になりますと、私のような執着の強い婦女にも、幾分安心ができて来

たらしいのが自覚されるようになりました。すると、こちらからは別に何ともお願いした

訳でも何でもないので、ある日突然神様から良人に逢わせてやると仰せられたのでございます。『そろそろ逢つてもよいであろう。汝の良人は汝よりももう少し心の落付きができて来たようじゃ……。』指導役のお爺さんが、いとどまじめくさつてそんなことを言われるので、私は氣まりが悪くて仕方がなく、覚えず顔を真紅に染めて、一たんはお断りました。――

『そんなことはいつでも宜しうございます。修行の後戻りがすると大変でございますから……。』

『イヤイヤ一度は逢わせることに、先方の指導靈とも手筈をきめて置いてある。良人と逢つた位のこと、すぐ後戻りするような修行なら、まだとても本物とは言われぬ。斯んなことをするのも、矢張り修行の一つじや。神として無理にはすすめぬから、有りのままに答えるがよい。何うじや逢つて見る氣はないか?』

『それでは、宜しきようにお願ひいたします……。』
とうとう私はお爺さんにそう御返答をしてしまいました。

二十七、会合の場所

わたくししゅぎようばすこしたおやまはんぷく私の修行場を少し下へ降りた山の半腹に、小ぢんまりとした一つの平地がございます。周囲には程よく樹木が生えて、丁度置石のように自然石があちこちにあしらってあり、そして一面にふさふさした青苔がぎっしり敷きつめられて居るのです。そこが私達夫婦の会合の場所と決められました。

あなたも御承知の通り、こちらの世界では、何をやるにも、手間暇間は要りません。思い立つたが吉日で、すぐに実行に移されて行きます。

『話が決った上は、これからすぐに掛けるとしよう……。』

お爺さんは眉一つ動かされず、済まし切つて先きに立たれますので、私も黙つてその後について出掛けましたが、しかし私の胸の裡は千々に碎けて、足の運びが自然遅れ勝ちでございました。

申すまでもなく、十幾年の間現世で仲よく連れ添つた良人と、久しぶりで再会するというのでございますから、私の胸には、夫婦の間ならではの味われぬ、あの一種特別のうれしさが急にこみ上げて来たのは事実でございます。すべて人間というものは死んだからと言って、別にこの夫婦の愛情に何の変わりがあるものではございませぬ。變つて

いるのはただ肉体の有無だけ、そして愛情は肉体の受持ではないらしいのでござい
ます。

が、一方にかくうれしさがこみあぐると同時に、他方には何やら空恐ろしいような感
じが強く胸を打つのでした。何にしろここは幽界、自分は今修行の第一歩をすませ
て、現世の執着が漸くのことです。少しばかり薄らいだというまでのよくよくの未熟者、こ
れが幾十年ぶりで現世の良人に逢った時に、果して心の平静が保てるであろうか、果
して昔の、あの醜い愚痴やら未練やらが首を擡げぬであろうか……何う考えて見ても自
分ながら危ツかしく感じられてならないのでした。

そうかと思うと、私の胸のどこやらには、何やら氣まりがわるくてしようのないところ
もあるのです。久し振りで良人と顔を合わせるのも氣まりがわるいが、それよりも一層
恥かしいのは神さまの手前でした。あんな素知らぬ顔をして居られても、一から十まで人
の心の中を洞察かるる神様、『この女はまだ大分娑婆の臭みが残っているナ……。』そ
う思つていられはせぬかと考えると、私は全く穴へでも入りたいほど恥かしくてならない
のでした。

それでも予定の場所に着く頃までには、少しは私の肚が据つてまいりました。『縦令何

事ありとも涙は出すまい。——私は固くそう決心しました。

先方へついて見ると、良人はまだ来て居りませんでした。

『まあよかつた……。』その時私はそう思いました。いよいよとなると、矢張りまだ氣おくれがして、少しでも時刻を延ばしたいのでした。

お爺さんはと見れば何所に風が吹くと言った面持で、ただ黙々として、あちらを向いて景色などを眺めていました。

二十八、昔語り

良人がいよいよ来着したのは、それからしばしの後で、私が不図側見をした瞬間に、五十余りと見ゆる一人の神様に附添われて、忽然として私のすぐ前面に、ありし日の姿を現わしたのでした。

『あッ矢張り元の良人だ……。』

私は今更ながら生死の境を越えて、少しも変わっていない良人の姿に驚嘆の眼を見張らずにはいられませんでした。服装までも昔ながらの好みで、鼠色の衣裳に大

紋打つた黒の羽織、これに袴をつけて、腰にはお定まりの大一小二本、大へんにきちんと改つた扮装なのでした。

これが現世での出来事だったら、その時何をしたか知れませぬが、さすがに神様の手前、今更取り乱したところを見られるのが恥かしうございますから、私は一生懸命になつて、平氣な素振をしていました。良人の方でも少しも弱味を見せず、落付払つた様子をしていました。

しばし沈黙がつづいた後で、私から言葉をかけました。――

『お別れしてから随分長い歳月を経ましたが、図らずも今ここでお目にかかることができまして、心から嬉しうございます。』

『全く今日は思い懸けない面会であつた。』と良人もやがて武人らしい、重い口を開きました。

『あの折は思いの外、の乱軍、訣別の言葉一つかわす隙もなく、あんな事になつて了い、そなたも定めし本意ないことであつたであらう……。それにしてもそなたが、斯うも早くこちらの世界へ来るとは思わなかつた。いつまでも安泰に生き長らえて居てくれるよう、自分としては蔭ながら祈願していたのであつたが、しかし過ぎ去つたことは今更何とも

致^{いたし}方^{かた}がない。すべては運命^{うんめい}とあきらめてくれるよう……。』

飾^{かざり}氣^けのない良人^{おとと}の言葉^{ことば}を私^{わたくし}は心^{こころ}からうれしいと思^{おも}いました。

『昔^{むかし}の事はモ―何^{なん}とも仰^{おほ}つしやつてくださいますな。あたにお別^{わか}れしてからの私^{わたくし}は、お墓^{はか}参^{まい}りが何^{なに}よりの樂^{たの}しみでございましたが、矢張^{やは}り寿^{じゆ}命^{めい}と見^みえて、直^{じき}にお後^{あと}を慕^{した}うことになりました。一時^じの間^{あいだ}こそ随^{ずい}分^{ぶん}くやしいとも、悲^{かな}しいとも思^{おも}いましたが、近頃^{ちかごろ}は、ド―やらあきらめがつきました。そして思^{おも}いがけない今日^{きよう}のお目通^{めどお}り、こんなうれしい事はございませぬ……。』

かれこれと語^{かた}り合^あつている中^{うち}にも、お互^{たがい}の心^{こころ}は次第^{しだい}次第^{しだい}に融^とけ合^あつて、さながらあの思^{おも}いでおおみうらやかたあるじよ、妻^{つま}と呼ばれて、樂^{たの}しく起居^{おきふし}を偕^{とも}にした時代^{じだい}の現世^{げんせ}らしい氣分^{きぶん}が復^{ふつ}活^{かつ}して來^きたのでした。

『いつまで立話^{たちわな}しでもなからう。その辺^{へん}に腰^{こし}でもかけるとしようか。』

『ほんにそうでございました。丁度^{ちやうど}ここに手頃^{てごろ}の腰掛^{こしか}けがございます。』

私^{わたくし}達^{たち}は三尺^{しゃく}ほど隔^{へだ}てて、右^{みぎ}と左^{ひだり}に並^{なら}んでいる、木^きの切株^{きりかぶ}に腰^{こし}をおろしました。そこは監督^{かんとく}の神様^{かみさま}達^{たち}もお氣^きをきかせて、あちらを向^むいて、素知^{そし}らぬ顔^{かお}をして居^おられました。

対話はそれからそれへとだんだん滑かになりました。

『あなたは生前と少しもお変りがないばかりか、却って少しお若くなりはしませぬか。』

『まさかそうでもあるまいが、しかしこちらへ来てから何年経つても年齢を取らないというところが不思議じゃ。』と良人は打笑い、『それにしてもそなたは些と老けたように思うが……。』

『あなたとお別れしてから、いろいろ苦勞をしましたので、自然寔が出たのでございましょう。』

『それは大へん氣の毒なことであつた。が、斯うなつては最早苦勞のしようもないから、その中自然元氣が出て来るであらう。早くそうなつてもらいたい。』

『承知致しました。みっちり修行を積んで、昔よりも若々しくなつてお目にかけます……。』

さして取りとめのない事柄でも、斯うして親しく語り合つて居りますと、私達の間には言うに言われぬ楽しさがこみ上げて来るのでした。

二十九、身上話

ここで一つ變つてゐるのは、私達が殆んど少しも現世時代の思い出話をしなかつたことで、若しひよつとそれを行おうとすると、何やら口が填つて了うように感じられるのでした。

で、自然私達の對話は死んでから後の事柄に限られることになりました。私が真先きに訊いたのは良人の死後の自覺の模様でした。――

『あなたがこちらでお氣がつかれた時はどんな塩梅でございましたか？』

『俺は実はそなたの声で眼を覺ましたのじや。』と良人はじつと私を見守り乍らポツリポツリ語り出しました。『そなたも知る通り、俺は自尽して果てたのじやが、この自殺ということは神界の掟としてはあまりほめたことではないらしく、自殺者は大抵皆一たんは暗い所へ置かれるものらしい。俺も矢張りその仲間で、死んでからしばらくの間何事も知らずに無我夢中で日を過した。尤も俺のは、敵の手にかからない為めの、言わば武士の作法に協つた自殺であるから、罪は至つて輕かつたようで、従つて無自覺の期間もそう長くはなかつたらしい。そうする中にある日不図そなたの声で名を呼ばれるように感じて眼を覺ましたのじや。後で神様から伺えば、これはそなたの一心不乱の祈願が、首

尾ゆびよく俺わしの胸むねに通つうじたものじゃそうで、それと知しった時の俺わしのうれしきはどんなであつたか……。が、それは別べつの話はなし、あの時ときは何なにをいうにも四辺あたりが真暗まつくらでどうすることもできず、しばらく腕うでを拱こまねいてぼんやり考かんがえ込んでゐるより外ほかに道みちがなかつた。が、その中うちうつりと光明あかりがさして来て、今日送きょうおくつて来てくたされた、あのお爺じいさんの姿すがたが眼めに映うつつた。ドーじゃ、眼めが覚さめたか？——そう言葉ことばをかけられた時ときのうれしさ！ 俺わしはてつきり自分を救すくつてくれた恩人おんじんであらうと思おもつて、お名前なまえは？ と訊たずねると、お爺じいさんはにつこりして、汝そちは最早現世もはやげんせの人間にんげんではない。これから俺わしの申もうすところをきいて、十分に修しゆぎ行ようを積つまねばならぬ。俺わしは産土うぶすなの神かみから遣つかわされた汝そちの指導しどう者しゃである、と申しきかされた。その時俺わしははつとして、これは最もう愚図ぐずぐず愚図ぐずぐずしてゐられないと思おもつた。それから何年なんねんになるか知れぬが、今いまでは少すこし幽界ゆうかいの修しゆぎ行ようも積つみ、明あかるい所ところに一軒けんの家屋かおくを構かまえて住すまわして貰もらつてゐる……。』

私わたくしは良人おとこの素朴そぼくな物語ものがたりを大たいへんな興味きやうみを以もつてききました。殊ことに私の生存中せいぞんちゆうの心ばかりの祈願きがんが、首尾しゆびよく幽明ゆうめいの境さかいを越こえて良人おとこの自覚じかくのよすがとなつたというのが、世よにもうれしい事ことの限かぎりでした。

入れ代かわつて今度こんどは良人おとこの方ほうで、私の経歴けいれきをききたいということになりました。で、私わたくし

は今丁度あなたに申上げるように、帰幽後のあらましを物語りました。私が生きてい
 る時から靈視がきくようになり、今では坐つたままで何でも見えると申しますと、『そな
 たは何と便利なものを神様から授つているであらう！』と良人は大へんに驚きました。
 又私がこちらで愛馬に逢つた話をする、『あの時は、そなたの希望を容れないで、勝手
 な名前をつけさせて大へんに済まなかつた。』と良人は丁寧に詫言ひました。その外さま
 ざまの事がありますが、就中良人が非常に驚きましたのは私の竜宮行の物語
 語でした。『それは飛んでもない面白い話じや。ドーもそなたの方が俺よりも資格が
 ずつと上らしいぞ。俺の方が一向ぼんやりしているのに、そなたはいろいろ不思議なこと
 をしている……。』と言つて、大そう私を羨ましがりました。私も少し気の毒氣味になり、
 『すべては靈魂の關係から役目が異うだけのもので、別に上下の差がある訳ではない
 でしょう。』と慰めて置きました。

私達はあまり對話に身が入つて、すっかり時刻の経つのも忘れていましたが、不意
 氣がついて見ると何処へ行かれたか、二人の神さん達の姿はその辺に見当らないのでした。
 私達は期せずして互に眼と眼を見合わせました。

三十、永遠の愛

思い切つて私はここに懺悔しますが、四辺に神さん達の眼が見張っていないと感付いたときに、私の心が急にむらむらとあらぬ方向へ引きづられて行つたことは事実でございます。

『久しぶりでめぐり合つた夫婦の仲だもの、せめて手の先尖位は触れても見たい……。』
私の胸はそうした考えで、一ぱいに張りつめられて了いました。

物堅い良人の方でも、うわべはしきりに耐え耐えて居りながら、頭脳の内部は矢張りありし昔の幻影で充ち充ちているのがよく判るのでした。

とうとう堪えきれなくなつて、私はいつしか切株から離れ、あたかも磁石に引かれる鉄片のように、一步良人の方へと近づいたのでございます……。

が、その瞬間、私は急に立ち止つて了いました。それは今まではっきりと眼に映つていた良人の姿が、急にスーッと消えかかったのに驚かされたからでございます。

『この眼がどうかしたのかしら……。』

そう思つて、一步退いて見直しますと、良人は矢張り元の通りはつきりした姿で、切

株に腰かけて居るのです。

が、再び一歩前へ進むと、又もやすぐに朦朧と消えかかる……。

二度、三度、五度、幾度くりかえしても同じことなのです。

いよいよ駄目と悟った時に、私はわを忘れてその場に泣き伏してしまいました……。

×

×

×

×

『何うじや少しは悟れたであろうが……。』

私の肩に手をかけて、そう言われる者があるので、びっくりして涙の顔をあげて振り返って見ますと、いつの間に戻られたやら、それは私の指導役のお爺さんなのでした。私はその時穴があつたら入りたいように感じました。

『最初から申しきかせた通り、一度逢った位ですぐ後戻りする修行はまだ本物とは言われない。』とお爺さんは私達夫婦に向つて諄々と説ききかせて下さるのでした。『汝達には、姿はあれど、しかしそれは元の肉体とはまるつきり異つたものじや。強いて手と手を触れて見たところで、何やらかさかさとした、丁度張子細工のような感じがするばかり、そこに現世で味わつたような甘味も面白味もあったものではない。尚お汝は先刻、良人の後について行つて、昔ながらの夫婦生活でも営みたいように思つ

たであろうが……イヤ隠しても駄目じや、神の眼はどんなことでも見抜いているから……
 しかしそんな考えは早くすてねばならぬ。もともと二人の住むべき境涯が異っている
 のであるから、無理にそうした真似をしても、それは丁度鳥と魚とが一緒に住おうとす
 るようなもので、ただお互に苦しみを増すばかりじや。そち達は矢張り離れて住むに限る。
 ——が、俺が斯う申すのは、決して夫婦間の清い愛情までも棄てよというのではな
 いから、その点は取り違いをせぬように……。陰陽の結びは宇宙万有の切つても切
 れぬ貴い御法則、いかに高い神々とてもこの約束からは免れない。ただその愛情は
 どこまでも浄められて行かねばならぬ。現世の夫婦なら愛と欲との二筋で結ばれるのも
 止むを得ぬが、一たん肉体を離れた上は、すっかり欲からは離れて了わねばならぬ。そち
 達は今正にその修行の真最中、少し位のこととは大目に見逃がしてもやるが、あ
 まりにそれに走つたが最後、結局幽界の落伍者として、亡者扱いを受け、幾
 百年、幾千年の逆戻りをせねばならぬ。俺達が受持つている以上、そち達に断じ
 てそんな見苦しい真似わさせられぬ。これからそち達はどこまでも愛し合つてくれ。が、
 そち達はどこまでも淨い關係をつづけてくれ……。』

×

×

×

×

それから少時の後、私達はまるで生れ変わったような、世にもうれしい、朗かな気分になつて、右と左とに袂を別つたことでございました。

ついでながら、私と私の生前の良人との関係は今も尚お依然として続いて居り、しかもそれはこのまま永遠に残るのではないかと思われまふ。が、むろんそれが互に許し合つた魂と魂との淨き関係であることは、改めて申上げるまでもないと存じます。

三十一、香織女

良人との再会の模様を物語りました序に、同じ頃私がこちらで面会を遂げた二三のひと達の話をにつづけることに致しましょう。縁もゆかりもない今の世の人達には、さして興味もあるまいと思いますが、私自身には、なかなか忘れられない事柄だつたのでございます。

その一つは私がまだ実家に居た頃、腰元のようにして可愛がつて居た、香織という一人の女性との会合の物語でございます。香織は私よりは年齢が二つ三つ若く、顔立はあまり良くもありませぬが、眼元の愛くるしい、なかなか惻愴な見でございました。

身元は長谷部某と呼ぶ出入りの徒士の、たしか二番目の娘だつたかと覚えて居ります。
私が三浦へ縁づいた時に、香織は親元へ戻りましたが、それでも所中鎌倉から
はるばる私の所へ訪ねてまいり、そして何年経つても私の事を『姫さま姫さま』と呼ん
で居りました。その中香織も縁あつて、鎌倉に住んでいる、一人の侍の許に嫁ぎ、夫
婦仲も大そう円満で、その間に二人の男の児が生まれました。氣質のやさしい香織は大
へんその子供達を可愛がつて、三浦へまいる時は、一緒に伴て来たことも幾度かあり
ました。

そんな事はまるで夢のようで、詳しい事はすっかり忘れましたが、ただ私が現世を離れ
る前に、香織から心からの厚い看護を受けた事丈は、今でも深く深く頭脳の底に刻みつ
られて居ります。彼女は私の母と一緒に、例の海岸の私の隠れ家に詰め切つて、それ
はそれは親身になつてよく尽してくれ、私の病氣が早く治るようにと、氏神様へ日
参までしてくれるのでした。

ある日などは病床で香織から頭髮を解いて貰つたこともございました。私の頭髮は
大へんに沢山で、日頃母の自慢の種でございましたが、その頃はモー床に就き切りなの
で、見る影もなくもつれて居ました。香織は櫛で解かしながらも、『折角こうしてき

いにしてあげても、このままつくねて置くのが惜しい。』と言つてさんざんに泣きました。傍で見ていた母も、『モー一度治つて、晴衣を着せて見たい……。』と言つて、泣き伏してしまいました。斯んな話をしていると、私の眼には今でもその場の光景が、まざまざと映つてまいります……。

いよいよ最う駄目と観念しました時に、私は自分が日頃一ばん大切にしていた一襲の小袖を、形見として香織にくれました。香織はそれを両手にささげ、『たえとお別れしても、いつまでもいつまでも姫さまの記念に大切に保存いたします……。』と言いながら、声も惜まず泣き崩れました。が、私の心は、モーその時分には、思いの外に落付いて了つて、現世に別れるのがそう悲しくもなく、黙つて眼を瞑ると、却つて死んだ良人の顔がスーツと眼前に現われて来るのでした。

兎に角こんなにまで深い因縁のあつた女性でございますから、こちらの世界へ来ても矢張り私のことを忘れない筈でございます。ある日私が御神前で統一の修行をして居りますと、急に軀がぶるぶると慄えるように感じました。何気なく背後を振り返つて見ると、年の頃やや五十許と見ゆる一人の女性が坐つて居りました。それが香織だったのでございます。

三十二、無理な願

『何やら昔の香織らしい面影が残つて居れど、それにしては随分老け過ぎて……』
『私が、そう考えて躊躇して居りますと、先方では、さも待ち切れないと言つた様子で、膝をすり寄せてまいりました。——』

『姫さまわたくしをお忘れでございますか……香織でございます……。』
『矢張りそうであつたか。——私はそなたがまだ息災で現世に暮して居るものとばかり思つていました。一たいいつ歿つたのじゃ……。』

『もう、かれこれ十年位にもなるでございましょう。私のようなつまらぬものは、とてもこちらで姫さまにお目にかかれまいとあきらめて居りましたが、今日図らずも念願がない、こんなうれしいことはございませぬ。よくまア御無事で……些ツとも姫さまは往時とお変りがございませぬ。お懐かしう存じます……。』
『現世らしい挨拶をのべながら、香織はとうとう私の軀にしがみついて、泣き入りました。私もそうされて見れば、そこは矢張り人情で、つい一緒になつて泣いて了いました。』

心こころの昂奮たかぶりが一応鎮おうしずまつてから、私達わたくしたちの間あいだには四方八方よもやまの物語ものがたりが一しきりはずみ
ました。――

『そなたは一たい、何処どこが悪わるくて歿なくなつたのじや?』

腹部おなかの病氣びようきでございました。針はりで刺されるようにキリキリと毎日悩まいにちなやみつづけた末すえに、
とうとうこんなことになりました……。』

『それは氣きの毒どくであつたが、何うしてそなたの死ぬしことが、私の方わたくしほうへ通つうじなかつたのであ
ろう……。普通ふつうなら臨終りんじゆうの思念おもひが感じて来こない筈はずはないと思おもうが……。』

『それは皆みなわたくしの不心得ふこころえの爲ためでございます。』と香織かおりは面めん目ぼくなげに語かたるのでし
た。『日頃ひごろわたくしは、死ねば姫ひめさまの形見かたみの小袖こそでを着きせてもらつて、すぐお側そばに行いつて
お仕つかえするのだなどと、口癖くちぐせのように申もうしていたのでございますが、いざとなつてさッ
ぱりそれを忘わすれて了しまつたのでございます。どこまでも執着しゅうじやくの強い私は、自分の家族じぶんみうちのこと
とりわけ二人の子供こどものことが氣きにかかり、なかなか死切しきりれなかつたのでございます。こん
な心懸こころがけの良くない女子おなごの臨終りんじゆうの通報しらせが、どうして姫ひめさまのお許もとにとどく筈はずがございま
しょう。何も彼かも皆私みなが悪わるかつた爲ためでございます。』

正直者しょうじきものの香織かおりは、涙なみだながらに、臨終りんじゆうに際さいして、自分の心懸こころがけの悪わるかつたことをさ

んざん詫^わびるのでした。しばらくして彼女^{かのじよ}は言葉^{ことば}をつづけました。――

『それでもこちらへ来て、いろいろと神様^{かみさま}からおさとしを受けたお蔭^{かげ}で、わたくしの現^げ世^{んせ}の執着^{しやくしやく}も次第^{うす}に薄らぎ、今^{いま}では修^{しゆぎ}行^{ぎやう}も少し積^つみました。が、それに付^ひつて、日^ひましの募^つつて来るのは姫^{ひめ}さまをお慕^{した}い申^{もう}す心^{こころ}で、こればかりは何^どうしても我慢^{がまん}がしきれなくなり、幾度^{いくど}神様^{かみさま}に、逢^あわせていただきたいとお依^{たの}みしたか知^しれませぬ。でも神^{かみ}さまは、まだ早^{はや}い早^{はや}いと仰^{おほ}せられ、なかなかお許^{ゆる}しが出^でないのでございます。わたくしはあまりのもどかしさに、よくないことと知^しりながらもツイ神様^{かみさま}に喰^くつてかかり、さんざん悪^{あく}口^{こう}を吐^ついたことがございました。それでも神様^{かみさま}の方^{ほう}では、格^{かく}別^{べつ}お怒^{いか}りにもならず、内^{ない}々^{ない}姫^{ひめ}さまのところをお調^{しら}べになつて居^おられたものと見^みえまして、今度^{こんど}いよいよ時^じ節^{せつ}が来^きたとなりますと、御^ご自^じ身^{しん}で私^{わたくし}を案^{あん}内^{ない}して、連^つれて来^きて下^{くだ}すたのでございます。――姫^{ひめ}さま、お願^{ねが}いでございます、これから、どうぞお側^{そば}にわたくしを置^おいてくださいます。わたくしは、昔^{むかし}のとお^{ひめ}姫^{ひめ}さまのお身^みのまわりのお世^せ話^わをして上^あげたいのでございます……。』

そう言^いつて香^か織^{おり}は又^{また}もや私^{わたくし}に縋^{すが}りつくのでした。

これには私^{わたくし}もほとほと持^もちあつかいました。

『神界^{しんかい}の掟^{おきて}としてそればかりは許^{ゆる}されないのであるが……。』

『それは又何ういう訳でございますか？ わたくしは是非こちらへ置いて戴きたいのでございます。』

『それは現世ですること、こちらの世界では、そなたも知る通り、衣服の着がえにも、頭髮の手入にも、少しも人手は要らぬではないか。それに何とも致方のないのはそれだけの靈魂の因縁、めいめいきちんと割り当てられた境涯があるので、たとえ親子夫婦の間柄でも、自分勝手に同棲することはできません。そなたの芳志はうれしくおもいますが、こればかりはあきらめてたもれ。逢おうと思えばいつでも逢える世界であるから何処に住まなければならぬということはない筈じや。それほど私のことを思ってくれるのなら、そんな我俣を言うかわりに、みつしり身相應の修行をしてくれるがよい。そして思い出したらちよいちよい私の許に遊びに来てたもれ……。』

最初の間、香織はなかなか腑に落ちぬらしい様子をしていましたが、それでも漸くききわけて、尚おしばらく語り合つた上で、その日は暇を告げて自分の所へ戻って行きまし

た。
今でも香織とは絶えず通信も致しまするし、又たまには逢いも致します。香織はもうすっかり明るい境涯に入り、顔なども若返つて、自分にふさわしい神様の御用に

いそしんで居ります。

三十三、自殺した美女

今度はいれ代つて、或る事情の爲めに自殺を遂げた一人の女性との会見のお話を致しましょう。少々陰気くさい話で、おききになるに、あまり良いお気持はしないでございましょうが、斯う言つた物語も現世の方々に、多少の御参考にはなろうかと存じます。

その方は生前私と大へんに仲の良かったお友達の一りで、名前は敦子……あの盛の敦という字を書くのでございます。生家は畠山と言つて、大そう由緒ある家が、柄でございます。その畠山家の主人と私の父とが日頃別懇にしていた関係から、私と敦子さまとの間も自然親しかつたのでございます。お年齢は敦子さまの方が二つばかり下でございました。

お母さまが大へんお美しい方であつた為め、お母さま似の敦子さまも眼の覚めるような御縹緖で、殊にその生際などは、慄えつくほどお綺麗でございました。『あんなにお

美しい御縹緖ごぎりように生れて敦子さまは本当に仕合せだ……。『そう言つてみんなが羨ましがつたものでございますが、後で考えると、この御縹緖ごぎりようが却つてお身の仇あだとなつたらしく、矢張り女は、あまり醜いのも困りますが、又あまり美しいのもどうかと考えられるのでございます。

敦子さまの悩みは早くも十七八の娘盛むすめぎりから始まりました。諸方から雨の降るようにかかつて来る縁談えんだん、中には随分これはというのもあつたそうでございますが、敦子さまは一つなしに皆断つて了うのでした。これにはむろん訳があつたのでございます。親戚しんせきの、幼馴染おきななじみの一人の若人……世間によくあることでございますが、敦子さまは早くから右の若人わこうどと思ひ思われる仲になり、末は夫婦と、内々二人の間に堅い約束ができていたのでございました。これが望みどおり円満えんまんに収まれば何の世話はないのでございますが、月に浮雲むらくも、花に風とやら、何か両家の間に事情じじようがあつて、二人は何うあつても一緒しよになることができないのでした。

こんな事で、敦子さまの婚期は年一年と遅れて行きました。敦子さまは後にはすつかり棄鉢気味やけきになつて、自分は生涯じふんには行かないなどと言ひ張つて、ひどく御両親ごりやうしんを困らせました。ある日敦子さまが私の許へ訪れましたので、私からいろいろ言いきかせ

てあげたことがございました。『御自分同志が良いのは結構であるが、斯ういうことは、矢張り御両親のお許諾を得た方がよい……。』どうせ私の申すことはこんな堅苦しい話に決つて居ります。これをきいて敦子さまは別に反対もしませんでした、さりとて又成る程と思いかえしてくれる模様も見えないのでした。

それでも、その後幾年か経つて、男の方があきらめて、何所からか妻を迎えた時に、敦子さまの方でも我が折れたらしく、とうとう両親の勧めに任せて、幕府へ出仕している、ある歴々の武士の許へ嫁ぐことになりました。それは敦子さまがたしか二十四歳の時でございました。

縁談がすっかり整つた時に、敦子さまは遙るる三浦まで御挨拶に来られました。その時私の良人もお目にかかりましたが、後で、『あんな美人を妻に持つ男子はどんなに仕合わせなことであろう……。』などと申した位に、それはそれは美しい花嫁姿でございました。しかし委細の事情を知つて居る私には、あの美しいお顔の何所やらに潜む、一種の寂しさ……新婚を歡ぶというよりか、寧ろつらい運命に、仕方なしに服従していると言つたような、やるせなさかどことなく感じられるのでした。

兎も角こんな具合で、敦子さまは人妻となり、やがて一人の男の児が生れて、少くと

も表面には大そう幸福らしい生活を送っていました。落城後私があの諸磯の海辺に
 佗住居をして居た時分などは、何度も何度も訪れて来て、何かと私に力をつけてくれま
 した。一度は、敦子さまと連れ立ちて、城跡の、あの良人の墓に詣でたことがございま
 したが、その道すがら敦子さまが言われたことは今も私の記憶に残って居ります。――
 『一たい恋しい人と別れるのに、生別れと死別れとではどちらがづらいものでしょう
 か……。事によると生別れの方がつらくはないでしょうか……。あなたの現在のお身
 上もお察し致しますが、少しは私の身の上も察してくださいませ。私は一つの生きた屍、
 ただ一人の可愛い子供があるばかりに、やつとこの世に生きていられるのです。若しもあ
 の子供がなかったら、私などは夙の昔に……。』
 現世に於ける私と敦子さまとの関係は大体こんなところでお判りかと存じます。

三十四、破れた恋

それから程経て、敦子さまが死んだこと丈は何かの機会に私に判りました。が、その時
 はそう深くも心にとめず、いつか逢えるであろう位に軽く考えていたのです。それより

又何年経ちましたか、或る日私が統一の修行を終えて、戸外に出て、四辺の景色を眺めて居りますと、私の守護霊……この時は指導役のお爺さんでなく、私の守護霊から、私に通信がありました。『ある一人の女性の性が今あなたを訪ねてまいります。年の頃は四十余りの、大そう美しい方でございます。』私は誰かしらと思いましたが、『ではお目にかかりましょう。』とお答えしますと、程なく一人のお爺さんの指導霊に連れられて、よく見覚えのある、あの美しい敦子さまがそこへひょくりと現われました。『まあお久しいことでございました。とうとうあなたと、こちらでお会いすることになりましたか……。』

私が近づいて、そう言葉をかけましたが、敦子さまは、ただ会釈をしたのみで、黙つて下方を向いた切り、顔の色なども何所やら暗いように見えました。私はちよつと手持無沙汰に感じました。

すると案内のお爺さんが代つて簡単に挨拶してくれました。――

『この人は、まだ御身に引き合わせるのには少し早過ぎるかとは思われたが、ただ本人が是非御身に逢いたい、一度逢わせてもらえば、氣持が落ついて、修行も早く進むと申すので、御身の守護霊にも依んで、今日わざわざ連れてまいったような次第……御身

とは生前せいぜんまた又となく親しい間柄あいだがらのように聞き及およんでいるから、いろいろとよく言いきかせて貰もらいたい……。』

そう言いつてお爺さんじいは、そのままプイと帰かえつて了しまいました。私はこれには、何ぞ深い仔細さいしがあるに相違そういないと思おもいましたので、敦子さまあつこの肩かたに手をかけてやさしく申もうしました。

『あなたと私わたくしとは幼い時代おきなときからの親しい間柄あいだがら……殊ことにあなたが何回も私の佗住居わびずまいを訪おとずれていろいろと慰なぐさめてくださった、あの心こころづく尽いましは今もううれしい思い出おもの一つとなつて居おります。その御恩ごおんがえしというのでもありませんが、こちらの世界せかいで私の力ちからに及およぶ限かぎりのことは何なになりとしてあげます。何うぞすべてを打明うちあけて、あなたの相談相手そうだんあいてにしたいいただきます。兎も角とかくもこちらへお入はいりくださいませ。ここが私の修行場しゆぎようばでございます……。』

敦子さまは最初さいしよはただ泣なき入るばかり、とても話はなをするどころではなかつたのですが、それでも修行場しゆぎようばの内部なかにへ入はいつて、その森しんとした、浄らかな空気くうきに浸ひたっている中に、次第だいに心が落おちついて来きて、ポツリポツリと言葉くちを切きるようになりました。

『あなたは、こんな神聖しんせいな境地とうちで立派りっぱな御修行ごしゆぎよう、私などはとても段違だんちがいで、あなた

の足元にも寄りつけはしませぬ……。』

こんな言葉をきっかけに、敦子さまは案外すらすらと打明話をする事になりましたが、最初想像したとおり、果して敦子さまの身の上には、私の知っている以上に、いろいろこみ入った事情があり、そして結局飛んでもない死方——自殺を遂げて了ったのでした。敦子さまは、斯んな風に語り出でました。――

『生前あなたにも、あるところまでお漏らししたとおり、私達夫婦の仲というものは、うわべとは大へんに異い、それはそれは暗い、冷たいものでございました。最初の恋に破れた私には、もともと他所へ縁づく氣持などは少しもなかったものでございましたが、ただ老いた両親に苦勞をかけては濟まないと思つたばかりに、死ぬるつもりで軀だけは良人にささげましたものの、しかし心は少しも良人のものではないのでした。愛情の伴わぬ冷たい夫婦の間柄……他人さまのことは存じませぬが、私にとりて、それは世にも浅ましい、つまらないものでございました……。嫁入りしてから、私は幾度自害しようとしたか知れませぬ。わたくしが、それもえせずに、どうやら生き永らえて居りましたのは、間もなく私が身重になった為めで、つまり私というものは、ただ子供の母として、惜くもないその日その日を送つていたのでございました。』

『こんな冷たい妻の心が、何でいつまで良人の胸にひびかぬ筈がございました。ヤケ気味になった良人はいつしか一人の側室を置くことになりました。それからの私達の間には前にもまして、一層大きな溝ができて了い、夫婦とはただ名ばかり、心と心とは千里もかけ離れて居るのです。そうする中にポツクリと、天にも地にもかけ換のない、一粒種の愛児に先立たれ、そのまま私はフラフラと気がふれたようになって、何の前後の考もなく、懷劍で喉を突いて、一瞬に小供の後を追ったのでございました……。』

敦子さまの談話をきいて居りますと、私までが気が変になりそうに感ぜられました。そして私には敦子さまのなされたことが、一応尤もなところもあるが、さて何やら、しつくり腑に落ちないところもあるように考えられて仕方がないのでした。

三十五、辛い修行

それから引きつづいて敦子さまは、こちらの世界に目覚めてからの一伍一什を私に物語ってくれましたが、それは私達のような、月並な婦女の通った路とは大へんに趣が異いまして、随分苦勞も多く、又変化にも富んで居るものでございました。私は今

ここでその全部をお漏しする訳にもまいりませんが、せめて現世の方に多少参考になりそうなどころだけは、成るべく漏れなくお伝えしたいと存じます。

敦子さまが、こちらで最初置かれた境涯は随分みじめなものようでございます。——

『死後私はしばらくは何事も知らずに無自覚で暮しました。従つてその期間がどれ位つづいたか、むろん判る筈もございません。その中不図誰かに自分の名を呼ばれたように感じて眼を開きましたが、四辺は見渡すかぎり真暗闇、何が何やらさっぱり判らないのでした。それでも私はすぐに、自分はモ—死んでいるな、と思いました。もともと死ぬる覚悟で居つたのでございますから、死ということは私には何でもないものでございましたが、ただ四辺の暗いのはほとほと弱つて了いました。しかもそれがただの暗さとは何となく異うのでございます。例えば深い深い穴蔵の奥と言つたような具合で、空氣がしつとりと肌に冷たく感じられ、そして暗い中に、何やらうようよ動いているものが見えるのです。それは丁度悪夢に襲われているような感じで、その無氣味さと申したら、全くお話しになりませぬ。そしてよくよく見つめると、その動いて居るものが、何れも皆異様の人間なのでございます。——頭髮を振り乱しているもの、身に一糸を纏わない裸体のもの、血

みどろに傷きずいて居いるもの……ただの一人ひとりとして満まん足ぞくの姿すがたをしたものは居おりませぬ。殊ことに
 気味きみの悪わるかったのは私わたくしのすぐ傍そばに居おる、一人ひとりの若い男わか おとこで、太ふとい荒縄あらなわで、裸身はだかみをグルグ
 ルと捲まかれ、ちつとも身動みうごきがでさなくされて居おります。すると、そこへ瞋いかりの皆みなを釣り上あ
 げた、一人ひとりの若い女わか おんなが現あらわれて、口惜くやしい口惜くやしいとわめきつづけながら、件くだんの男おとこにとび
 かかつて、頭髪かみをむしつたり、顔面かおを引ひつかいたり、足あしで蹴けつたり、踏ふんだり、とても乱らん
 暴うな真似まねをいたします。私わたくしはその時とき、きつとこの女おとこはこの男おとこの手にかかつて死しんだので
 あろうと思おもいましたが、兎とに角かくこんな苛責かしゃくの光景ありさまを見るにつけても、自分じぶんの現世げんせで犯おか
 た罪惡つみがだんだん怖こはくなつてどうにも仕方しかたなくなりました。私わたくしのような強情かたくななものが、
 ドーやら熱心ねっしんに神様かみさまにお縋すがりする氣持きもちになりました。偏ひとえにこの暗闇くらやみの内部なかの、
 世よにもものすごい懲戒みせしめの賜たまでございました……』

敦子あつこさまの物もの語がたりはまだいろいろありましたが、だんだんきいて見みると、あの方かたが何なに
 より神様かみさまからお叱しかりを受うけたのは、自殺じさつそのものよりも、むしろそのあまりに強情かたくな
 性質せいしつ……一たん斯こうと思おもえば飽あくまでそれを押おし通とそうとする、我わが慢まんな氣性きしょうの為ため
 あつたように思おもわれました。敦子あつこさまはこんな事ことも言いいました。――
 『私わたくしは生前せいぜん何事なにごとも皆氣随氣俛みなきずいきままに押おしとおし、自分じぶんの思おもいが協かなわなければこの世よに生い甲き

妻がいないように考えて居りました。一生の間に私が自分の胸の中を或る程度まで打明けたのは、あなたお一人位のもので、両親はもとよりその他の何人にも相談一つしたことはございません。これが私の身の破滅の基だったのでございます。その性質はこちらの世界へ来てもなかなか脱けず、御指導の神様に対してさえ、すべてを隠そう隠そうと致しました。すると或時神様は、汝の胸に懐いていること位は、何も彼もくわしく判っているぞ、と仰せられて、私が今まで極秘にして居った、ある一つの事柄……大概お察しでございましょうが、それをすつぱりと言ひ当てられました。これにはさすがの私も我慢の角を折り、とうとう一切を懺悔してお恕を願いました。その為めに私は割合に早くあの地獄のような境地から脱け出ることができました。尤も私の先祖の中に立派な善行のものが居ったお蔭で、私の罪までがよほど軽くされたと申すことで……。何れにしても私のような強情な者は、現世に居っては人に憎まれ、幽界へ来ては地獄に落され、大へんに損でございます。これにつけて、私は一つ是非あなたに折入ってお詫言しなければならぬことがございます。実はこのお詫をしたいばかりに、今日わざわざ神様にお依みして、つれて来て戴きましたような次第で……。』

敦子さまはそう言つて、私に膝をすり寄せました。私は何事かしらと、襟を正まし

たが、案外それはつまらないことでございました。――

『あなたの方で御記憶があるかドーかは存じませぬが、ある日私がお訪ねして、胸の思いを打ちあけた時、あなたは私に向い、自分同志が良いのも結構だが、斯ういうことは矢張り両親の許諾を得る方がよい、と仰つしやいました。何を隠しましょう、私はその時、この人には、恋する人の、本当の気持は判らないと、心の中で大へんにあなたを軽視したのでございます。』

――しかし、こちらの世界へ来て、だんだん裏面から、人間の生活を眺めることが、できるようになって見ると、自分の間違つていたことがよく判るようになりました。私は矢張り悪魔に魅れて居たのでございました。――私は改めてここでお詫びを致します。何うぞ私の罪をお恕し遊ばして、元のとおりこの不束な女を可愛がつて、行末かけてお導きくださいますよう……。』

この人の一生には随分過失もあつたようで、従つて帰幽後の修行には随分つらいところもありましたが、しかしもともとしっかりした、負けぬ気性の方だけに、一歩一歩と首尾よく難局を切り抜けて行きまして、今ではすっかり明るい境

涯に達して居ります。それでも、どこまでも自分の過去をお忘れなく、『自分は他人さまのように立派な所へは出られない。』と仰つしやつて、神様をお願いして、わざと小さな岩窟のような所に籠つて、修行にいそしんで居られます。これなどは、むしろ私どもの良い亀鑑かと存じます。

三十六、弟橘姫

あまりに平凡な人達の噂ばかりつづきましたから、その埋合せという訳ではございませぬが、今度はわが国の歴史にお名前が立派に残っている、一人の女性にお目にかつたお話を致しましょう。外でもない、それは大和武尊様のお妃の弟橘姫様でございます……。

私達の間をつなぐ靈的因縁は別と致しましても、不思議に在世中から私は弟橘姫様と浅からぬ関係をもつて居りました。御存じの通り姫のお祠は相模の水と申すところにあるのですが、あそこは私の縁づいた三浦家の領地内なのでございます。で、三浦家ではいつも社殿の修理その他に心をくばり、又お祭でも催される場

合あには、必かならず使し者を立たてて幣へい帛はくを献ささげました。何なににしろ婦おんな女の亀鑑かがみとして世よに知しられた御方おかたの靈場れいじょうなので、三浦家みうらけでも代々だいだいあそこを大たい切せつに取とり扱あつかって居いたらしいのでございませう。そして私わたくし自身じしんもたしか在世中ざいせちゅうに何回なんかいか走水はしりみずのお祠やしろに参拜さんぱい致いたしました……。

ナニその時分じぶんの記憶きおくを物語ものがたれと仰おつしやるか……随分ずいぶん遠とおい遠とおい昔むかしのことで、まるきり夢ゆめのような感かんじがするばかり、とてもまとまったことは想おもい出だせそうもありませぬ。たしか走水はしりみずという所ところは浦賀うらがの入江いりえからさまで遠とおくもない、海うみと山やまとの迫せり合あつた狭せまい漁村ぎよそで、そして姫ひめのお祠やしろは、その村むらの小高こだかい崖がけの半腹はんぶくに建たつて居おり、石段いしだんの上うえからは海うみを越こえて上総房州かずさぼうしゅうが一ひと目めに見渡みわたされたように覺おぼえて居おります。

そうそういつか私わたくしが詣まいりしたのは丁度ちやうど春はるの半なかばで、あちこちの山やまや森もりには山桜やまざくらが満開まんかいでございませう。走水はしりみずは新井あらいの城しろから三四里さんしりばかりも隔へだつた地点とちんなので、私わたくしはよく騎馬きばで参まいつたのでした。馬うまはもちろん例れいの若月わかつきで、従者じゅうしやは一人ひとりの腰元こしもとの外ほかに、二三人にんの家来けらいが附ついて行いつたのでございませう。道みちは三浦みうらの東海岸ひがしかいがんに沿そつた街道かいどうで、たしか武山たけやまとか申もうす、可成かなり高たかい一ひとつの山やまの裾すそをめぐるて行くのですが、その日ひは折おりよく空そらが晴はれ上あがつていましたので、馬ば上じょうから眺ながむる海うみと山やまとの景色けしきは、まるで絵巻えまき

物をくり拵げたように美しかったことを今でも記憶して居ります。全くあの三浦の土地は、海の中に突き出た半島だけに、景色にかけては何処にもひけは取りませぬようで……。尤もそれは現世での話でございます。こちらの世界には竜宮界のようなきれいな所がありまして、三浦半島の景色がいかに良いと申しても、とてもくらべものにはなりませぬ。

領主の奥方が御通過というので百姓などは土下座でもしたか、と仰つしやるか……ホホまさかそんなことはございませぬ。すれ違う時にちよつと道端に避けて首をさげる丈でございます。それすら私には氣づまりに感じられ、ツイ外へ出るのが億劫で仕方がないのでした。幸いこちらの世界へ参つてから、その点の氣苦労がすっかりなくなつたのは嬉しうございますが、しかしこちらの旅はあまり、あつけなくて、現世でしたように、ゆるゆると道中の景色を味わうような面白味はさっぱりありません……。

こんな夢物語をいつまで続けたとて致方がございませぬから、良い加減に切り上げますが、兎に角弟橘姫様に対する敬慕の念は在世中から深く深く私の胸に宿つて居たことは事実でございます。『尊のお身代りとして入水された時の姫のお心持ちはどんなであつたらう……。』祠前に額いて昔を偲ぶ時に、私の両眼からは熱

い涙がとめどなく流れ落ちるのでした。

ところがいつか竜宮界を訪れた時に、この弟橘姫様が玉依姫様の末裔――

――御分霊を受けた御方であると伺いましたので、私の姫をお慕い申す心は一層強まっ

てまいりました。『是非とも、一度お目にかかつて、いろいろお話を承り、又お力添

を願わねばならぬ……。』――そう考えると矢も楯もたまらぬようになり、とうとうその

旨を竜宮界にお願いすると、竜宮界でも大そう歓ばれ、すぐその手続きをしてく

ださいました。

私がこちらで弟橘姫様にお目通りすることになったのはこんな事情からでござ

います。

三十七、初対面

竜宮界からかねて詳しい指図を受けて居りましたので、その時の私は思い切つてたつた一人で出掛けました。初対面のこと故、服装なども失礼にならぬよう、日頃好みの礼装に、例の被衣を羽織りました。

ブーツと何処までもつづく山路……大へん高い峠にかかったかと思うと、今度は降り坂になり、右に左にくねくねとつづらに折れて、時に樹木の間から蒼い海原がのぞきま
す。やがて行きついた所はそり立つ大きな巖と巖との間を削りとつたような狭い峽路で、
その奥が深い深い洞窟になつて居ります。そこが弟橘姫様の日頃お好みの御修
行場で、洞窟の入口にはチャーンと注連縄が張られて居りました。むろん橘姫
様はいつもここばかりに引籠つて居られるのではないのです。現世に立派なお祠があ
るとおり、こちらの世界にも矢張りそう言ったものがあり、御用があればすぐそちらへお
出ましになられるそうで……。

『御免遊ばしませ……。』

口にこそ出しません、私は心でそう思つて、会釈して洞窟の内部へ歩み入りますと、
早くもそれと察して奥の方からお出ましになられたのは、私が年来お慕ひ申していた弟
橘姫様でございました。打ち見るところお年齢はやつと二十四五、小柄で細面
の、大そう美しい御縹緖でございますが、どちらかといえ少し沈んだ方で、きりりと
やや釣り気味の眼元には、すぐれた御気性がよく伺われました。御召物は、これは又
私どもの服装とはよほど異いまして、上衣はやや広い筒袖で、色合いは紫がかつて居

りました、下衣は白地で、上衣より二三寸下に延び、それには袴のように襷が取つてありました。頭髮は頭の頂辺で輪を造つたもので、ここにも古代らしい匂が充分に漂つて居りました。又お履物は黒塗りの靴見いなものですが、それは木の皮か何ぞで編んだものらしく、そう重そうには見えませんでした……。

『私は斯ういうものでございますが、現世に居りました時から深くあなた様をお慕ひ申し、殊に先日乙姫さまから委細を承りましてから、一層お懐かしく、是非一度お目通りを願わずには居られなくなりました、一向何事も弁えぬ不束者でございますが、これから末長くお教えを受けさせて戴きとう存じます……。』

『かねて乙姫様からのお言葉により、あなたのお出でを心待ちにお待ち申して居りました。』とあちら様でも大そう飲んで私を迎えてくださいました。『自分とて、ただ少し早くこちらの世界へ引移つたという丈、これからはともどもに手を引き合つて、修行することに致しましょう。何うぞこちらへ……。』

その口数の少ない、控え目な物ごしが、私には何より有難く思われました。『矢張り歴史に名高い御方だけのことがある。』私は心の中で独りそう感心しながら、誘われるままに岩屋の奥深く進み入りました。

わたくし山^{やま}の修行場^{しゆぎやうば}へ移^{うつ}るまでは、矢張り岩屋住^{いわやすま}いをいたしましたが、しかし、ここは
ずつと大^{おお}がかりに出来^{でき}た岩屋^{いわや}で、両側^{りやうがわ}も天井^{てんじやう}ももの凄^{すこ}いほどギザギザした荒^{あらけ}
削^ずりの巖^{いわ}になつて居^いました。しかし外面^{おもて}から見た^みのとは違^{ちが}つて、内部^{なか}はちつとも暗^{くら}いこ
とはなく、ほんのりといかにも落付^{おちつ}いた光^{ひか}りが、室全体^{へやぜんたい}に漲^{みなぎ}つて居^おりました。『これな
ら精神^{せいしん}統一^{とういつ}一^{いつ}がうまくできるに相違^{そうい}ない。』餅屋^{もちや}は餅屋^{もちや}と申^{もう}しますか、私は矢張りそん
なことを考^{かんが}えるのでした。

ものの二丁^{ちやう}ばかりも進^{すす}んだ所^{ところ}が姫^{ひめ}の御修行^{ごしゆぎやう}の場所^{ばしょ}で、床一面^{ゆかいちめん}に何^{なに}やらふわつとした、
柔^{やわ}かい敷^{しき}物^{もの}が敷^しきつめられて居^おり、そして正^{しょう}面^{めん}の棚^{たな}見^みたいにできた凹^{くぼ}所^みが神床^{かんどこ}で、
ひとつの円^{まる}い御神鏡^{ごしんきやう}がキチンと据^すえられて居^いるばかり、他^{ほか}には何^{なに}一つ装飾^{そうしよく}らしいも
のは見^み当^{あた}りませんでした。

私^{わたくし}達^{たち}は神床^{かんどこ}の前^{ぜん}面^{めん}に、左^{ひだり}と右^{みぎ}に向^むき合^あつて座^ざを占^しめました。その頃^{ころ}の私^{わたくし}は最^も
大分^{だいぶん}幽界^{ゆうかい}の生^{せい}活^{かつ}に慣^なれて来^きていましたものの、兎^とに角^{かく}自分^{じぶん}より千^{せん}年^{ねん}あまりも以^い前^{ぜん}
に帰幽^{きゆう}せられた、史^し上^{じやう}に名高^{なだか}い御方^{おかた}と斯^こうして膝^{ひざ}を交^{まじ}えて親^{した}しく物語^{ものがた}るのかと思^{おも}うと、
何^{なに}やら夢^{ゆめ}でも見^みて居^いるよう^{かん}に感^{かん}じられて仕^{しか}たがないのでした。

三十八、姫の生立

私達わたくしたちの間あいだには、それからそれへと、物語ものがたりがとめどなくはずみましました。霊みたまの因いん

縁もつと申すものはまことに不思議な力を有もつているものらしく、これが初対面しよたいめんであり乍なが

ら、相互おたがいの間の隔へだの籬かきはきれいに除とり去さられ、さながら血ちを分わけた姉妹きょうだいのように、

何も彼なにかもすっかり心の底そこを打ち明あけたのでございました。

私わたくしというものは御覧ごらんの通り何なんの取柄とりえもない、短みじかい生しょう涯がいを送おくつたものでございます

が、それでも弟おとたち橘はな姫ひめ様さまは私の現世時代げんせいじだいの浮うき沈しずみに對たいして心こころからの同どう情じようを寄よせ

て、親身しんみになつてきてくださいました。『あなたも随ずい分ぶん苦勞くろうをなさいました……。』

そう言いつて、私わたくしの手を執とつて涙なみだを流ながされた時ときは、私は忝かたじけないやら、難有ありがたいやらで胸むねが一いつ

いになり、われを忘わすれて姫ひめの御膝おひざに縋すがりついていました。

が、そんな話はなしはただ私わたくしだけのことで、あなた方がたには格別かくべつ面白おもしろくも、又またおかしくもご

ざいますまいが、ただ其折弟そのおり橘はな姫ひめ様さま御自身ごしんの口づから漏もされた遠とお昔むかしの思おもひ出話でなし

——これはせめてその一端いったんなりとここでお伝つたえて置おきたいと存ぞんじます。何なににしろ日本にほん

の歴史れきしを飾かざる第一だいいちの花形はながたといえ、女性じよせいでは弟おとたち橘はな姫ひめ様さま、又また男性だんせいでは大和やまと

けるのみことさま
武尊様でございます。このお二人にからまる事蹟が少しでも現世の人達に伝わるこ

とになれば、私の拙き通信にも初めて幾らかの意義が加わる訳でございます。私にとり
てこんな冥加至極なことはございませぬ。尤も私の申上ぐるところが果して日本の古

い書物に載せてあることと合っているか、いないか、それは私にはさっぱり判りませぬ。
わたくし

私はただ自分が伺いましたままをお伝えする丈でございますから、その点はよくよくお含
みの上で取捨して戴き度う存じます。

それからもう一つ爰でくれぐれもお断りして置きたいのは、私がお取次ぎすることが、
決して姫御自身のお言葉そのままでなく、ただ意味だけを伝えることでございます。当時
の言語は含蓄が深いと申しますか、そのままではとも私どもの腑に落ちかぬところ
があり、私としては、不躰と知りつつも、何度も何度も問いかえして、やつとここまで
取りまとめたのでございます。で、多少は私のきき損ね、思い違いがないとも限りませ
ぬから、その点も何卒充分にお含み下さいますよう……。

『あなた様の御生立を伺わして戴き度う存じまするが……。』

機会を見て私はそう切り出しました。すると姫はしばらく凝乎と考え込まれ、それから
漸く唇を開かれたのでございました。――

『いかにとおむかしも遠い昔のこと、所ところの名も人ひとの名も、急きゆうには胸むねに浮うかびませぬ。——私わたくしの生うれたところは安芸あきの国府こくふ、父ちちは安藝淵真佐臣あきぶちまさをみ……代々だいだいこの国くにの司つかさを承つつて居おりました。尤もつとも父ちちは時ときの帝みかどから召めし出いだされ、いつもお側そばに仕つかえる身みとて、一いち年ねんの大部だいぶは不ふ在ざい勝しょうち、国元くにもとにはただ女小供おんなをどもが残のこつて居いるばかりでございました……』

『御ごきようだいもおありでございましたか。』

『自分じぶんは三人さんにんのきようだいの中なかの頭かしら、他ほかは皆男子みなおとこでございました。』

『いつもお国元くにもとのみにお暮くらしてございましたか？』

『そうのみとも限りませぬ。偶たまには父ちちのお伴ともをして大和やまとにのぼり、帝みかどのお目通めとおりをいたしたこともございます……』

『アノ大和武尊やまとたけるのみこと様さまとも矢張り大和やまとの方ほうでお目めにかかられたのでございまするか？』

『そうではありませぬ……。国元くにもとの館やかたで初めてお目めにかかりました……。』

山間さんかんの湖水こすいのように澄すみ切きつた、気高けだかい姫ひめのお顔かおにも、さすがにこの時ときは情思こころの動うごきが薄うすい紅葉もみじとなつて散ちりました。私わたくしは構かまわず問といつづけました。——

『何卒なにとぞその時ときの御模おんもよう様ようをもう少すこしくわしく伺うかがわせていただく訳わけにはまいりますまいか？ あれほどまでに深ふかい深ふかい夫婦めおとの御縁ごえんが、ただかりそめの事ことで結むすばれる筈はずはないと存ぞんじま

すが……。』

『さア……何所から話の糸口を手繰り出してよいやら……。』

姫はしばらくさし俯いて考え込んで居られました、その中次第にその堅い唇が少しづつ綻びてまいりました。お話の前後をつづり合わせると、大体それは次ぎのような次第でございました……。

三十九、見合い

それはたしかに、ある年の夏の初、館の森に蟬時雨が早瀬を走る水のように、喧しく聞えている、暑い真昼過ぎのことであつたと申します——館の内部は降つて湧いたような不時の来客に、午睡する人達もあわててとび起き、上を下への大騒ぎを演じたのも道理、その来客と申すのは、誰であらう、時の帝の珍の皇子、当時筑紫路から出雲路にかけて御巡遊中の小碓命様なのでございました。御随行の人数は凡そ五六十人、いずれも命の直属の屈強の武人ばかりでございました。序でにちよつと附け加えて置きますが、その頃命の直属の部下と申しますのは、いつもこれ位の小人数でし

かなかつたそうで、いざ戦鬪となれば、何れの土地に居られましても、附近の武人ども
 が、後から後から馳せ参じて忽ち大軍になつたと申します。『わざわざ遠方からあまた
 の軍兵を率いて御出征になられるようなことはありませぬ……。』橘姫はそう仰つ
 しゃつて居られました。何所へまいるにもいつも命の御随伴をした橘姫がそう申され
 ることでございますから、よもやこれに間違はあるまいと存じます。

それは兎に角、不意の来客としては五六十人はなかなかの大人数でございます。
 ましてそれが日本国中にただ一人あつて、二人とはない、軍の神様の御同勢とあ
 りましては大へんでございます。恐らく森の蟬時雨だつて、ぴつたり鳴き止んだことで
 ございましょう。ただその際何より好都合であつたのは、姫の父君が珍らしく国元
 へ歸つて居られたことで、御自身采配を振つて家人を指図し、心限りの歓待をさ
 れた為めに、少しの手落もなかつたそうでございます。それについて姫は少しくお言葉を
 濁して居りましたが、何うやら小碓命様のその日の御立寄は必らずしも不意打で
 はなく、かねて時の帝から御内命があり、言わば橘姫様とお見合の為めに、それ
 となくお越しになられたらしいのでございます。

何れにしても姫はその夕、両親に促がされ、盛装してお側にまかり出で、御接

待に当られたのでした。『何分にも年若き娘のこととて恥かしさが先立ち、格別のお取持もできなかった……。』姫はあつさり、ただそれつきりしかお口には出されませんでしたが、何やらお二人の間を維いだ、切つても切れぬ固い縁の糸は、その時に結ばれたらしいのでございます。實際又何れの時代をさがしても、この御二人ほどお似合の配偶はめつたにありそうにもございませぬ。申すもかしこけれど、お婿様は百代にとり人と言われる、すぐれた御器量の日の御子、またきさきしとやかなお姿の中に凛々しい御気性をつつまれた絶世の佳人、このお二人が一目見てお互にお氣に召さぬようなことがあつたら、それこそ不思議でございます。お年輩も、たしか命はその時御二十四、姫は御十七、どちらも人生の花盛りなのでございました。

これは余談でございますが、私がこちらの世界で大和武尊様に御目通りした時の感じを、ここでもちよつと申上げて置きたいと存じます。あんな武勇絶倫の御方でございますから、お目にかからぬ中は、どんなにも怖い御方かと存じて居りましたが、實際はそれはそれはやさしい御風貌なのでございます。むしろ御筋骨はすぐれて逞しうございしますが、御顔は色白の、至つてお奇麗な細面、そして少し釣気味のお目元にも、又きりりと引きしまつたお口元にも、殆んど女性らしい優さしみを湛えて居られるの

でございます。『成るほどこの方なら少女姿に仮装られてもきして不思議はない筈……』失礼とは存じながら私はその時心の中でそう感じたこととでございました。

それはさて置き、命はその際は二晩ほどお泊りになつて、そのままお帰りになられましたが、やがて帝のお裁可を仰ぎて再び安芸の国にお降り遊ばされ、その時はいよいよ正式に御婚儀を挙げられたのでございました。尤も軍務多端の際とて、その式は至つて簡単なもので、ただ内輪でお杯事をされただけ、間もなく新婚の花嫁様をお連れになつて征途に上られたとのこととでございました。『斯ういう場合であるから何所へまいるにも、そちを連れる。』命はそう仰せられたそうで、又姫の方でも、いとしき御方と苦勞艱難を共にするのが女の勤めと、固く固く覚悟されたのでした。

四十、相摸の小野

いくとせ またがぞくとせいばつ いくさたびじ
 幾年かに跨る賊徒征伐の軍の旅路に、さながら影の形に伴う如く、ただの一日として脊の君のお側を離れなかつた弟橘姫の涙ぐましい犠牲の生活は、実にその時を境界として始められたのでした。或る年の冬は雪沓を穿いて、吉備国から出雲国への、

国境の險路を踏み越える。又或る年の夏には焼くような日光を浴びつつ阿蘇山の奥深くぐぐり入りて賊の巢窟をさぐる。その外言葉につくせぬ数々の難儀なこと、危険なことに遇われましたそうで、歳月の経つと共に、そのくわしい記憶は次第に薄れては行つても、その時胸にしみ込んだ、感じのみは今も魂の底から離れずに居るとの仰せでございました。

こんな苦しい道中のことでございますから、御服装などもそれはそれは質素なもので、足には藁沓、身には筒袖、さして男子の旅装束と相違していませんでした。なれども、姫は最初から心に固く覚悟して居られることとて、ただの一度も愚痴めきたことはお口に出されず、それにお体も、かぼそいながら至つて御丈夫であつたため、一行の足手纏いになられるようなことは決してなかつたと申すことでございます。

かかる艱苦の旅路の裡にありて、姫の心を支ふる何よりの誇りは、御自分一人がいつも命の相伴と決つて居ることのようでした。『日本一の日の御子から又なきものに愛しまれる……。』『そう思う時に、姫の心からは一切の不満、一切の苦勞が煙のように消えて了うのでした。当時の習慣でございしますから、むろん命の御身辺には夥多の妃達がりまいて居られました。それ等の中には橘姫よりも遥かに家柄の高いお方もあり、

またきりようじまん
又縹緖自慢の、それはそれは艶麗な美女も居ないのではないのです。が、それ等は
言わば深窓を飾る手活の花、命のお寛ぎになられた折の軽いお相手にはなり得ても、い
ざ生命懸けの外の外のお仕事にかかられる時には、きまり切つて橘姫にお声がかかる。こ
れでは『仮令死んでも……』という考が橘姫の胸の奥深く刻み込まれた筈でござ
いましょう。

だんだん伺つて見ると、数限りもない御一代中で、最大の御危難といえ、矢張り、
あの相摸国での焼打だつたと申すことでございます。姫はその時の模様丈は割合
にくわしく物語られました。――

『あの時ばかりは、いかに武運に恵まれた御方でも、今日が御最後かと危まりました。自
分は命のお指図で、二人ばかりの従者にまもられて、とある丘の頂辺に避けて、命の御身
の上を案じわびて居りましたが、その中四方から急にめらめらと燃え広がる野火、やがて
見渡す限りはただ一面の火の海となつて了いました。折から猛しい疾風さえ吹き募つて、
命のくぐり入られた草叢の方へと、飛ぶが如くに押し寄せて行きます。その背後は一帯
の深い沼沢で、何所へも退路はありません。もうほんのひと煽りですべては身の終り……
。そう思うと私はわれを忘れて、丘の上から駆け降りようとしたが、その瞬間、

忽ち^{たちま}ゴーツと耳^{みみ}もつづれるような鳴動^{なりどう}と共に、今^{いま}までとは異^{ちが}つて、西^{にし}から東^{ひがし}へと向^むきをかえた一陣^{じん}の烈風^{れつふう}、あなやと思う間^{おも}もなく、猛火^{もうか}は賊^{ぞく}の隠^{かく}れた反対^{はんたい}の草叢^{くさむら}へ移^{うつ}つてまゐりました……。その時^{とき}たちまち、右手^{みぎて}に高く、御秘蔵^{ごひそう}の御神劍^{ごしんけん}を打^ふり翳^{かざ}し、漆^{うるし}の黒^{くろ}髪^{かみ}を風^{かぜ}に靡^{なび}かせながら、部下^{ぶか}の軍兵^{つわもの}どもよりも十歩^{じふ}も先^{さき}んじて、草原^{くさはら}の内^{うち}部^ぶから打^うつて出^いでられた命^{みこと}の猛^{たけ}き御姿^{おんすがた}、あの時^{とき}ばかりは、女子^{おんなこ}の身^みでありながら覚^{おぼ}えず両手^{りやうて}を空^{そら}にさしあげて、声^{こえ}を限^{かぎ}りにわあツと叫^{さけ}んで了^{しま}いました……。後^{あと}で御伺^{おうかが}いすると、あの場^ば合^{あい}、命^{みこと}が御難儀^{ごなんぎ}を脱^{のが}れ得^えたのは、矢張^{やは}りあの御神劍^{ごしんけん}のお蔭^{かげ}だったそうで、燃^もゆる火^ひの中^{なか}で命^{みこと}がその御鞆^{おんさや}を払^はわれると同時に、風向^{かざむ}きが急^{きゆう}に變^{かわ}つたのだと申^{もう}すことでございます。右^{みぎ}の御神劍^{ごしんけん}と申^{もう}すのは、あれは前年^{ぜんねん}わざわざ伊勢^{いせ}へ参^{まい}られた時^{とき}に、姨^{おば}君^{きみ}から授^{さず}けられた世^よにも尊^{とうと}い御神宝^{ごしんぼう}で、命^{みこと}はいつもそれを錦^{にしき}の袋^{ふくろ}に納^{おさ}めて、御自身^{ごじしん}の肌身^{はだみ}につけて居^おられました。私^{わたくし}などもただ一度^{ひと}しか拝^{おが}まして戴^{いた}いたことはございませぬ……。』

これが大^{だい}体^{たい}姫^{ひめ}のお物語^{ものがた}りでございます。その際^{さい}命^{みこと}には、火^か焰^{えん}の中^{なか}に立^たちながらも、しきりに姫^{ひめ}の身^みの上^{うへ}を案^{あん}じわびられたそうで、その忝^{かたじけ}ない御情^{おごころ}意^ぎはよほど深^{ふか}く姫^{ひめ}の胸^{むね}にしみ込んで居^いるらしく、こちらの世界^{せかい}に引^ひ移^{うつ}つて、最^もう千^{ねん}年^{ねん}にも余^{あま}るといふのに、今^{いま}でも当時^{とうじ}を想^{おも}い出^{いだ}せば、自^{おの}ずと涙^{なみだ}がこぼれると言^いつて居^おられました。

かくまで深いお二人の間でありながら、お兄様としては、若建王と呼ばれる御方がただ一人——それも旅から旅へといつも御不在勝ちであつたために、御自分の御手で御養育はできなかつたと申すことでございました。つまり橘姫の御一生はすべてを脊の君に捧げつくした、世にも若々しい花の一生なのでございました。

四十一、海神の怒り

わたくしが橘姫のお物語の中には、まだいろいろお伝えしたいことがございまして、とても一度に語りつくすことはできません。何れ又良い機会がありましたら改めてお漏しすることとして、ただあの走水の海で御入水遊ばされたお話だけは、何うあつても省く訳にはまいりますまい。あれこそはひとりこの御夫婦の御一代を飾る、尤も美しい事蹟であるばかりでなく、又日本の歴史の中での飛び切りの美談と存じます。私は成るべく姫のお言葉そのままをお取次ぎすることに致します。

『わたくし達が海辺に降り立つたのはまだ朝の間のことでございました。風は少し吹いて居りましたが、空には一点の雲もなく、五六里もあろうかと思わるる広い内海の彼方に

は、総ふさの国くにの低い山やま々が絵えのようにぽつかりと浮うかんで居おりました。その時ときの私わたくし達の人数にんずはいつもよりも小勢こせいで、かれこれ四五十名めいも居おつたでございましょうか。仕立したてた船ふねは二艘そう、どちらも堅牢けんろうな新船あらふねでございました。

『一同どうが今日きょうの良き船出ふなでを寿ことほぎ合あつたのもほんの束の間つかま、やや一里りばかりも陸おかを離はなれたと覺おぼしき頃ころから、天候てんこうが俄にわかに不穩ふおんの模様もように變かわつて了しまいました。西北せいほくの空そらからどつと吹ふき寄よせる疾風はやて、見る見る船ふねはグルリと向むきをかえ、人々ひとびとは滝たきなす飛沫しぶきを一ぱいに浴あびました。それにあの時ときの空模様そらもようの怪あやしさ、赭黒あかぐろい雲くもの峰みねが、右みぎからも左ひだりからも、もくもくと群むらがり出いでて満天まんてんに折おり重かさなり、四辺あたりはさながら真夜中まよなかのような暗くらさに鎖とぎされたと思おもう間まもなく、白刃しらばを植うえたような稲妻いなづまが断間たえまなく雲間あいだに閃ひらめき、それにつれてどつと降ふりしきる大粒おおつぶの雨あめは、さながら礫つぶてのように人々ひとびとの面おもてを打ちました。わが君きみをはじめ、一同どうはしきりに舟子達かこたちを励はげまして、暴れ狂あくるう風浪ふうろうと闘たたかいましたが、やがて両三人りょうさんにんは浪なみに呑のまれ、残余のこりは力ちからつきて船底ふなぞこに倒たおれ、船ふねはいつ覆くつがえるか判わからなくなりました。すべてはものの半刻はんときと経たたぬ、ほんの僅わずかの間のことまでございました。

『かかる場合ばあいにのぞみて、人間にんげんの依たのむところはただ神業かみわざばかり……。私わたくしは一心しん不乱らんに、神様かみさまにお祈いの禱りをかけました。船ふねのはげしき動揺どうようにつれて、幾度いくたびとなく投げ出なさるる

私の軀——それでも私はその都度起き上りて、手を合せて、熱心に祈りつづけました。と、忽ち私の耳にはつきりとした一つの囁き、『これは海神の怒り……今日限り命の生命を奪る……。』覚えずはつとして現実にかえれば、耳に入るはただすさまじき浪の音、風の叫び——が、精神を鎮めると又もや右の怪しき囁きがはつきりと耳に聞えてまいります……。

『二度、三度、五度……幾度くりかえしてもこれに間違のないことが判つた時に、私はすべてを命に打ち明けました。命は日頃の、あの雄々しい御氣性として「何んの愚かなこと——」とただ一言に打ち消して了われましたが、ただいかにしても打ち消し得ないのは、いつまでも私の耳にきこゆるあの不思議の囁きでございました。私はとうとう一存で、神様にお縋りました。「命は御国にとりてかけがえのない、大切な御身の上……何卒この数ならぬ女の生命を以て命の御生命にかえさせ玉え……。」二度、三度この祈りを繰りかえして居る内に、私の胸には年来の命の御情思がこみあげて、私の両眼からは涙が滝のように溢れました。一首の歌が自ずと私の口を突いて出たのもその時でございまず。真嶺刺し、相摸の小野に、燃ゆる火の、火中に立ちて、問いし君はも……。

『右の歌を歌い終ると共に、いつしか私の軀は荒れ狂う波間に跳つて居りました、その時

ちらと拝はいしたわが君きみのはつと愕おどろかれた御面影おんおもかげ——それが現世げんせでの見納めみおさでございました。
』

×

×

×

×

橘姫たちばなひめの御物語おんものがたりはひと先まずこれにて打ち切りうちきりといたしますが、ただ私わたくしとして、ちよつとここで申添もうしそえて置おきたいと思おもいますのは、海神かいじんの怒いかりの件けんでございます。大やまと和武尊わぶくみさまのような、あんな御立派ごりっぱなお方が、何故なぜなれば海神かいじんの怒いかりを買かわれたか？——これは恐おそらくどなたも御不審ごふしんの点てんかと存ぞんじまするが、実は私じつわたくしもこれにつきて、指しじう導役やくのお爺じいさんにその訳わけを伺うかったことがあるのでございます。その時ときお爺じいさんは斯こう答こた

えられました。——

『それは斯こういう次第しだいじゃ。すべて物ものには表おもてと裏うらとがある。命みことが日本国にほんこくにとりて並ならびなき大恩人だいおんじんであることはいうまでもなければ、しかし殺ころされた賊徒ぞくとの身みになつて見みれば、命みことほど、世よにも憎にくいものはない。命みことの手にかかつて滅ほろぼされた賊徒ぞくとの数は何万なんまんとも知しれぬ。で、それ等らが一団だんの怨霊おんりようとなつて隙すきを窺うかがい、たまたま心こころよからぬ海神かいじんの援たすけけを獲えて、あんな稀有けうの暴風雨あらしをまき起おこしたのじゃ。あれは人霊じんれいのみでできる仕業しわざでなく、又海神またかいじんのみであつたら、よもやあれほどのいたずらはせなかつたであらう。たまたま斯こ

うした二つの力が合致したればこそ、あのような災難が急に降って湧いたのじや。当時の橘姫にはもとよりそうした詳しい事情の判らう筈もない。姫があれをただ海神の怒りとのみ感じたのはいささか間違つて居るが、それはそうとして、あの場合の姫の心胸にはまことに涙ぐましい真剣さが宿つていた。あれほどの真心が何ですぐ神々の御胸に通ぜぬことがあるう。それが通じたればこそ大和武尊には無事に、あの災難を切りぬけることが出来たのじや。橘姫は矢張り稀に見るすぐれた御方じや。』

私はこの説明が果してすべてを尽しているか否かは存じませぬ。ただ皆さまの御参考までに、私の伺つたところを附け加えて置くだけでございます。

四十二、天狗界探検

あまり面会談ばかりつづいたようでございますから、今度は少し模様をかえて、その頃修行の為に私がこちらで探検に参りました、珍らしい境地のお話をするにいたしましょう。こちらの世界には、現世とは全く異つた、それはそれは変つたものが住んで居るところがあるのでございます。それがあまりにも飛び離れ過ぎていますので、あ

なた方は事によると半信半疑、よもやとお考えになられるか存じませぬが、これが事実であつて見れば、自分の考で勝手に手加減を加える訳にもまいりませぬ。あなた方がそれを受け入れるか、入れないかは全く別として、兎も角も私の眼に映じたままを率直に述べて見ることに致します。

『今日は天狗の修行場に連れて行く……。』

ある日例の指導役のお爺さんが私にそう言われます。私には天狗などというものを別に見たいという考もないのでございましたが、それが修行の爲めとあればお断りするのもドーかと思ひ、浮かぬ氣分で、黙つてお爺さんの後について、山の修行場を出掛けました。

いつもとは異なり、その日は修行場の裏山から、奥へ奥へ奥へとどこまでも険阻な山路を分け入りました。こちらの世界では、どんな山坂を登り降りしても格別疲労は感じませぬが、しかし何やらシーンと底冷えのする空氣に、私は覺えず総毛立つて、軀がすくむように感じました。

『お爺さま、ここはよほどの深山なのでございましょう……。私はぞくぞくしてまいりました……。』

『寒く感ずるのは山が深いからではない。ここはもうそろそろ天狗界に近いので、一帯の空気が自ずと異つて来たのじや。大体天狗界は女人禁制の場所であるから汝にはあまり氣持が宜しくあるまい……。』

『よもや天狗さんが怒つて私を浚つて行くようなことはございますまい……。』

『その心配は要らぬ。今日は神界からのお指図を受けて尋ねるのであるから、立派なお客様扱ひを受けるであらう。二度と斯うした所に来ることもあるまいから、よく

氣をつけて天狗界の状況をさぐり、又不審の点があつたら遠慮なく天狗の頭目に訊ねて置くがよいであらう……。』

やがて古い古い杉木立がぎつしりと全山を蔽いつくして、昼尚お暗い、とてもものすごい所へさしかかりました。私はますます全身に寒氣を感じ、心の中では逃げて歸りたい位に思いましたが、それでもお爺さんが一向平氣でズンズン足を運びますので、漸々と思ひでついて参りますと、いつしか一軒の家屋の前へ出ました。それは丸太を切り組んで出来た、やつと雨露を凌ぐだけの、極めてざつとした破屋で、広さは畳ならば二十畳は敷ける位でございましょう。が、もちろん畳は敷いてなく、ただ荒削りの厚板張りになつて居りました。

『ここが天狗の道場じや。人間の世界の剣術道場によく似て居るであろうが……。』

そんなことを言ってお爺さんは私を促して右の道場へ歩み入りました。

と見ると、室内には白衣を着た五十余歳と思われる一人の修験者らしい人物が居て、鄭重に腰をかがめて私達を迎えました。

『良うこそ……。かねてのお達しで、あなた方のお出でをお待ち受けして居りました。』
わたくしただ

私は直ちにこれが天狗さんの頭目であるな、と悟りましたが、かねて想像して居たのとは異つて、格別鼻が高い訳でもなく、ただ体格が普通人より少し大きく、又眼の色が人を射るように強い位の相違で、そしてその総髪にした頭の上には例の兜巾がチョコンと載つて居りました。

『女人禁制の土地柄、格別のおもてなしとてでき申さぬ。ただいささか人間離れのした、一風変つているところがこの世界の御馳走で……。』

案外にさばけた挨拶をして、笑顔を見せてくれましたので、私も大へんに心が落つき、天狗さんというものは割合にやさしい所もあるものだと思ひました。

『今日はとんだお邪魔を致しまする。では御免遊ばしませ……。』

わたくしはきもの
私は履物を脱いで、とうとう天狗さんの道場に上り込んでしまいました。

四十三、天狗の力業

斯んな風に物語ると、すべてがいかにも人間界の出来事のように見えて、をかしなものでございますが、もちろんこの天狗さんは、私達に見せるために、態と人間の姿に化けて、そして人間らしい挨拶をして居たのでございます。道場だつて同じこと、天狗さんに有形の道場は要らない筈でございしますが、種がなくては掴まえてころがなさ過ぎますから、人間界の剣術の道場のようなものを仮りに造り上げてわたくしたち私達に見せたのでございましょう。すべて天狗に限らず、幽界の住人は化るのが上手でございしますから、あなた方も何卒そのおつもりで、私の物語をきいて戴き度う存じます。さもないと、すべてが一篇のお伽噺のように見えて、さつぱり値打がないものになりそうでございします。

それはそうと、私達がその時面会した天狗さんの頭目というのは、仲間でもなかなか力のある傑物だそうでございまして、お爺さんが何か一つ不思議な事を見せてくれ

と依みますと、早速二つ返事で承諾してくれました。

『われわれの芸と申すは先ずざつと斯んなもので……。』

言うより早く天狗さんは電光のように道場から飛び出したと思う間もなく、忽ちするすると庭前に聳えている、一本の杉の大木に駆け上りました。それは丁度人間が平地を駆けると同じく、指端一つ触れずに、大木の幹をば蹴って、空へ向けて駆け上るのでございますが、その迅さ、見事さ、とても筆や言葉につくせる訳のものではありません。私は覚えす坐席から立ち上つて、呆れて上方を見上げましたが、その時はモ一天狗さんの姿が頂辺の枝の茂みの中に隠れて了つて、どこに居るやら判らなくなつて居ました。

と、やがて梢の方で、バリバリという高い音が致します。

『木の枝を折っているナ……。』

お爺さんがそう言われている中に、天狗さんは直径一尺もありそうな、長い大きな杉の枝を片手にして、二三十丈の虚空から、ヒラリと身を躍らして私の見ている、すぐ目の前に降り立ちました。

『いかがでござる……人間よりも些と腕ぶしが強いでござろうが……。』

いとど得意な面持で天狗さんはそう言つて、つづいて手にせる枝をば、あたかもそれが芋殻でもあるかのように、片端からいきつては棄て、引きつては棄て、すっかり粉々にしてしまいました。

が、私としては天狗さんの力量に驚くよりも、寧ろその飽くまで天真爛漫な無邪氣さに感服してしまいました。

『あんな鹿爪らしい顔をしているくせに、その心の中は何という可愛いものであろう！』

これなら神様のお使者としてお役に立つ筈じや……。

私は心の裡でそんなことを考えました。私が天狗さんを好きになつたのは全くこの時からでございます。尤も天狗と申しましたが、それには矢張り沢山の階段があり、質のよくない、修行未熟の野天狗などになると、神様の御用どころか、つまらぬ人間を玩具にして、どんなに悪戯をするか知れませぬ。そんなのは私としても勿論大嫌いで、皆様も成るべくそんな悪性の天狗にはかかり合われぬことを心からお願

い致します。が、困ったことに、私どもがこちらから人間の世界を覗きますと、つまらぬ野天狗の捕虜になつての方々が随分沢山居られますようで……。大きなお世話

かは存じませぬが、私は蔭ながら皆様の為めに心を痛めて居るのでございます。くれぐ

れも天狗とお交際になるなら、できるだけ強い、正しい、立派な天狗をお選びなさいませ。まごころから神様にお願ひすれば、きつとすぐれたのをお世話して下さるものと存じます……。

四十四、天狗の性来

さてこの天狗と申すものの性来——これはどこまで行つても私どもには一つの大きな謎で、查れば查べるほど腑に落ちなくなるようなところがございます。兎も角、私があの時、天狗の頭目に就いて問ひたしたところに基き、ざつとそのお話を致して見ることにしましょう。

先ず天狗の姿から申し上げましょう。前にものべた通り、天狗は時と場合で、人間の他のいろいろなものの姿に上手に化けます。かく申す私なども最初はうつかりその手に乗せられましたもので……。しかし近頃ではもうそんな拙な真似はいたしません。天狗がどんな立派な姿に化けていても、すぐその正体を看破してしまいます。大体に於て申しますと、天狗の正体は人間よりは少し大きく、そして人間よりは寧ろ獣に

似て居り、普通全身が毛だらけでございます。天狗の中のごく上等のもののみが人間に近い姿をして居りますように……。

但しこれは姿のある天狗に就いて申したのでございます。天狗の中には姿を有たないのもございます。それは青味がかった丸い魂で、直径は三寸位でございましょうか。現わたくしに私どもが天狗界の修行場に居った時にも、三つ四つ樹の枝にひつついて光って居りました。

『あれはモーすつかり修行が積んで、姿を棄てた天狗達でござる……。』

天狗の頭目はそう私に説明してくれました。

天狗の姿も不思議でございますが、その生立は一層不思議でございます。天狗には別に両親というものがなく、人間が地上に発生した、遠い遠い原始時代に、斯ういうものも必要であろうという神様の思召で言わば一種の副産物として生れたものだと申すこととでございます。天狗の頭目も『自分達は人間になり切れなかつた魂でござる……。』と、あつさり告白して居りました。私はそれをきいた時に、何やら天

狗さんに対して気の毒に感じられたのでございました。兎も角も斯んな手続きで生れたのでございますから、天狗というものは全部中性……

：つまり男性でも、又女性でもないのでございます。これでは天狗の氣持が容易に人間にのみ込めない筈でございます。人間の世界は、主従、親子、夫婦、兄弟、姉妹等の複雑つた關係で、色とりどりの綾模様を織り出して居りますが、天狗の世界はそれに引きかえて、どんなにも一本調子、又どんなにも殺風景なことでございましょう。天狗の生活に比べたら、女人禁制の禪寺、男子禁制の尼寺の生活でも、まだどんなにも人情味たつぷりなものがありません。『全く不思議な世界があればあるもの……。』私はつくづくそう感じたのでございました。

斯く天狗は本来中性ではありますが、しかし性質からいえば、非常に男らしく武張つたのと、又非常に女らしく優しいのとの区別があり、化する姿もそれに準じて、或は男になったり、或は女になったりすることでございます。日本と申す国は古来尚武の氣性に富んだお国柄である為め、武芸、偵察、戦争の駆引等にすぐれた、つまり男性的の天狗さんは殆んど全部この国に集つて了い、いざとなれば目覚ましい働きをしてくれますので、その点大そう結構でございますが、ただ愛とか、慈悲とか言つたような、優しい女性式の天狗は、あまりこの国には現われず、大部分外国の方へ行つて了つてゐるようでございます。西洋の人が申す天使——あれにはいろいろ等差

があり、偶には高級の自然靈を指している場合もありますが、しかしちよいちよい病床に現われたとか、画家の眼に映ったとかいうのは、大てい女性化した天狗さんのようでございます。

大体天狗の働きはそう大きいものではないらしく、普通は人間に憑つて小手先きの仕事をするのが何より得意だと申すことでございます。偶には局部的の風位は起せても、大きな自然現象は大抵皆竜神さんの受持にかかり、とても天狗にはその真似ができないと申すことでございます。

最後に私があの時天狗さんの頭目からきかされた、人浚いの秘伝をお伝えして置きましよう。

『人を浚うということが本当にできるものでございますか？』

そう私が訊ねますと、天狗の頭目はいとど得意の面持で、斯んな風に説明してくれたのでした。――

『あれは本当といえば本当、ゴマカシといえばゴマカシでござる。われわれは肉体ぐるみ人間を遠方へ連れて行くことはめつたにござらぬ。肉体は通例附近の森蔭や神社の床下などに隠し置き、ただ引き抽いた魂のみを遠方に連れ出すものでござる。

人間にんげんというものは案外あんがい感じかんじの鈍いにぶもので、自分の魂じぶんたましが体からだから出たり、入ったりすることに気づかず、魂たましいのみで経験けいけんしたことを、宛あたかも肉体にくたいぐるみ実地じつちに見聞けんぶんしたように勘か違いちがいして、得意とくいになつて居るもので……。側わきでそれを見るのはよほど滑稽こっけいな感じかんじがするものでござる……。』

四十五、竜神の修行場

天狗界てんぐかいの探検たんけんに引きつづいて、私は指導役しどうやくのお爺さんじいから、竜神りゅうじんの修行場しゆぎやうばの探検たんけんを命めいぜられました。――

『いつかは竜宮界りゅうぐうかいへの道みちすがら、ちよつと竜神りゅうじんの修行場しゆぎやうばをのぞかしたこともあるが、あれではあまりにあつけなかつた。もう一度どそち汝かを彼所かしこへ連れて行くゆとしよう。あの修行場しゆぎやうばには一人ひとりの老練ろうれんな監督者かんとくしやが居るから、不審ふしんの点てんは何なになりとそれに訊たずねるがよい。』

『そのお方も矢張り竜神りゅうじんさんでございますか……。』
『無論むろんそうじゃ。が、俺わしと同様どうよう、人間にんげんと面会めんかいする時は人間にんげんの姿すがたに化ばけて居る……。』

『一度行つたことのある境地でございますから、道中の見物は一切又キにして、私達は一と思ひに、あのものすごい竜神の湖水の辺へ出て了いました。こちらの世界では遅く歩くも、速く歩くも、すべて自分の勝手手で、そこはまことに便利でございす。』

と見ると、水辺の、とある巨大な巖の上には六十前後と見ゆる、一人の老人が、佇んで私達の来るのを待つて居りました。服装その他大体は私の案内役のお爺さんに似たり寄ったり、ただいくらか肉附きがよく、年輩も二つ三つ若いように見えました。それが監督の竜神さんであることはここに断るまでもありますまい。

一応簡単な挨拶を済ませてから、私は早速右の監督のお爺さんに話かけました。

『修行場の模様はいつか拝見させて戴きましたので、今日はむしろ竜神さんの生括につきて、いろいろ腑に落ちかねる点を伺いたいののでございすが……。』
『何なりと訊ねて貰います。研究の為めとあれば、俺の方でもそのつもりで、差支なき限り何も彼も打ち明けて話すことにしましょう。竜神の世界は人間界とは

大分に勝手が異うから、訊く方でも成るべくまごつかぬように……。』

あつさりとさばけた態度で、そう言われましたので、私の方でもすっかり安心して、思い浮ぶまま無遠慮にいろいろな事をおきしました、その時の問答の全部をここでお伝えする訳にもまいり兼ねますが、ただあなた方の御参考になりそうな箇所は、成るべく洩なく拾い出ししましょう。

問『竜神の子供は現在でも矢張り生れているのでございますか？』

答『人間の世界で子供が生れるように、こちらでもズンズン殖えます……。』

問『生れたての若い竜神の軀はどんな軀でございますか？』

答『別に変った軀でもないが、しかし人間からいえばつまり一の幽体、もちろん肉眼で見えることはできぬ。大さは普通三尺もあろうか……。しかし伸縮は自由自在であるから、言わば大さが有って無いようなものじゃ……。』

問『蛇とは何う異なりますか？』

答『蛇はもともと地上の下級動物、形も、性質も、資格も竜神とは全く別物じゃ。蛇がいかに功勞経たところで竜神になれる訳のものではない……。』

問『竜神さんは矢張り人間の御先祖なのでございますか？』

答『左様、先祖といえは先祖であるが、寧ろ人間の遠祖、人間の創造者と言ったがよいであろう。つまり竜神がそのまま人間に変化したのではない。竜神がその分霊を地上に降して、ここに人類という、一つの新しい生物を造り出したのじや。』

問『只今でも竜神さんはそう言ったお仕事をなさいますか？』

答『イヤこれは最初人類を創造り出す時の、ごく遠い太古の神業であつて、今日では最早その必要はなくなつた。そなたも知るとおり人間の男女は立派に人間の子を生んで居るであろが……。』

そう言つてお爺さんはにつこりともせず、正面から私に鋭い一瞥を与えられました。

四十六、竜神の生活

私はひるまず質問をつづけました。――

問『竜神にも人間のように死ぬことがございますか？』

答『人間界にて考えているような、所謂死というものはもちろんない。あれは物質

の世界のみに起る、一つのうるさい手続なのじゃ。——が、竜神の軀にも一つの
変化が起るのは事実である。そなたも知る蛇の脱殻——丁度あれに似た薄い薄い皮
が、竜神の軀から脱けて落ちるのじゃ。竜神は通例しツとりした沼地のよう
な所でその皮を脱ぎすてる……。』

問『竜神さんの分霊が人体に宿ることは、今日では絶対に無いのでございます
か？』

答『竜神の分霊が直接人体に宿つて、人間として生れるということは絶対に
ないと言つてよい……。が、一人の幼児が母胎に宿つた時に、同一系統の竜
神がその幼児の守護霊又は司配霊として働くことは決して珍らしいことでもな
い。それが竜神として大切な修業の一つでもあるのじゃ……。』

問『竜神にも成年期がございますか。』

答『それはある。竜神として修行を積み重ねば一人前にはなれない……。』

問『大体成年期は何歳位でございますか？』

答『これはいかにも無理な質問じゃ。本来こちらの世界に年齢はないのじゃから……。

が、人間の年齢に直して見たら、はつきりとは判らぬが、凡そ五六百年位のところであろうか……。」

問『矢張り人間のるように婚礼の式などもございますもので……。』

答『人間界の儀式とは異うが、矢張り夫婦になる時には定まった礼儀があり、そして上の竜神様からのお指図を受ける……。』

問『矢張り一夫一婦が規則でございますか？』

答『無論それが規則じや。修行の積んだ、高い竜神となれば、決してこの規律に背くようなことはせぬ。しかし乍ら靈格の低い竜神の間にはそのみも言われぬ節がある……。』

問『生れるのは矢張り一体づつでございますか？』

答『一体が普通じや、双生児などはめつたにない……。』

問『お産ということもありますもので……。』

答『妊娠する以上お産もある。その際、女性の竜神は大抵どこかに姿を隠すもので……。』

問『一對の夫婦の間に生れる子供の数はどれ位でございましょうか？』

答『それは判らぬ。通例よほど沢山で、幾人と勘定はしかねるのじゃ。』

問『年齢を取れば矢張り子供を生まぬようになるものでございますか?』

答『年齢を取るからではない、浄化するから子供を生まぬようになるのじゃ……。』

問『浄化したのと、浄化しないのとの区別は、何うして見分けられますか? 矢張り

色でございますか?』

答『左様、色で一番よく判る。最初生れたての竜神は皆茶ツぽい色をして居る。そ

の次ぎは黒、その黒味が次第に薄れて消炭色になり、そして蒼味が加わつて来る。そ

なたも知る通り、多く見受ける竜神は大てい蒼黒い色をして居るであらうが……。

それが一段向上すると浅黄色になり、更に又向上すると、あらゆる色が薄ら

いで了つて、何ともいえぬ神々しい純白色になつて来る。白竜になるのに

は大へんな修行、大へんな年代を重ねねばならぬ……。』

問『夫婦になるのは大ていどの辺の色でございますか?』

答『色には抛らぬ。黒は黒同志で夫婦になり、そしていつまで経つても黒が脱けないの

も少くない……。』

問『男女の区別は主に何処で判りますか?』

答『角が一番の目標じや。角のあるのは男、角のないのは女……。』

問『夫婦の竜神は矢張り同棲するものでございますか？』

答『竜神にとりて、一緒に棲む、棲まぬは問題でない。竜神の生活は自由

自在、人間のように少しも場所などには縛られない。』

問『生れたばかりの子供は何うして居りまするか？』

答『しばらくは母親の手元に置かれるが、やがて修業場の方で引取るのじや。』

問『何ういう訳で池を修行場にしてあるのでございますか？』

答『池は一種の行場じや。人間界の御禊と同じく、水で浄められる意味にもなつて居

るのでナ……。』

四十七、竜神の受持

いかに訊ねても訊ねても、竜神の生活は何やら薄い幕を隔てたようで、シツクリ

とは腑に落ちない個所がございます。

相当長い間こちらの世界に住んで居る私達ですらそう感ずるのでございますから、現世の方々としては尚更のことで、容易に竜

神じんの存在そんざいが信じしんられない筈はずだとお察さつすることが出来ます。——と申もうして竜りゅうじん神じんさんの物もの語がたりを握にぎりつづせば、私わたくしとして虚欺うその通信つうしんを送おくることになり、それも氣きがとがめてなりませぬ。で、皆みなさまの信しんずる、信しんじないはしばらく別べつとして、もう少し私すこわたくしがその時とき監かん督とくのお爺じいさんからきかされたところを物語ものがたらせていただきます。——

問『竜りゅうじん神じんさんのお仕事しごとというのは大だい体たいどんなものでございますか?』

答『竜りゅうじん神じんの受持うけもちはなかなか大おおきく、広ひろく、そして複ふく雑ざつで、とてもそのすべてを語かた

りつくすことはできぬ。ごく大おおまかに言いったら、人にん間げんの世界せかいで天てん然ねん現げん象しょうと称となえて居いるものは、悉ことごとく竜りゅうじん神じんの受持うけもちであると思おもえばよいであらう。すべて竜りゅうじん神じんには

竜りゅうじん神じんとしての神しん聖せいな任つと務めがあり、それが直接ちよくせ人にん間げん界かいの利益たいてにならうが、なるま

いが、どうあつても遂すい行こうせねばならぬことになっている。風雨ふうう、寒暑かんしよ、五穀こくの豊ほう

凶よう、ありとあらゆる天変地異てんべんちい……それ等の根抵こんていには悉ことごとく竜りゅうじん神じん界かいの氣息いきがかつ

て居おるのじや……。』

問『産土神うぶすなのかみその他の御祭神みなりゆうじんさまは皆みな竜りゅうじん神じん様さまでございますか?』

答『奥おくの方かたは何いずれも竜りゅうじん神じんで固かためてある……。』

問『外国がいこくにも産土うぶすなはあるのでございますか?』

答『無論外国にもある。ただ外国には産土の社がないまでのことじや。産土の神

があつて、生死、疾病、諸種の災難等の守護に當つてくれればこそ、地上の人

間は初めてその日その日の生活が営めるのじや。』

問『各神社には竜神様の外にもいろいろ眷族があるのでございますか？』

答『むろん沢山の眷族がある。人霊、天狗、動物霊……必要に応じていろいろ

揃えてある……。』

問『産土神は皆男の神様でございますか？』

答『産土の主宰神は悉く男性に限るようじや。しかし幼児の保姆などにはよく女

性の人霊が使われるようで……。』

問『仏教の信者などは死後何うなるのでございますか？』

答『いかなる教を信じても産土の神の司配を受けることに変わりはないが、ただ仏の救い

を信じ切つて居るものは、その迷夢の覚めるまで、しばらく仏教の僧侶などに監

督を任せることもある。——イヤしかしそなたの質問は大分俺の領分外の事柄

に亘つて来た。産土のことなら、俺よりもそなたの指導役の方が詳しいであろう。

俺には成るべく竜神の修行場のことだけ訊いてもらいたいのじやが……。』

問『ツイいろいろの事をお訊ねして相済まぬことでございました。実は平生指導役の

お爺様からも、いろいろ承つて居るのでございますが、何やら腑に落ちかねるところもありますので、丁度良い折と考えて念を押して見たような次第で……』

答『それも悪いとは申さぬが、しかし一升の榼には一升の分量しか入らぬ道理で、あなたの器量が大きくならぬ限り、いかにあせつてもすべてが腑に落ちるといふ訳には参らぬ。今日はしばらくこの辺でとどめて置いては何うじやナ?』

問『又とないよい機会でございますから、最う一つ二つ訊ねさせていただき度うございませう。——あの弁財天と申上げるのは、あれは皆女性の竜神様でございま

すか?』

答『その通り……。神に祀られている以上、何れも皆立派に修行の積める女神ばかりで、土地の守護もなされば、又人間の願事も、それが正しいことであれば、歓

んで協えてくださる……。』

問『水天宮と申すのも矢張り……。』

答『あれは海上を守護される竜神……。』

問『最後にもう一つ伺わせて戴きます。あなた様はどんなお身分の御方で……。』

答 『俺か……俺は妻もなく、又子もなく永久に独身の老いたる竜神じゃ……。

竜神の中には斯う言つた変り者も時としてないではない。現にそなたの指導役の

老人なども矢張り俺のお仲間じゃ。——どりゃ一応修行場の見りをすると致そう。

今日はこれまで……。』

言いも終らずこの白衣の老人の姿はスーツと湖水の底に幻のように消えて行きまし

四十八、妖精の世界

竜神界、天狗界と、まるきり人間には見当のとれそうもない、別世界のお話を致した序でに、一つ思い切つてもつと見当のとれない或る世界の物語をさせていた

だきましよう。外でもない、それは妖精の世界のお話でございます。

『研究の為に汝に見せてやらねばならぬ不思議な世界がまだ残っている。』と、或る日指導役のお爺さんが私に申されました。『人間は草や木をただ草や木とのみ考えるから、矢鱈に花を撈つたり、枝を折つたり、甚だしく心なき真似をするのであるが、実

を言いうと、草くさにも木きにも皆精……つまり魂たましいがあるのじや。精せいがあればこそあんなにも生せいを
樂たのしみ、あんなにも美うつくしい姿態すがたを造りて、限りなく子孫しそんを伝つたえて行くのじや。今日きようは汝そちを
右の妖精達みぎようせいたちに引ひき合あわせてやるから、成るべく無邪氣な氣持きもちで、彼等かれらに逢あつてもらいた
い。妖精ようせいというものは姿も可愛らしく、心も稚く、少しくこちらで敵意ていきでも示しめすと、皆
怖こわがつて何所いずことも知れず姿を消してしう。人間界で妖精の姿を見る者が、大てい無邪
氣な小児に限るのもその故じや。今日の見物けんぶつは天狗界や竜神界の大がかりな探
検けんとはよほど勝手が異うぞ……』

斯こんな事ことを話はなしてくれながら、お爺さんじいは私を促して山の修行場を出掛けたと思うと、
そのまま一氣に途中を飛び越して、忽ち一望眼も遙かなる、広い広い野原に出て了いま
した。見ればそこら中が、きれいな草地で、そして恰好の良よいさまさまの樹草……松
梅うめ、竹たけ、その他があちこちに点綴して居るのでした。

『ここは妖精の見物には詠向きの場所じや。大ていの種類が揃つて居るであろ
う。よく氣をつけて見るがよい。』

そう注意されている中に、もう私の眼には蝶々のような羽翼をつけた、大さはや
つと二三寸から三四寸位の、可愛らしい小人の群がちらちら映つて來たのでした。

『まあ何なんという不思議ふしぎな世界せかいがあればあったものでございましょう!』と私わたくしはわれを忘れわすて、夢むちゆう中ちゆうになつて叫さけびました。『お爺じいさま、彼所あそこに見みゆる十五、六歳さくらい位の少女しょうじよは何なんと品位ひんの良い様子ようすをして居いることでございましょう。衣裳いしやうも白しろ、羽根はねも白しろ、そして白しろ紐ひもで額ひたいに鉢巻はちまきをして居おります……。あれは何なんの精せいでございしますか?』

『あれは梅うめの精せいじや。若木わかきの梅うめであるから、その精せいも矢張やはり少女しょうじよの姿すがたをして居いる……

。』

『木きの精せいでも矢張やはり年とし齡れいをとりまするか?』

『年とし齡れいをとるのは妖精ようせいも人間にんげんも同一どういつじや。老木ろうぼくの精せいは、形かたちは小さくとも、矢張やはり老人ろうじんの姿すがたをして居いる……。』

『そして矢張やはり男女だんじよの区別くべつがありますか?』

『無論むろん男女だんじよの区別くべつがあつて、夫婦生活ふうふせいかつを営いとなむのじや……。』

そう言いつて居いる中うちに、件くだんの梅うめの精せいは、しばらく私わたくし達たちの方ほうを珍めずらしそうに眺ながめて居いましたが、こちらに害意がいいがないと知しつて安心あんしんしたものか、やがてスーッと、丁度ちやうど蜻蛉とんぼのように、空そらを横切よこぎつて、私わたくしの足元あしもとに飛とび来きたり、その無邪気むじやきな、朗ほがらかな顔かおに笑えみを湛たえて、下したから私わたくしを見上みあげるのでした。

不図氣がついて見ると、その小人の躰中から発散する、何ともいえぬ高尚な香氣！ 私はいつしかうつとりとして了いました。

『もしもし梅の精さん、あなたは何とまあ良い香を立てていなさるのです……。』
 そう言いながら、私は成るべく先方を驚かさないように、徐かに徐かに腰を降して、この可愛い少女とさし向いになりました。

四十九、梅の精

梅の精は思いの外わるびれた様子もなく、私の顔をしげしげ凝視て佇って居ります。

『梅の精さん、あなた、お年齢はおいくつでございます？』

生前の癖で、私は真先きにそんな事を訊いて了いました。

『年齢？ わたしそんなものは存じませぬ……。』

梅の精は銀の鈴のようなきれいな声で、そう答えてキョトンとしました。

私は自分ながら拙なことを訊いたとすぐ後悔しましたが、しかしこれで妖精とすらすら談話のことができることが判つて、嬉しくてなりませんでした。私はつづいて、いろいろ話

しかけました。――

『ホンに、あなた方に年齢などはない筈でございました……。でもあなた方にも矢張り、

両親もあれば兄妹もあるのでしょうか？』

『私のお母アさまは、それはそれはやさしい、良いお母アさまでございます……。兄

妹は、あんまり沢山で数が分りませぬ……。』

『あなたはよく怖がらずに、私の所へ来てくれましたね。』

『でも嬢さまは私を可愛がつてくださいますもの……。』

『可愛がつてくれる人と、くれない人とが判りますか？』

『はつきり判ります。私達は気の荒らい、惨い人間が大嫌いでございます。そんな人間だと私達は決して姿を見せませぬ。だって、格別用事もないのに、折角

わたくしたち私達が咲かした花を枝ごと折つたり、何かするのですもの……。』

そう言つて、梅の精はそのきれいな眉に八の字を寄せましたが、私にはそれが却つて可

愛らしくてなりませんでした。

『でも、人間は、この枝振りが気に入らないなどと言つて、時々鋏でチヨンチヨン枝

を摘むことがあるでしょう。そんな時にあなた方は矢張り腹が立ちますか？』

『別に腹が立ちもしませぬ……。枝振りを直す為めに伐るのと、悪戯で伐るのとは、氣持がすっかり異なります。私達にはその氣持がよく判るのです……。』

『では花瓶に活ける為めに枝を伐られても、あなた方はそう氣まずくは思わないでしょう？』

『それは思いませんぬ……。私達を心から可愛がつてくださる人間に枝の一本や二本歡んでさしあげます……。』

『果実を採られる氣持も同じですか？』

『私達が丹精して作ったものが、少しでも人間のお役に立つと思えば、却つてうれしうございます……。』

『木によつては、根元から伐り倒される場合もありますが、その時あなた方は何うなさる？』

『そりやよい氣持は致しませぬ。しかし伐られるものを、私達の力で何うすることもできません。すぐあきらめて、木が倒れる瞬間にそこを立ちのいています……。』

『あなた方の中にも、人間が好きなものと嫌いなもの、又性質のさびしいものと陽気なもの、いろいろ相違があるでしょうね？』

『それは様々でございます。中には随分ひねくれた、氣むつかしい性質のものがあ
り、どうかすると人間を目の仇に致します……。』

何と申しまして、人間と妖精とでは、距離が大分かけ離れていて、談話がしつ
りと腑に落ちないところもございますが、それでも、こうしている中に、幾分か先方の
心持が呑み込めたように思われてまいりました。それから私はよきほどに梅の精との
対話を切り上げ、他の妖精達の查べにかかりましたが、人間から観れば何れも大同
小異の妖しい小人というのみで、一々細かいことは判りかねました。標本として私はそ
れ等の中で少し毛色の異つたものの人相書を申上げて置くことにいたしました。
梅の精の次ぎに私が目をとめたのは、松の精で、男松は男の姿、女松は女の姿、どちら
も中年者でございました。梅の精よりも遥かに威厳があり、何所やらどつしりと、
きかぬ氣性を具えているようでございました。しかし、その大さは矢張り五寸許、蒼味
がかつた茶っぽい唐服を着て、そしてきれいな羽根を生やして居るのでした。
松や梅の精に比べると竹の精はずつと瘦ぎすで、何やら少し貧相らしく見えました
が、しかし性質はこれが一番穏和しいようでございました。で、若し松竹梅と三つ並べ
て見たら、強いのと弱いとの両極端が松と竹とで、梅はその中間に位して居

るようでございます。

それから堇、蒲公英、桔梗、女郎花、菊……一年生の草花の精は、何れも皆小供の姿をしたものばかり、形態は小柄で、眼のさめるような色模様の衣裳をつけて居りました。それ等が大きな群を作つて、大空狭しと乱れ飛ぶところは、とても地上では見られぬ光景でございます。中でどれが一番きれいかと仰つしやるか……さあ草花の精の中では矢張り菊の精が一番品位がよく、一番巾をきかしているようございました……。

五十、銀杏の精

ひと通り野原の妖精見物を済ませますと、指導役のお爺さんは、私に向つて言われました。――

『この辺に見掛ける妖精達は概して皆年齢の若いものばかり、性質も無邪気で、一向多愛もないが、同じ妖精でも、五百年、千年と功勞経たものになると、なかなか思慮分別もあり、うっかりするとへたな人間は敵わぬことになる。例えばあの鎌倉八幡宮の社頭の大銀杏の精――あれなどはよほど老成なものじゃ……。』

『お爺さま、あの太銀杏ならば私も生前によく存じて居ります。何うぞこれからあそこへお連れ下さいませ……。一度その太銀杏の精と申すのに逢つて置き度うございます。』

『承知致した。すぐ出掛けると致そう……。』

どこを何う通過したか、途中は少しも判りませぬが、私達は忽ちあの懐かしい鎌倉八幡宮の社前に着きました。中の広い石段、丹塗の楼門、群がる鳩の群、それからあの大きな瘤だらけの銀杏の老木……チラとこちらから覗いた光景は、昔とさしたる相違もないように見受けられました。

私達は一応参拝を済ませてから、直ちに目的の銀杏の樹に近寄りますと、早くもそれと気づいたか、白茶色の衣裳をつけた一人の妖精が木陰から歩み出で、私達に近づきました。身の丈は七八寸、肩には例の透明な羽根をはやして居りましたが、しかしよくよく見れば顔は七十余りの老人の顔で、そして手に一条の杖をついて居りました。私は一と目見て、これが銀杏の精だと感じました。

『今日はわざわざこれなる女性を連れて来しました。』と指導役のお爺さんは老妖精に挨拶しました。『御手数でも、何かと教えてあげて下さい……。』

『ようこそ御出でくだされた。』と老妖精は笑顔で私を迎えてくれました。『そなたは気づかなかつたであろうが、実はそなたがまだ可愛らしい少女姿でこの八幡宮へ御詣りなされた当時から、俺はようそなたを存じて居る……。人間の世界と申すものは瞬く間に移り変われど、俺などは幾年経つても元のままだ……。』

枯れた、落附いた調子でそう言つて、老いたる妖精はつくづくと私の顔を打ちまもるのでございました。私も何やら昔馴染の老人にでもめぐり逢つたような気がして、懐かしさが胸にこみ上げて来るのでした。

老妖精は一層しんみりとした調子で、談話をつづけました。

『実を申すと俺はこの八幡宮よりももつと古く、元はここからさして遠くもない、とある山中に住んで居たのじや。然るにある年八幡宮がこの鶴岡に勧請されるにつけ、その神木として、俺が数ある銀杏の中から選び出され、ここに移植えられることになったのじや。それから数えてももうずいぶんの星霜が積つたであろう。一たん神木となつてからは、勿体なくもこの通り幹の周囲に注連縄が張りまわされ、誰一人手さえ触れようとせぬ。中には八幡宮を拜むと同時に俺に向つて手を合わせて拜むものさえもある……。これと申すも皆神様の御加護、お蔭で他所の銀杏とは異なり、

何^{なん}年^{ねん}経^たてど枝^{えだ}も枯^かれず、幹^{みき}も朽^くちず、日^に本^{ほん}国^{こく}中^{じゅう}で無^む類^{るい}の神^{しん}木^{ぼく}として、今^{いま}もこの通^{とお}り栄^{さか}えて居^いるような次^{しだい}第^{だい}じや。』

『長^{なが}い歳^{とし}月^{つき}の間^{あいだ}には随^{ずい}分^{ぶん}いろいろの事^{こと}を御^ご覧^{らん}になられたでございましょう……。』

『それは覽^みました……。そなたも知^しらるる通^{とお}り、この鎌^{かま}倉^{くら}と申^{もう}すところは、幾^{いく}度^どとなく激^{はげ}しい合^か戦^{せん}の巷^{ちまた}となり、時^{とき}にはこの銀^い杏^{ちよう}の下^{した}で、御^ご神^{しん}前^{ぜん}をも憚^{はば}かぬ一^{ひと}人^りの無^む法^{ほう}者^{もの}が、時^{とき}の将^{しょう}軍^{ぐん}に對^{たい}して刃^に傷^{じやう}沙^さ汰^たに及^{およ}んだ事^{こと}もある……。そうした場合^{ばあい}、人^{にん}間^{げん}といふものはさてさて惨^{むご}いことをするものじやと、俺^{わし}はどんなに歎^{なげ}いたことであらう……。』

『でもよくこの銀^い杏^{ちよう}の樹^きに暴^{ぼう}行^{こう}を加^くえるものがなかつたものでございます……。』

『それは神^{しん}木^{ぼく}である御^お蔭^{かげ}じや。俺^{わし}の外^{ほか}にこの銀^い杏^{ちよう}には神^か様^{さま}の御^ご眷^{けん}族^{ぞく}が多^お数^{ぜい}附^いて居^おられる。若^もしいささかでもこれに暴^{ぼう}行^{こう}を加^くえようものなら、立^{たち}所^{どころ}に神^{しん}罰^{ばつ}が降^{くだ}るであらう。ここぞ非^ひ命^{めい}に斃^たれた、かの実^さ朝^ね公^{こう}なども、今^{いま}はこの樹^きに憑^かつて、守^{しゅ}護^ごに當^{あた}つて居^おられる……。イヤ丁^{ちよう}度^ど良^りい機^き会^{かい}じや。そなたも一^お心^うそれ等^らの方^{かた}々^{がた}にお目^めにかか

るがよいであらう。何^いれも爰^{こゝ}にお揃^{そろ}いになつて居^おられる……。』

そう言^いわれて驚^{おどろ}いて振^ふり返^{かえ}つて見^みると、甲^か冑^{ちゆう}を附^つけた武^ぶ将^{しょう}達^{たち}だの、高^{こう}級^{きゆう}の天^て狗^{んぐ}様^{さま}だのが、数^{すう}人^{にん}樹^きの下^{した}に佇^{たたず}みて、笑^{えが}顔^おで私^{わたくし}達^{たち}の様^{よう}子^すを見^み守^{まも}つて居^おられましたが、

中なかでも強つよく私の眼めを惹ひいたのは、世よにも氣け高だかい、若わか々わかしい実朝公さねともこうのお姿すがたでした……。

さなきだに不思議ふしぎな妖精界ようせいかいの探検たんけんに、こんな意外いがいの景物けいぶつまでも添そえられ、心こころから驚おどろき入いることのみ多おほかつた故せいか、その日ひの私わたしはいつに無く疲勞つかれを覺おぼえ、夢見心地ゆめみごちでやつと修行場しゆぎやうばへ引ひき上あげたことでした。

五十一、第三の修行場

わたくしやま
私の山やまの修しゆぎやう行ぎやうは随分長ずいぶんくつづきましたが、やがて又またこの修行場しゆぎやうばにも別わかれを告つぐべき時じ節せつがまいりました。

『汝そちの修しゆぎやう行ぎやうもここで一段落だんらくついたようじゃ。これから別べつの修行場しゆぎやうばへ連つれてまいる……。』

或ある日ひ指導役しどうやくのお爺さんからそう言いい渡わたされましたが、実じつをいうと私わたしの方ほうでも近頃ちかごろはそろそろ山やまに倦あきが来きて、どこぞ別べつのところへ移うつつて見みたいような氣分きぶんがして居いたのでございました。私わたしは二つ返事へんじでお爺さんじいの言葉ことばに従したがいました。

引越しは例によつて至極お手軽でございました。私が自身で持参したのはただ母の形見の守刀だけで、いざ出発と決つた瞬間に、今まで住んで居た小屋も、器具類もすうつと消え失せ、その跡には早くも青々とした蘇苔が隙間なく蒸して居るのでした。何があつけないと申して、斯んなあつけない仕事はめつたにあるものでなく、相当幽界の生活に慣れた私でさえ、いささか物足りなさを感じない訳にもまいりませんでした。

が、お爺さんの方では、何処に風が吹くと言つた面持で、振り向きもせず、ずんずん先きへ立つて歩るき出されたので、私も黙つてその後を跟いてまいりますと、いつしか道が下り坂になり、くねくねした九十九折をあちらへ繞り、こちらへつてゐる中に、何所ともなくすぎまじい水音が響いてまいりました。

『お爺さま、あれは瀑布の音でございますか？』

『そうじや。今度の修行場はあの瀑布のすぐ傍にあるのじや。』

『まあ瀑布の修行場……。どんなに結構なところでございましょう。私も、何所か水のある所で修行したいような気分になつて居りました。』

『それだから今度の瀑布の修行場となつたのじや。汝も知る通り、こちらの世界の掟に

はめつたに無理なところはない……。』

そう話合っている中に、いつしか私達は飛沫を立てて流る、二間ばかりの溪流のほとりに立っていました。右も左も削ったような高い崖、そこら中には見上げるような常盤木が茂つて居り、いかにもしつとりと気分の落ちついた場所でした。

不図気がついて見ると、下方を流るる溪流の上手は十間余りの懸崖になつて居り、そこに巾さが二三間ぐらいの大きな瀑布が、ゴーツとばかりすさまじい音を立てて、木の葉がくれに白布を懸けて居りました。

私はどこに一点の申分なき、四辺の清浄な景色に見惚れて、覚えず感歎の声を放ちましたが、しかしとりわけ私を驚かせたのは、瀑布から四五間ほど隔てた、とある平坦な崖地の上に、私が先刻まで住んでいた、あの白木造りの小屋がいつの間にか移されて居たことでした。

『まあ斯んなところに……。』

私は呆れてそう叫びましたが、しかしお爺さんは例によつてそんな事は当然だと言つた風情で、ニコリともせず斯う言われるのでした。――

『これから汝はここで見つしり修行するのじゃ。俺はこれで帰る……。』

言うが早い^{はや}か、お爺^{じい}さんの白衣^{びやくい}の姿^{すがた}はぷいと烟^{けむり}のように消^きえて、私^{わたくし}はただひとりポツネンと、この閑寂^{かんじやく}な景色^{けしき}の中^{なか}に取り残^{のこ}されました。

五十二、瀑布の白竜

たった一人^{ひとり}で、そんな山奥^{やまおく}の瀑壺^{たきつぼ}の辺^{へり}に暮^{くら}すことになって、さびしくはなかったかと仰^おつしやるか……。ちつともさびしいだの、気味^{きみ}がわるいだのといふことはございませぬ。そんな氣持^{きもち}に襲^{おそ}われるのは死^しんでから間のない、何も判^ならぬ時分^{じぶん}のこと、少しこちらで修行^{しゆぎよう}がつんでまいりますと、自分の身辺^{じぶんしんぺん}はいつも神様^{かみさま}の有難^{ありがた}い御力^{おちから}に衛^{まも}られているような感じ^{かんじ}がして、何所^{どこ}に行つても安心^{あんしん}して居^おられるのでございます。しかも今度^{こんど}の私の修行場^{しゆぎようば}は、山^{やま}の修行場^{しゆぎようば}よりも一段格^{だんかく}の高い淨地^{じようち}で、そこには大^{たい}そうお立派^{りっぱ}な一体^{たいい}の竜神様^{りゆうじんさま}が鎮^{しず}まつて居^おられたのでした。

ある時私^{ときわたし}が一^{いっ}心に統^{とう}一の修行^{しゆぎよう}をして居^おりますと、誰^{だれ}か背後^{うしろ}の方^{ほう}で私^{わたし}の名^なを呼^よぶものがあるのです。『指導役^{しどうやく}のお爺^{じい}さんかしら……。』そう思^{おも}つて不図^{ふと}振^ふりかえて見^みると、そこには六十前後^{ぜんご}と見^みゆる、すぐれて品位^{ひん}のよい、凛々^{りんりん}しいお顔^{かお}の、白衣^{びやくい}の老人^{ろうじん}

が黒つぽい靴くつを穿はいて佇たたずんでいました。私は一と目見て、これはきつと貴い神さまだとさとり、丁寧ていねいに御挨拶ごあいさつを致いたしました。それがつまりこの瀑布たきの白竜はくりゆうさまなのでございしました。

『俺わしは古ふるくからこの瀑布たきを預あずかっている老人としよりの竜神りゅうじんじやが、此度縁このたびえんあつて汝そなたを手元てもとに預あずかることになつて甚だ歓はなばしい。一度汝そなたに逢あつて置おかうと思おもつて、今日きょうはわざわざ老と人しよりの姿すがたに化ばけて出現でてまいつた。人間にんげんと談話はなしをするのに竜体りゅうたいではちと対照うつりが悪いのでな……。』

そう言いつて私の顔わたくしかおを見て微笑ほほえまれました。私はこんな立派りつぱな神様かみさまが時々姿ときどきすがたを現あらわして親切しんせつに教おしえてくださるかと思うと、忝かたじけないやら、心強こころつよいやら、自ずと涙なみだがにじみ出でまし
た。――

『これからは何卒なにとぞよしなに御指導ごしどうくださいますよう……。』

『俺わしの力量ちからに及およぶことなら何なんなりと申もうしで出るがよい。すでに竜宮界りゅうぐうかいからも、そなたの為ためによく取計とりはからえとのお指図さしずじや。遠慮えんりよなく訊ききたいことを訊きいてもらいたい。』

親身しんみになつていろいろとやさしく言いわれますので、私わたくしの方ほうでもすつかり安心あんしんして、勿も体たいないとは思おもいつつも、いつしか懇意こんいな叔父おじさまとでも対座たいざしているような、打解うちとけた

気分きぶんになつて了しまいました。

『あの太たいそう無ぶ駄だなことを伺うかがいますが、あなた様さまはよほど永ながくここにお住居すまいでござい
すか。』

『さア人間界にんげんかいの年数ねんすうに直なおしたら何年位なんねんぐらいになろうかな……。』と老竜神ろうりゆうじんはにこにこ
し乍なら『少すくく見積みつもつても三万位まんねんぐらいにはなるであらうかな。』

『三万位まんねん！』と私はびつくりして、『その間あいだには随分ずいぶんいろいろの變かわつた事件じけんが起おこつた
でございましょう……。』

『もともとこちらの世界せかいのことであるから、さまで變かわつた事件ことも起おこらぬ。最初さいしよここへ参まい
つた時ときに蒼黒あおくろかつた俺わしの軀からだがいつの間まにか白く變かわつた位くらいのものじゃ。その中俺うちわしの真実ほんとう
の姿すがたを汝そなたに見みせて上げるとしよう……。』

『それは何時いつでございましょうか。只今ただいますぐに拝おがまして戴いたきとう存ぞんじまするが……。』
『イヤすぐという訳わけにはまいらぬ。汝そなたの修しゆぎ行ようがもう少し積すこんで、これならばと思おもわれ
る時ときに見みせるとしよう。』

その時ときはそんな対話はなしをした丈だけでお分わかれしましたが、私わたくしとしては一時ときも早はやくこの瀑布たきの竜り
神様ゆうじんさまの本体ほんたいを拝おがみたいばかりに、それからというものは、一心しん不亂ふらんに精神統せいしんとう一

の修行をつづけました。又場所が場所丈に、近頃の統一状態は以前よりもずっと深く、ずつと混りなくなつたように自分にも感じられました。

それからどれ位経つた時でございましょうか、ある日俄かに私の眼の前に、一道の光明がさながら洪水のように、どつと押し寄せてまいりました。一たんは、はつと愕きました、それが何かのお通報であろうと気がついて心を落ちつけますと、つづいて瀑布の方向に當つて、耳がつぶれるばかりの異様の物音がひびきます。

私は直ちに統一を止めて、急いで滝壺の上に走り出て見ますと、果してそこには一体の白竜……爛々と輝く両眼、すつくと突き出された二本の大きな角、銀をあ

ざむく鱗、鋒を植えたような沢山の牙……胴の周囲は二尺位、身長は三間余り……そう言つた大きな、神々しいお姿が、どつと落ち来る飛沫を全身に浴びつつ、いかにも悠悠々たる態度で、巖角を伝わつて、上へ上へと攀じ登つて行かれる……。

眼のあたり、斯うした莊嚴無比の光景に接した私は、感極りて言葉も出でず、覺えず両手を合わせて、その場に立ち尽したことでございました。

わたくしまえ私に前にも幾度か竜体を目撃して居りますが、この時ほど間近く見、この時ほど立派なお姿を拝んだことはございませぬ。その時の光景はとても私の拙い言葉で尽すこ

とはできません。何卒然るべくお察しをお願いします……。

五十三、雨の竜神

瀑布の修行場では、私が實際瀑布にかかったかと仰つしやるか……。かかりは致しませぬ。私はただ瀑布の音に溶け込むようにして、心を鎮めて坐つて居たまでで、そうすると何ともいえぬ無我の境に誘れて行き、雑念などは少しもきざしませぬ。肉体のある者には水に打たれるのも或は結構でございましょうが、私どもにはあまりその効能がないように……。又指導役のお爺さんも『瀑布にはかからんでも、その気分になればそれでよい……。』との言葉でございました。

或の日は統一の修行に疲れて、瀑布の所へ出てぼんやり水を眺めて居りますと、ここの竜神様が、又もや例の白衣姿で、白木の長い杖をつきながら、ひよつくり私の傍へお現われになりました。

『丁度よい機会であるから、汝を上の方へ連れて行って、一つ大へんに面白いものを見せて上げようと思うが……。』

『面白おもしろいものと言いつてそれは何なんでございますか?』

『自分じぶんについて来くれば判わかる。汝そなたは折角せつかく修しゆぎよう行ぎやうの爲ためにここへ寄越よこされているのであるから、この際さいでできる丈だけなにか何彼けんぶんを見聞けんぶんして置くがよいであらう……。』

もとより拒こばむべき筋すじ合あい合あひのものとございませぬから、私わたくしは早速さつそく身支度みじたくしてこの親切しんせつな、老おいたる竜りゆうじん神しんさんの後あとについて出掛でかけることになりました。

瀑布たきみぎての右手みぎでにくねくねと附ついている狭せまい山道やまみち、私わたくし達たちはそれをば上うへ上うへへと登のぼって行ゆきました。見みるとその辺あたりは老木ろうぼくがぎつしり茂しげっている、ごくごく淋さびしい深山しんさんで、そして不思議ふしぎに山彦こたまのよく響ひびく処ところでございました。漸ようやく山林地帯さんりんちたいを出抜でぬけると、そこは最もう山の頂辺てつぺんで、芝草しばくさが一面めんに生はえて居おり、相当そうとうに見晴みはらしのきくところでございまし

た。
『実じつは今日きようここで汝そなたに雨降あめふりの実じつ況きやうを見みせるつもりなのじゃ。と申もうして別べつに俺わしが直接じかにやるのではない。雨あめには雨あめの受持かかりがある……。』

そう言いつて瀑布たきのお爺じいさんは、眼めを閉とじてちよつと黙もく禱とうをなさいましたが、間まもなくゴーツという音おとがして、それがあちこちの山々やまやまにこだまして、ややしばらく音おとが止やみま

せんでした。

と見ると、向うに一人の若い男子の姿が現われました。年の頃は三十許、身には丸味がかった袖の浅黄の衣服を着け、そして膝の辺でくつた、矢張り浅黄色の袴を穿き、足は草履に足袋と言った、甚だ身軽な扮装でした。頭髮は茶筌に結っていました。

『これは雨の竜神さんが化けて来たのに相違ない……。』一と目見た時に私はすぐそう感づきました。不思議なもので、いつ覺えたともなく、その頃の私にはそれ位の見わけがつくのでした。

お爺さんは言葉少なに私をこの若者に引き合わせた上で、

『今日は御苦労であるが、俺のところの修行者に一つ雨を降らせる実況を見せて貰いたいのじゃが……。』

『承知致しました。』

若者は快く引き受け、直ちにその準備にかかりました。尤も準備と言っても別にそううるさい手続のあるものでも何でもございませぬ。ただ上の神界に真心こめて祈願するだけで、その祈願が叶えば神界から雨を賜わたることのようでございます。つまり自然の事は幾段にも奥があり、いかに係りの竜神さんでも、御自分の力のみで勝手に雨を降らしたり、風を起したりはできないようでございます。

それはさて置き、年の若い雨の竜神さんは、瀑布の竜神さんと一緒になつて、口の中で何か唱えごとをしながら、ややしばらく祈願をこめていましたが、それが終ると同時に、ぷいとその姿を消しました。

『あれは今竜体に戻つたのじや。』とお爺さんが説明してくれました。『竜体に戻らぬと仕事が出来ぬので……。その中直に始まるであろうから、しばらくここで待つがよい。』

そんなことを言っている中にも、何やら通信があるらしく、お爺さんはしきりに首肯うなづいて居られます。

『何か差支でも起きたのでございますか？』

『いやそうではない。実は神界から、雨を降らせるに就いては、同時に雷の方も見せてやれとのお達しが参つたのじや。それで今その手筈てはずをしているところで……。』

『まあ雷でございますか……。是非それも見せて戴き度うございます……。』

五十四、雷雨問答

それから間もなく、私は随分と激しい雷雨の实况を見せて戴いたのでございますが、外観からいえばそれは現世で目撃した雷雨の光景とさしたる相違もないのです。先ず遙か向うの深山でゴロゴロという音がして、同時に眼も眩むばかりの稲妻が光る。その中、空が真暗くなって、あたりの山々が篠突くような雷雨の為に白く包まれる……ただそれきりのことに過ぎませぬ。

が、内容からいえば、それは現世ではとても思いもよらぬような、不思議な、そして物凄しい光景なのでございました。

『雨雲の中をよく見るがよい。眼を離してはならぬ。』

お爺さんからそう注意されるまでもなく、私はもう先刻から一心不乱に深い統一に入つて、黒雲の中を睨みつけて居たのですが、たちまち一体の竜神の雄姿がそこに鮮かに見出されました。私は思わず叫びました。――

『あれあれ薄い鼠色の男の竜神さんが、大きな口を開けて、二本の角を振り立て、雲の中をひどい勢で駆けて行かれる……。』

『それが先刻爰に見えた、あの若者なのじゃ。』

『あれ、向うの峰を掠めて、白い、大きな竜神さんが、眼にもとまらぬ迅さで横に飛

んで行かれる……あの凄^{すこ}い眼^めの色^{いろ}……。』

『それが雷^{かみなり}の竜^{りゅうじん}神^{しん}の一人^{ひとり}じや。力量^{ちから}はこの方^{かた}が一段^{だん}も二段^{だん}も上^{うえ}じや……。』

『あれ、雨^{あめ}の竜^{りゅうじん}神^{しん}さんが、こちらを向^むいて、何^{なに}やら相図^{あいず}をして向^むうの方^{ほう}に飛^とんで行^ゆかれます……。』

『それは、そろそろ雨^{あめ}を切^きりあ^あげる相図^{あいず}をしているのじや。もう間^まもなく雨^{あめ}も雷^{かみなり}も止^とむであ^{らう}……。』

果^はして間^まもなく雷^{らい}雨^うは、拭^{ぬぐ}うが如^{ごと}く止^やみ、山^{やま}の上^{うへ}は晴^はれた、穏^{おだや}かな最^{さい}初^{しよ}の景^け色^{しき}に戻^{もど}りました。私^{わたくし}は夢^{ゆめ}から覚^さめたような気^き分^{ぶん}で、しばらくは言^く葉^ちもきけませんでした。

ややありて私^{わたくし}は瀑^{たき}布^ふの竜^{りゅうじん}神^{しん}さんに向^むかい、今日^{きょう}見^みせられた事^{こと}柄^{がら}に就^ついていろいろお訊^{たず}ねしましたが、いかに訊^{たず}ねても訊^{たず}ねても矢^や張^はり私^{わたくし}の器^きだけのことしか判^{わか}る筈^{はず}もなく、従^{したが}ってあまり御^ご参^{さん}考^{こう}にもならぬかと存^{ぞん}じますが、兎^とも角^{かく}その時^{とき}の問^{もん}答^{どう}の一部^ぶをお伝^{つた}えして置^おきます。――

問^{あめ}『雨^ふを降^ふらすのと、雷^{かみなり}を起^{おこ}すのとでは、いつもその受^う持^{けもち}が異^{ちが}うのでございしますか?』

答^{むろん}『それは無^む論^{ろん}そうじや。俺^{わしたち}達^{だち}の世界^{せかい}にもそれぞれ受^う持^{けもち}がある……。』

問^{あめ}『どのような手^て続^{つづ}きで、あんな雨^{あめ}や雷^{かみなり}が起^{おこ}るのでございしますか?』

答『さあそれは甚だ六ヶ《むずか》しい……。ひと口に言つて了へば念力じやが、むろんただそう言つたのみでは足らぬ。天地の間にはそこに動かすことのできぬ自然の法則があり、竜神でも、人間でも、その法則に背いては何事もできぬ。念力は無論大切で、念力なしには小雨一つ降らせることもできぬが、しかしその念力は、何は措いても自然の法則に協うことが肝要じや。先刻雨を降らせるにつきても、俺達が第一に神界のお許しを受けたのはそこじや。大きな仕事になればなるほど、ますます奥が深くなる。俺達は言わば神と人との中間の一つの活きた道具じや……。』
 問『先刻の雨と雷とは、何れもお一人づつで行られたお仕事でございましたか？』
 答『雨の方はただ一人の竜神の仕事じやつた。汝一人の為に降らせたまでの俄雨であるから、従つてその仕掛もごく小さい……。が、雷の方はあれで二人がかりじや。こればかりは、いかなる場合にも二人は要る。一方は火竜、他方は水竜——つまり陽と陰との別な働きが加わるから、そこに初めてあの雷鳴だの、稲妻だのが起るので、雨に比べると、この仕事の方が遥かに手数がかかるのじや……。』

五十五、母の訪れ

わたくしたき
私が滝の修行場へ滞在した期間はさして長くもなかった上に、あそこは言わば精神統一の特別の行場でございましたので、これはと言つて特に申上げるほどの面白出来事もございませぬ。私はあの滝の音をききながら、いつもその音の中に溶けこむような気分で、自分の存在も忘れて、うっとりとしていることが多いのでございまして。お蔭様でそうした修行の結果、私の統一は以前にましてずっと深まり、物を視るにも、あれから大へんに楽になつたように、自分にも感じられてまいりました。こちらの世界へ来てもすべては修行次第で、呑気に遊んでいたのでは、決して力量がつくものではないようでございます。実をいうと私などは、可なり執着も強く、しかも自分では成るべく呑気に構えていたい方なのですが、魂の因縁と申しましょうか、上の神様からのお指図で、いつも一つの修行から次ぎの修行へと追いつて立てられてまいりましたために、やっと人並になれたのでございます。考えて見ると随分お恥かしい次第で……。

それはそうと滝の修行中にも、一つ二つの思い出の種子がない訳でもございませぬ。その一つは私の母がわざわざ訪ねて来てくれたことで、それが帰幽後に於ける母子の

最初の対面でございました。

この対面につきては前以て指導役のお爺さんからちよつと前触がありました。『汝の母人も近頃は漸く修行が積んで、外出も自由にできるようになったので、是非一度汝に逢わそうかと思つてゐる。何れ近い内にこちらに見えるであらう……。』——私はそれをきいた時は嬉しきで胸が一ぱいでございました。そして母に逢つたらこれも語ろう、あれも訊きたいと、生前死後にかけての積り積れるさまさまの事件が、丁度嵐のように私の頭脳の中に、一度に押し寄せて來たのでした。

それにつけても私の眼に特に力強く浮び出でたのは、前にも申上げた、母の臨終の光景でした。あの見る影もなく、老いさらばえる面影、あの断末魔のはげしい苦悶、あの肉体と幽体とをつなぐ無気味な二本の白い紐、それからあの臨終の床の辺をとりまいた現幽両界の多くの人達の集り……。私はその當時を憶い出して、覚え涙に暮れつつも、近く訪れるこちらの世界の母がどんな様子をしていられるかを、あれか、これかと際限もなく想像するのでした。

すると、それから間もなく、森閑と鎮まり返つた私の修行場の庭に、何やら人の訪れる気配がしましたので、不図振り向いて見ると、それは一人の指導役の老人に導か

れた、私のなつかしい母親なのでした。

『お母さま!!』

『姫!!』

双方から馳せ寄った二人は互に縋りついて了いました。

現在の母の様子は、臨終の時の様子とはびっくりするほど変つて了い、顔もすっかり朗かになり、年齢もたしかに十歳ばかり若返つて居りました。母の方でも私が諸磯の佗住居にくすぼり返つていた時に比べて、あまりに若々しく、あまりに元氣らしいのを見て、自分の事のように心から飲んでくれました。

『これほどあなたが立派な修行を積んでいるとは思わなかった。あなたの体からは丁度神さまのように光明が射します……。』

そんなことを言いながら、右から左からしげしげと私の姿を見まもるのでした。これも生みの母なればこそ、と思えば、自ずと先立つものは泪でございました。

不図氣がついて見ると、庭先まで案内の労を執つてくだすった母の指導役のお爺さんは、いつの間にやら姿を消して、すべてを私達母子の為すところに任せられたのでした。

五十六、つきせぬ物語り

逢った上は心行くまましんみりと語り合おうと待ち構えていたのですが、さていよいよ斯うして母と膝を突き合わせて見ると、ひたぶるに胸が迫るばかりで、思つて居ることの十が一も言葉に出でず、ともすれば泣きたくなつて仕方がないのでした。

『こんなことでは余りにみつともない。今日は面白く語り合ねばならぬ……。』
 私は一生懸命、成るべく涙を見せぬように努めました。それは母の方でも同様で、そつと涙を拭いては笑顔でかれこれと談話をつづけるのでした。

『あなたはこちらでどんな境地を通じて来たのですか？』母は真先にそう訊ねました。

『最初からここではないようにきいて居りますが……。』

『私はこちらで修行場が三度ほどかわりました。最初は岩屋の修行場、そこはなかなか永うございました。その次ぎが山の修行場、その時代に竜宮界その他いろいろの珍らしい所へ連れて行かれ、又良人をはじめ多くの人達にも逢わせていただきました。現在この滝の修行場へ移つてからはまだ幾らにもなりませぬ……。』

『あなたはまあ何という結構な事ばかりして来られたことでしよう!!』と母は心から感心しました。『この母などは岩屋の修行だの、山の修行だのと、そんな変ったことはただの一つもして来はしません。まして竜宮界などと言つては夢にだつて見たこともない……。あなたはたしかに特別の御用を有つて生れた人に相違ない……。私の指導役の神さまもそんなことを言つて居られました……。』

『まさかそれでもございますまいが……。』

『イヤたしかにそうです。いつか時節が来たら、あなたにはきつと何ぞ大事なお仕事が授けられますよ。何うぞそのつもりで、今後もしっかり修行に精を出してください。母などは、他の多くの人達と同じく、こちらに参つてから、産土神様のお手元で、ある一室を宛てがわれ、そこで静かに修行を行つづけているだけなのです……。』

『父上とは御一緒ではございせんか。』

『一緒ではありませぬ。現世に居た時分は、夫婦は同じ場所に行かれるものかと考えて居りましたが、こちらへ来て見ると同棲などは思いも寄りませぬ。魂の関係とやらで、良人は良人、妻は妻と、チャーンと区別がついているのです。もつとも私達の境涯でも逢おうと思えばいつでも逢われ、対話をしようと思えばいつでも対話はできます

が……。斯んなことをいうとあなたから笑われるか知れませぬが、私は一度指導役の神様に向い、あまり心細いから、せめて良人とだけは一緒に住まわせて戴きたいと、お願いしたことがあるのです。それでも神様は何うあつても私の願いをおきき入れになつてくだらないので、その時の私の力落しと云つたらなかつたものです。私は今でも時々はいつの時代になつたら、夫婦、親子、兄弟が昔のように楽しく同居することができのかしらと思われてなりませぬ。あなたにはそんなことがないのですか？』

『ないでもございませぬが、近頃統一が深くなつた為めか、だんだんそうした考えが薄らいでまいりました。相当に修行が積んだら、一緒に棲むとか、棲まないとか申すことは、さして苦勞にならないようになって了うのではないでしょう。竜宮界の上の神様達の御様子を見ても、いつも夫婦親子が同棲して居られることはないのでございます。それぞれ御用が異うので、平生は別々になつてお働きになり、偶にしか御一緒になつて、お寛ぎ遊ばすことがないと申します……。』

『神様でも矢張りそうなのでございますかね……。そうして見るとこの母などはまだ現世の執着が多分に残っている訳で、これからはあなたにあやかり、余り愚痴は申さぬことに気をつけましょう。今日は本当によいことを伺いました。あなたがそんなにまで修

行^{よう}が出来^{でき}たのを見ると、私^{わたし}は心^{こころ}からうれしい……。』
そう言^いいながらも母^{はは}の眼^めには、涙^{なみだ}が一つぱい溜^{たま}って居^いるのでした。

五十七、有難い親心

それから訊^{たず}ねらるるままに、私^{わたし}は母^{はは}に向^{むか}つて、帰^き幽^{ゆう}後^ごこちらの世界^{せかい}で見^{けん}聞^{ぶん}したくさぐさの物^{もの}語^{がたり}を致^{いた}しましたが、いつも一室^{しつ}に閉^とじこもつて、単^{たん}調^{ちよう}なその日^ひその日^ひを送^{おく}つて居^おる母^{はは}にとりては、一々びつくりすることのみ多^{おほ}いらしいのでした。最後^{さいご}に私^{わたし}が、最^{さい}近^{さい}滝^{たき}の竜^{りゆうじん} 神^{かみ}さんの本体^{ほんたい}を拝^{おが}ましていただいた話^{はなし}を致^{いた}しますと、母^{はは}の愕^{おどろ}きは頂^{てう}点^{てん}に達^{たつ}しました。

『私^{わたし}はこちらの世界^{せかい}へ来^きて居^おりながら、ただの一度^{ひと}もまだ竜^{りゆうじん} 神^{かみ}さんの御^ご本体^{ほんたい}を拝^{おが}ましていただいたことがない。今日^{きょう}はあなたを訪^{おも}つた紀念^{きねん}に、是非^{ぜひ}こちらの竜^{りゆうじん} 神^{かみ}さんにお目^め通^{とお}りをしたい。あなたから篤^{とく}とお依^{たの}みしてくださらぬか……。』
これには私^{わたし}もいささか当^{とう}惑^{わく}して了^{しま}いました。果^{はた}して滝^{たき}の竜^{りゆうじん} 神^{かみ}さんが快^{こころよ}く母^{はは}の依^{たの}みを諾^きいてくださるか何^どうか、私^{わたし}にもまったく見^{けん}当^{とう}がとれないのでした。

『とも角も、私から折入ってお願ひして見ることにいたしましょう。しばらくお待ちくださいませ……。』

私は单身瀑壺の側を通つて上のお宮に詣で、母の願望をかなえさせてくださるようお依みしました。

滝の竜 神さんはいつものように老人の姿でお現われになり、微笑を浮べて斯う言われるのでした。――

『汝達の談話はよう俺にも聴えて居ました。人間の母子の情愛と申すものは、大い皆あしたものらしく、俺達の世界のようになかなかあつさりはして居らん。それで汝の母人は、今日爰へ来た序に俺の本体を見物して、それを土産に持つて帰りたいということのようであるが、これは少々困つた注文じゃ。俺の方で勿体ぶる訳ではないが、汝の母人の修行の程度では、俺がいかに見せたいと思つてもまだとてもまともに俺の姿を見ることはできぬのじゃ……。が、折角の依みとあつて見れば何とか便宜を図つて上げずばなるまい。兎も角も母人を瀑壺のところへ連れてまいるがよからう……。』

私は早速修行場から母を瀑壺の辺に連れ出しました。そして二人で、両手を合

せて一心に祈願をこめて居りますと、やがてどつと逆落しに落ち来る滝の飛沫の中に、二間位の白い女性の竜神の優さしい姿が現われて、巖角を伝つてすーツと上方に消え去りました。

『あれは俺の子供の一人じやが……。』

そう言われて、驚いて振りかえると、滝の竜神さんが、いつもの老人の姿で、ここにこしながら、私達の背後に来て、佇んで居られるのでした。

私は厚く今日のお礼をのべて母を引き合わせました。竜神さんはいとど優さしく、いろいろと母を勞わってくださいましたので、母もすっかり安心して、丁度現世でするように私の身の上を懇々とお依みするのです。

『不束な娘でございますが、何うぞ今後とも宜しうお導きくださいますよう……。さぞ何かとお世話が焼けることでございましょう……。』

『イヤあなたは良いお子さんを有たれて、大へんにお幸福じゃ。』竜神さんというよりもむしろ人間らしい挨拶ぶり。『近頃は大部分修行も積まれてもう一と息というところじや。人間には執着が強いので、それを棄てるのがなかなかの苦勞、ここま

で来るのには決して生やさしい事ではない……。』

『これから先きは娘は何ういう風になるのでございますか。まだ他にもいろいろ修行があるのでございましょうか?』

『イヤそろそろ修行に一段落つくところじや。本人が生前大へんに気に入った海辺があるので、これからそこへ落付かせることになつて居る……。』

『左様でございますか。どんなに本人にとりまして満足なことでございましょう。』
 と母は自分のことよりも、私の前途につきて心を遣つてくれるのでした。『それについては、私があまりたびたび訪ねるのは、却つて修行の邪魔になりましようから、成るべく自分の住所を離れずに、ただ折々の消息をきいて楽しむことに致しましよう。その内折を見てこの娘の良人なりと訪ねさせていただき度うございます。そうすれば修行をするにも何んなに張合いがあることでございましょう……。』

『イヤそれはもうしばらく待つてもらいたい。』と滝の竜神さんはあわて氣味に母を制しました。『あの人にはあの人としての仕事があり、めいめい為ることが異います。良人を招ぶのは海辺の修行場へ移つてからのことじや……。』

『矢張りそんな訳のものでございますか……。私どもにはこちらの世界のことがまだよくのみ込めないで、ときどき飛んだ失策をいたします。何分神様の方で宜しきよう

に……。」

『その点は何うぞ安心なさるように……。ではこれでお別れします。』

滝の竜 神さんがプイと姿を消し、それと入れ代りに母の指導役のお爺さんが早速姿を現わしましたので、母は名残惜しげに、それでも大して泪も見せず、間もなく別れを告げて帰り行きました。

『矢張り生みの母は有難い……。』

見送る私の眼からはこらへこらへた溜涙が一度に滝のように流れました。

五十八、可憐な少女

母に逢つてからの私は、しばらくの間気分が何となく落つかず、統一の修行をやつて見ても、ツイふらふらと鎌倉で過した処女時代の光景を眼の中に浮べて見るようなことが多いのです。『こんなことでは本当の修行にも何にも何にもなりはしない。気晴らしに少し戸外へ出て見ましょう……。』とうとう私は単身で滝の修行場を出かけ、足のまにまに、谷川を伝つて、下方へ下方へと降りて行きました。

戸外は矢張り戸外らしく、私は直に何ともいえぬ朗かな気持ちになりました。それに一步と川の兩岸がのんびりと開けて行き、そこら中にはきれいな野生の花が、所せきまで咲き匂っているのです。『まあ見事な百合の花……。』私は覚えさう叫んで、巖間から首をさし出していた半開の姫百合を手折り、小娘のように頭髮に挿したりしました。

私がそうした無邪気な乙女心に戻っている最中でした、不図附近に人の気配がするのに気がついて、愕いて振り返って見ますと、一本の満開の山椿の木陰に、年齢の頃はやつと十歳ばかりの美しい少女が、七十歳位と見ゆる白髪の人老に伴われて佇っていました。

『あれは山椿の精ではないかしら……。』

一人はそう思いましたが、眼を定めてよくよく見ると、それは妖精でも何でもなく、矢張り人間の小供なものでした。その娘はよほど良い家柄の生れらしく、丸ポチャの愛くるしい顔にはどこことなく気品が備わって居り、白練の下衣に薄い薄い肉色の上衣を襲ね、白のへこ帯を前で結んでだらりと垂れた様子と言ったら飛びつきたいほど優美でした。頭髮は項の辺で切つて背後に下げ、足には分厚の草履を突かけ、すべてがいかにも

無造作で、どこをさがしても厭味の無いのが、むしろ不思議な位でございました。

兎に角日頃ただ一人山の中に閉じこもり、めったに外界と接する機会のない私にとりて、斯うした少女との不意の会合は世にももの珍らしい限りでございました。私は不躰とか、遠慮とか言つたようなことはすっかり忘れて了い、早速近づいて附添のお爺さんに訊ねました。――

『あの、このお兄さまは、どこのお方でございますか？』

『これはもと京の生れじやが、』と老人は一向済ました面持で『ごく幼い時分に父母に訣れ、そしてこちらの世界に来てからかくまで生長したものじや……。』

『まあこちらの世界で大きくなられたお方……私、まだ一度もそう言つたお方にお目にかつたことがございませぬ。もしお差支がなければ、これから私の滝の修行場までお出掛けくださいませぬか。ここからそう遠くもございませぬ……。』

『あなたの事はかねて滝の竜神さんから伺つて居ります……。ではお言葉に従つてこれから邪魔を致そうか……。雛子、この姨さまに御挨拶をなさい。』

そう言われると少女はにつこりして丁寧に頭をさげました。

わたくし私はいそいそこの二人の珍客を伴いて、滝の修行場へと向つたのでした。

五十九、水さかずき

お客さまが見えた時に、こちらの世界で何が一ばん物足りないかといえば、それは食物のないことでございます。それも神様のお使者や、大人ならば兎も角も、斯うした小供さんの場合には、いかにも手持無沙汰で甚だ当惑するのでございます。

致方がないから、あの時私は御愛想に滝の水を汲んで二人に薦めたのでした。――

『他に何もさし上げるものとしてございませぬ。どうぞこの滝のお水なりと召し上れ……。』

これならどんなに多量でもございます……。』

『これはこれは何よりのおもてなし……雛子、そなたも御馳走になるがよいであろう。世
界中で何が美味いと申しても、結局水に越したものはござらぬ……。』

指導役のお爺さんはそんな御愛想を言いながら、教え子の少女に水をすすめ、又御自分でも、さも甘そうに二三杯飲んでくださいました。私の永い幽界生活中にも
お客様と水杯を重ねたのは、たしかこの時限りのようで、想い出すと自分ながら

可笑しく感ぜられます。

それはそうとこの少女の身の上は、格別変つた来歴と申すほどのものでもございませぬが、その際指導役の老人からきかされたところは、多少は現世の人々の御参考にもなろうかと存じますので、あらましお伝えすることに致しましょう。

老人の物語るところによれば、この少女の名は雛子、生れて六歳のいたいけざかりにこちらの世界に引き移つたものだそうで、その時代は私よりもよほど後れ、帰幽後ざつと八十年位にしかならぬとのことでございました。父親は相当高い地位の大宮人で、名は狭間信之、母親の名はたしか光代、そして雛子は夫婦の仲の一粒種のいとし児だつたのでした。

指導役のお爺さんはつづいてかく物語るのでした。――

『御身も知るとおり、こちらの世界では心の純潔な、迷いの少ないものはそのまま側路に入らず、すぐに産土神のお手元に引きとられる。殊に浮世の罪穢に汚されていない小供は例外なしに皆そうで、その為めこの娘なども、帰幽後すぐに俺の手で世話することなつたのじや。しかるに困つたことにこの娘の両親は、きつい仏教信者であつた為め、わが児が早く極楽浄土に行けるようにと、朝に晩にお経を上げてしきり

に冥福を祈つて居るのじや……。この娘自身はすやすやと眠っているから格別差
 支もないが、この娘の指導役をつとめる俺にはそれが甚だ迷惑、何とか良い工夫は
 ないものかと頭脳を悩ましたことであつた。むろん人間には、賢愚、善悪、大小、
 高下、さまざまの等差があるので、仏教の方便も穴勝悪いものでもなく、迷いの
 深い者、判りのわるい者には、しばらくこちらで極楽浄土の夢なりと見せて仏式で
 修行させるのも却つてよいでもある。——が、この娘としてはそうした方便の必
 要は毛頭なく、もともと純潔な小供の修行には、最初から幽界の現実
 に目覚めさせるに限るのじや。で、俺は、この娘がいよいよ眼を覚ますのを待ち、服装
 などもすぐに御国振りの清らかなものに改めさせ、そしてその姿で地上の両親の夢
 枕に立たせ、自分は神さまに仕えている身であるから、仏教のお経を上げること
 は止めてくださるやうにと、両親の耳にひびかせてやったのじや。最初の間は二人
 とも半信半疑であつたものの、それが三度五度と度重なるに連れて、漸くこれではな
 らぬと気がついて、しばらくすると、現世から清らかな祝詞の聲がひびいて来るようにな
 りました……。イヤ一人の小供を満足に仕上げるにはなかなか並大抵の苦心ではござ
 らぬ。幽界に於ても矢張り知識の必要はあるので、現世と同じように書物を読ませ

たり、又小供には小供の友達もなければならぬので、その取持をしてやつたり、精神統一の修行をさせたり、神様のお道を教えたり、又時々はあちこち見学にも連れ出して見たり、心から好きでなければとても小供の世話は勤まる仕事ではござらぬ。が、お蔭でこの娘も近頃はすっかりこちらの世界の生活に慣れ、よく俺の指図をきいてくれるので大へんに助かつて居ります。今日なども散歩に連れ出した道すがら図らずもあなたにめぐり逢い、この娘の爲めには何よりの修行……あなたからも何とか言葉をかけて見てくだされ……。』

そう言つて指導役の老人はあたかも孫にでも対する面持で、自分の教え子を膝元へ引き寄せるのでした。

『雛子さん』と私も早速口を切りました。『あなたはお爺さんと二人切りでさびしくはないのですか?』

『ちつともさびしいことはございません。』といかにもあつさりした返答。

『まあお偉いこと……。しかし時々はお父さまやお母さまにお逢いしたいでしょう。いつかお逢いしましたか?』

『たった一度しか逢いませぬ……。お爺さんが、あまり逢つては良けなないと仰つしやいま

すから……。わたしそんなに逢いたくもない……。』

何をきかれてもこの娘の答は簡單明瞭、幽界で育つた小供には矢張りどこか異
つたところがあるのでした。

『これなら修しゆぎよう行あんがいも案外らんぐに樂らくであろう……。』
私わたくしはつくづく肚はらの中でそう感じたことでした。

六十、母性愛

その日はそれ位のことで別わかれましたが、後あとで又またちよいちよいこの二人ふたりの來訪らいほうを受け、
とうとうそれが縁えんで、私わたくしは一度こちらの世界せかいでこの娘この母親ははおやとも面會めんかいを遂とげること
になりました。なかなかしとやかな婦人ふじんで、しきりに娘むすめのことばかり氣きにかけて居おりました。
その際さい私わたくし達たちの間に交あされた問答もんどうの中には、多少たしょう皆みな様の御参考ごさんこうになるところが
あるように思おもわれますので、序ついでにその要點ようてんだけここに申もうし添そへて置おきましょう。

問『あなた様さまは御生前ごせいぜんに大たいそう厚あつい仏教ぶつぎようの信者しんじやだったそうでございますが……。』
答『私わたくしどもは別に平生厚へいぜいい仏教ぶつぎようの信者しんじやというのでもなかつたのでございますが、可か

愛い小供を亡つた悲歎のあまり、阿弥陀様にお縋りして、あの娘が早く極楽浄土に行けるようにと、一心不乱にお経を上げたのでございました。こちらの世界の事情が少し判つて見ると、それがいかに浅墓な、勝手な考であるかがよく判りますが、あの時分の私達夫婦はまるきり迷いの闇にとざされ、それがわが娘の済むやうすがである、愚かにも思い込んで居たのでした。――あべこべに私ども夫婦はわが娘の手で済まれました。夫婦が毎夜夢の中に続けざまに見るあの神々しい娘の姿……私どもも曇つた心の鏡にも、だんだんとまことの神の道が臙氣ながら映つてまいり、いつとはなしに御神前で祝詞を上げるようになりました。私どもは全く雛子の小さな手に導かれて神様の御許に近づくことができたのでございます。私がこちらの世界へまいる時にも、真先きに迎えに来てくれたのは矢張りあの娘でございました。その折私は飛び立つ思いで、今行きますよ……と申した事はよく覚えて居りますが、修行未熟の身の悲しさ、それから先きのことはさっぱり判らなくなつてしまいました。後で神さまから伺えば、私はそれから十年近くも眠つていたとのこと、自分ながらわが身の臙甲斐なさに呆れたこととございました……。』

問『いづお娘さまとはお逢いなされましたか……。』

答『自分が気がついた時、私はてつきりあの娘が自分の傍に居てくれるものと思ひ込み、
 しきりにその名を呼んだのでございます。——が、いかに呼べど叫べど、あの娘は姿を
 見せてくれませぬ。そして不図気がついて見ると、見も知らぬ一人の老人が枕辺に
 佇つて、凝乎と私の顔を見つめて居るのでございます。やがて件の老人が徐ろに口を
 開いて、そなたの子供は今ここに居ないのじやから、いかに呼んでも駄目じや。修
 行が積んだら逢わせてあげぬでもない……。そんなことを言われたのでございます。
 その時私は、何という不愛想な老人があればあるものかと心の中で怨みましたが、
 後で事情が判つて見ると、この方がこちらの世界で私を指導してくださる産土神のお
 使者だつたのでございました……。兎も角も、修行次第でわが娘に逢わしてもらえ
 ることが判りましたので、それからの私は、不束な身に及ぶ限りは、一生懸命に修
 行を励みました。そのお蔭で、とうとう日頃の願望の協う時がまいりました。どこ
 をドウ通つたのやら途中のことは少しも判りませぬが、兎も角私は指導役の神さま
 に連れられて、あの娘の住居へ訪ねて行つたのでございます。あの娘の歿つたのは六歳
 の時でございましたが、それがこちらの世界で大分に大きく育つていたのには驚きまし
 た。稚な顔はそのままながら、どう見ても十歳位には見えるのでございます。私はう

れしいやら、悲しいやら、夢中であの娘を両腕にひしとだきかかえたのでござい
ます……。が、それまでが私の嬉しさの絶頂でございました。私は何やら奇妙な
感じ……。予て考えていたのとはまるきり異つた、何やらしみじみとせぬ、何やら物足り
ない感じに、はつと愕かされたのでございます……。』

問『つまり軽くて温みがなく、手で触つてもカサカサした感じではございませんでしたか

……。』

答『全くお言葉の通り……。折角抱いてもさっぱり手応えがないのでございます。私には

いかに考えても、こればかりは現世の生活の方がよほど結構なように感じられて致

方。がございませぬ。神様のお言葉によれば、いつか時節がまいれば、親子、夫婦、

兄弟が一緒に暮らすことになるとのことでございますが、あんな工合では、たとえ

一緒に暮らしても、現世のように、そう面白いことはないのではございませうか……

……。』

二人の問答はまだいろいろありますが、ひと先ずこの辺で端折ることにいたしましたよ

う。現世生活にいくらか未練の残っている、つまらぬ女性達の繰り言をいつまで申

上げて見たところで、そう興味もございませうまいから……。

六十一、海の修行場

まえにも申し上げた通り、私が滝の修行場に居りました期間は割合に短かく、又これと言つて珍らしい話もありませぬ。私は大体彼所でただ統一の修行ばかりやつていたのでございますから……。

滝の修行時代がどれ位つづいたかと仰つしやるか……。さア自分にはさつぱりその見当がつきませぬが、指導役のお爺さんのお話では、あれでも現世の三十年位には当るであらうとの事でございました。三十年と申すと現世ではなかなか長い歳月でございますが、こちらでは時を量る標準が無い故か、一向それほどにも感じないのでございまして……。

それはそうと、私の滝の修行場生活もやがて終りを告ぐべき時がめぐつてまいりました。ある日私が御神前で深い深い統一に入つて居りますと、ひよつくり滝の竜神さんが、例の白衣姿ですぐ間近くお現われになり、斯う仰せられるのでございまして。――

『そなたの統一もその辺まで進めば先ず大丈夫、大概の仕事に差支えることもあるまい。従つてそなたがこの上ここに居る必要もなくなった訳……ではこれでお別れじゃ……。』

言いも終らず、パイと姿をお消しになり、そしてそれと入れ代りに私の指導役のお爺さんが、いつの間にやら例の長い杖をついて入口に立つて居られました。

私はびつくりして訊ねました。――

『お爺さま、これから何所ぞへお引越でございますか？』

『そうじや……今度の修行場はきつと汝の氣に入るぞ……。すぐ出掛けるとしよう……』

不相変あつさりしたものでございます。しかし、私の方でも近頃はいくらかこちらの世界の生活に慣れてまいりましたので、格別驚きも、怪しみもせず、ただ母の紀念の守刀を身につけた丈で、心静かに坐を起しました。

が、それにつづいて起つた局面の急転回には、さすがの私も少し呆れない訳にはまいりませんでした。お暇乞いのために私が滝の竜神さんの祠堂に向つて合掌瞑目したのはホンの一瞬間、さて眼を開けると、もうそこはすでに滝の修行

場でも何でもなく、一望千里の大海原を前にした、素晴らしく見晴らしのよい大きな巖の頂点に、私とお爺さんと並んで立っていたのでした。

『ここが今度の汝の修行場じや。何うじや氣に入つたであらうが……。』

びつくりした私が御返答をしようとする間もあらせず、お爺さんの姿が又々烟のように側から消えて無くなつてしまいました。

重ね重ねの早業に、私は開いた口が容易に塞がりませんでした。漸く氣を落ちつけて四辺の景色を見わたした時に、私は三たび驚かされてしまいました。何故かと申すに、巖の上から見渡す一帯の景色が、どう見ても昔馴染の三浦の西海岸に何所やら似通つて居るのでございますから……。

六十二、現世のお浚

私はうれしいのやら、悲しいのやら、自分にもよくは判らぬ気分ではばらくあたりの景色に見とれて居ましたが、不図自分の住居のことが氣になつて来ました。

『お爺さんは私の住居について何とも仰つしやられなかったが、一たいそれはどこにある

のかしら……。』

私は巖の上からあちこち見まわしました。

脚下は一帯の白砂で、そして自分の立つてゐる巖の外にも幾つかの大きな巖があちこちに屹立して居り、それにはひねくれた松その他の常盤木が生えて居ましたが、不図気がついて見ると、中で一ばん大きな彼方の巖山の裾に、一つの洞窟らしいものがあり、これに新しい注連縄が張りめぐらしてあるのでした。

『きつとあれが私の住居に相違ない……。』

私は急いで巖から降りてそこへ行つて見ると、案に違わず巖山の底に八畳敷ほどの洞窟が天然自然に出来て居り、そして其所には御神体をはじめ、私が日頃愛用の小机までがすでにキチンと取り揃えられてありました。

一と目見て私は今度の住居が、心から好きになつて了いました。洞窟と言っても、それはよくよく浅いもので明るさは殆んど戸外と変りなく、そして其所から海までの距離がたった五六間、あたりにはきれいな砂が敷き詰められていて、所々に美しい色彩の貝殻や香いの強い海藻やらが散ばつてゐるのです。

『まるきり三浦の海岸そつくり……。こんな場所なら、私はいつまでここに住んでもよい

……。」

私は室を出たり、入ったり、しばらく坐ることも打忘れて小娘のようにはしゃいだことでした。

今日から振り返って考えると、この海の修行場は私のために神界で特に設けて下さったお濠い場所ともいふべきものでございました。境遇は人の心を映すとやら、自分が現世時代に親んだのとそっくりの景色の中に犇と抱かれて、別に為すこともなくたつた一人で暮らして居りますと、考はいつとはなしに遠い遠い昔に馳せ、ありとあらゆる、どんな細かい事柄までもはつきりと心の底に甦つて来るのでした。紅い色の貝殻一つ、かすかにひびく松風一つが私にとりてどんなにも数多き思い出の種子だったでございましょう！それは丁度絵巻物を繰り拡げるように、物心ついた小娘時代から三十四歳で歿るまでの、私の生涯に起つた事柄が細大漏れなく、ここで復習をさせられたのでした。

で、この海の修行場は私にとりて一の涙の棄て場所でもありました。最初四辺の景色が気に入ってはしゃいだのはホンの束の間、後はただ思い出しては泣き、更に思い出しては泣き、よくもあれで涙が涸れなかったと思われるほど泣いたのでございました。元

来私は涙もろい女、今でも未だ泣く癖がとまりませぬが、しかしあの時ほど私がつけざまに泣いたこともなかったように覚えて居ります。

が、思い出す丈思い出し、泣きたい丈泣きつくした時に、後には何ともいえぬしんみりと安らかな気分が私を見舞つてくれました。こんなにくじのない者に幾分か心の落つきが出て来たように思われるのは、たしかにあの海の修行場で一生涯のお浚をしたおかげであると思ひます。私は今でもあれが私にとりて何より難有い修行場であつたと感謝せずには居られませぬ。尚おここはただ昔の思い出の場所であつたばかりでなく、現世時代に關係のあつた方々との面会の場所でもあり、私は随分いろいろな人達とここでお逢いしました。標本として私が彼所で実家の忠僕及び良人に逢つた話なりと致しましょうか。格別面白いこともございませぬが……。

六十三、昔の忠僕

私がある日海岸で遊んで居りますと、指導役のお爺さんが例の長い杖を突きながら彼方からトボトボと歩いて来られました。何うした風の吹きまわしか、その日は大へん御

機嫌きげんがよいらしく、老顔ろうがんに微笑えみを湛たたえて斯こう言いわれるのでした。――

『今日は思おもい掛がけない人ひとを連つれて来くるが、誰だれであるか一つ当あてて見みるがよい……。』

『そんなこと、私わたしにはできはしませぬ……できる筈はずがございませぬ。』

『コレコレ、汝そちは何なんの爲ために多た年ねん精せい神しん統とう一の修しゆ行ぎやうをしたのじや。統とう一いつというも

のは斯こうした場ば合あいに使つかうものじや……。』

『左様さようでございますか。ではちよつとお待まちち下くださいませ……。』

私わたしは立たちながら眼めを瞑つむつて見みると、間まもなく眼めの底そこに頭髪かみの真白まっしろな、瘦やせた老ろう人じんの

姿すがたがありありと映うつつて来きました。

『八十歳位さくばういの年寄としよりでございますが、私わたしには見覚みおぼえがありません……。』

『今いまに判わかる……。ちよつと待まちつて居いるがよい。』

お爺さんじいはいとも気軽きがるにスーツと巖山いわやまをめぐつて姿すがたを消けして了しましました。

しばらくするとお爺さんじいは私わたしが先刻せんこく靈眼れいがんで見みた一人ひとりの老ろう人じんを連つれて再ふたびそこへ現あらわ

れました。

『何どうじや実物じつぶつを視みてもまだ判わからんかな。――これは汝そちのお馴染なじみの爺じいや……数間かずまの爺じいや

じや……。』

そう言われた時の私の頭腦の中には、古い古い記憶が電光のように閃きました。

『まあお前は爺やであつたか！　そう言えば成るほど昔の面影が残っています。』 第

一その小鼻の側の黒子……それが何より確かな目標です……。

『姫さま、俺は今日のようにうれしい事はござりませぬ。』と数間の爺やは砂上に手を

ついてうれし涙に咽びながら『夙から姫さまに逢わせてもらいたいと神様に御祈願をこ

めていたのでござりますが、靈界の掟としてなかなかお許しが降りず、とうとう今日

までかかつてしまいましたのじや。しかしお目にかかつて見ればいつに変わぬお若さ……俺

はこれで本望でござりまする……。』

考えて見れば、私達の対面は随分久しぶりの対面でございました。現世で別

れた切り、かれこれ二百年近くにもなつていたのでございますから……。数間の爺やのこ

とは、ツイうっかりしてまだ一度もお風評を致しませんでした、これは、むかし鎌倉

の実家に仕えていた老僕なのでございます。私が三浦へ嫁いだ頃は五十歳位でもあつた

でしょうが、夙に女房に先立たれ、独身で立ち働いている、至つて忠実な親爺さ

んでした。三浦へも所中泊りがけで訪ねてまいり、よく私の愛馬の手入れなどをして

くれたものでございます。そうそう私が現世の見納めに若月を庭前へ曳かせた時、そ

の手綱^{たづな}を執^とつていたのも、矢張りこの老人^{ろうじん}なのでございました。

だんだんきいて見ると、爺^{じい}やが死^しんだのは、私^{わたくし}よりもざっと二十年^{ねん}ばかり後^{のち}だというところでございました。『俺^{わし}は生^{しょう}涯^{がい}病^{びょう}氣^きという病^{びょう}氣^きはなく、丁^{ちやうど}度^ど樹^{じゆ}木^{もく}が自然^{しぜん}と立^た枯^かれるように、安^{やす}らかに現^{げん}世^せにお暇^{いとま}を告^つげました。身^み分^{ぶん}こそ賤^{いや}しいが、後^ご生^{しょう}は至^{いた}つて良^よかつた方^{ほう}でござります……』そんなことを申^{もう}して居^おりました。

こんな善^{ぜん}良^{りよう}な人^{にん}間^{げん}でござりますから、こちらの世^せ界^{かい}へ移^{うつ}つて来^きてからも至^{いた}つて大^た平^{いへい}無^ふ事^じ、丁^{ちやうど}度^ど現^{げん}世^せでまめまめしく主^{しゅ}人^{じん}に仕^{つか}えたように、こちらでは後^ご生^{しょう}大^{だい}事^じに神^{かみ}様^{さま}に仕^{つか}え、そして偶^{たま}には神^{かみ}様^{さま}に連^つれられて、現^{げん}世^せで縁^{えん}故^この深^{ふか}かつた人^{ひと}達^{たち}の許^{もと}へも尋^{たず}ねて行^ゆくとのことでした。

『この間^{あいだ}御^ご両^{りやう}親^{しん}様^{さま}にもお目^めにかからせて戴^{いた}きましたが、イヤその時^{とき}は欣^{よろこ}んでよいのやら、又は悲^{かな}しんでよいのやら……現^{げん}世^せの氣^き持^{もち}とは又^{また}格^{かく}別^{べつ}でござりました……。』
爺^{じい}やの口^{くち}からはそう言^いつた物^{もの}語^がたり語^りがいくつもいくつも出^でました。最後^{さいご}に爺^{じい}やは斯^こんなことを言^いい出^だしました。

『俺^{わし}はこちらでまだ三^{みつ}浦^{うら}の殿^{との}様^{さま}に一度^どもお目^めにかかりませぬが、今日^{きょう}は姫^{ひめ}さまのお手^て引^びきで、早^{さつ}速^{そく}日^ひ頃^{ころ}の望^{のぞ}み^みを協^かえ^なさせて戴^{いた}く^わけ^けに^はま^いり^ます^まい^か。』

『さア……。』

わたくし
私がいささか躊躇つて居りますと、指導役のお爺さんが直ちに側から引きとつて言われしました。――

『それはいと易いことじゃが、わざわざこちらから出掛けずとも、先方からこちらへ来て貰うことに致そう。そうすれば爺やも久しぶりでご夫婦お揃いの場面が見られるというものじゃ。まさか夫婦が揃つても、以前のようになんげんくさしゆうじゃくおこどうじやその点は請合つてくれるかな?』

『お爺さまモ一大丈夫でございますとも……。』

とうとう良人の方からこの海の修行場へ訪ねて来ることになって了いました。

六十四、主従三人

間もなく良人の姿がスーツと浪打際に現われました。服装その他は不変でございますが、しばらく見ぬ間に幾らか修行が積んだのか、何所となく身に貫禄がついて居りました。

『近頃は大へんに御無沙汰を致しました。いつも御機嫌で何より結構でございます……』

『お互にこちらでは別に風邪も引かんのです、アハハハハ。そなたも近頃は大きく若返ったようじゃ……。』

二三問答を交して居る中に、数間の爺やもそこへ現われ、私の良人と久しぶりの対面を遂げました。その時の爺やの歓びは又格別、『お二人で斯うしてお揃いの所を見ると、まるで元の現世へ戻ったような気が致します……。』そんなこと言つて涙をすするのでした。

そうする中にも、何人がどう世話して下すつたのやら、砂の上には折畳みの床几が三つほど据えつけられてありました。しかもその中の二つは間近く向き合ひ、他の一脚は少し下つて背後の方へ……。何う見たつて私達三人の爲めに特別に設けてくれたとしか思えない恰好なのでございます。

『どリア遠慮なく頂戴致そうか。』良人もひどく気を良くしてその一つに腰を降ろしました。

『こちらへ来てから床几に腰をかけるのはこれが初めてじゃが、なかなか悪い気持は

致さんな……。』

然るべく床几に腰を降ろした主従三人は、それからそれへと際限もなく水入らずの昔語りに耽りましたが、何にしろ現世から幽界へかけての長い歲月の間に、積み積った話の種でございますから、いくら語っても語っても容易に尽きる模様は見えないのでした。その間には随分泣くことも、又笑うこともありましたが、ただ有難いことに、以前良人と会った時のような、あの現世らしい、変な気持だけは、最早殆んど起らないまでに心がきれいになつていました。私は平気で良人の手を握つても見ました。

『随分軽いお手でございますね。』

『イヤ斯うカサカサして居てはさつぱりじや。こんな張子細工では今更同棲してもはじまるまい。』

私達夫婦の間にはそんな戯談が口をついて出るところまであつさりした気分が湧いて居ました。爺やの方では一層枯れ切つたもので、ただもううれしくて耐らぬと言つた面持で、黙つて私達の様子を打ち守つて居るのでした。

ただ一つ良人にとりての禁物は三崎の話でした。あちらに見ゆる遠景が丁度油壺の附近に似て居りますので、うつかり話頭が籠城時代の事に向いますと、良人の

様子が急に沈んで、さも口惜しいと言ったような表情を浮べるのでした。『これは良
けない……。』私は急いで話を他に外らしたことでございました。

困ったのは、この時良人も爺やもなかなか帰ろうとしないことで、現世でいうなら二人
が二三日私の修行場に滞在するようになりました。尤も、それはただ気持だけ
の話でございます。こちらには昼も夜もないのですから、現世のようにとても幾日とは
つきり数える訳には行かないのでございます。その辺がどうも話が大へんにしにくい点で
ございまして……。

海の修行場の話はこれで切り上げますが、兎に角この修行場は私にとりて最後の仕
上げの場所、そして私はこの時に神様から修行終了の仰せを戴いたのでござ
います。同時に現世の方ではすでに私のために一つの神社が建立されて居り、私は
間もなくこの修行場からその神社の方へと引移ることになったのでございます。
それに就きての経緯は何れ改めてこの次ぎに申上げることに致しましょう。

六十五、小桜神社の由来

ツイうつかりお約束やくそくをしてしまいましたので、これから私が小桜神社こざくらじんじやとして祀まつられた次第しだいを物語ものがたらなければならぬ段取だんどりになりましたが、実は私じつわたくしとしてこんな心こころ苦くるしいことはないのでございます。御覽ごらんのとおり私わたくしなどは別にこれと申もうしてすぐれた器量きりようの女性おんなでもなく、又修またしゆぎよう行いと言いったところで、多寡たかが知しれて居いるのでございます。こんなものがお宮みやに祀まつられるというのはたしかに分ぶんに過すぎたことで、私自身わたくしじんもそれはよく承知しょうちして居いるのでございます。ただそれが事實じじつである以上いじよう、抛ななく申もう上げるようなものの、決して決けつして私わたくしが良い氣きになつて居いる訳わけでも何でもありません。戴いたきとう存ぞんじます。私わたくしにとりてこんなしにくい話はなしはめつたにないのでございますから……。

だんだん事ことの次第しだいをしらべますと、話はなしはずつと遠とおい昔むかわたくし、私がまだ現世げんせに生いきて居いた時代だいに遡さかのるのでございます。前まえにもお話はなしたとおり、良人おつとの討死うちじ後うちじに私わたくしは所中しよちゆうそのお墓はかま詣まいりを致いたしました。何なににしろお墓はかまの前まえへ行いつて瞑目めいもくすれば、必かならず良人おつとのありし日ひのおもかげ面影おもかげがありありと眼めに映うつるのでございますから、當時とうじの私わたくしにとりてそれが何なによりの心こころの慰なぐさめで、よほどの雨風あめかぜでもない限りかぎ、めつたに墓参ぼさんを怠おこたるようなことはないのです。『今日きようも又お目めにかかつて来こようかしら……。』私わたくしとしてはただそれ位ぐらいのあつさりした心こ

持もちで出掛けたまでのことでもございました。この墓詣はかまいりは私が病やまいの床につくまでぎつと一年ねんあまりもつづいたでございましょうか……。

ところが意外いがいにもこの墓参ぼさんが大へんに里人さとびとの感激かんげきの種子たねとなつたのでございます。

『小櫻姫こざくらひめは本ほん当とうに烈女れつじょの亀鑑かがみだ。まだうら若い身みでありながら再縁さいえんしようなどと

いう心こころは微塵みじんもなく、どこまでも三浦みづらの殿様とのさまに操みさおを立たて通とうとは見上みあげたものである。』

そんな事を言いまして、途と中ちゆうで私わたしとすれ違ちがう時ときなどは、土地とちの男おとこも女おんなも皆みな泪なみだぐんで、い

つまでもいつまでも私の後わたくしうしろ姿すがたを見送みおくるのでございました。

里人さとびとからそんなにまで慕したつてもらいました私が、やがて病やまいの為ために殮たおれましたものでござ

いますから、その為ために一層そうにんき人気が出でたとも申しましようか、いつしか私わたしのことを世よ

にも類たぐいなき烈婦れつぷ……気性きしょうも武芸ぶげいも人並ひとなみすぐれた女丈夫じよじやうぶでもあるように囃はやし立てた

らしいのでございます。その事は後あとで指導役しどうやくのお爺さんじいから伺うかがつて自分じぶんながらびつくり

して了しまいました。私は決わたくしけつしてそんなに偉えらい女性おんなではございませぬ。私はただ自分じぶんの気が済す

むように、一すじ筋おんなに女子おんなとして当り前あたまえの途みちを踏ふんだまでのことなのでございまして……。

尤もつとも、最初さいしよは別べつに私わたしをお宮みやに祀まつるまでの話はなしが出でた訳わけではなく、時々ときとき思おもひ出だしては、

野良のらへの往ゆき来かえりに私の墓わたくしはかに香花こうげを手向たむける位くらいのことだったそうでございますが、その後のち

不図とした事が動機となり、とうとう神社というところまで話が進んだのでございました、まことに人の身の上というものは何が何やらさっぱり見当がとれませぬ。生きて居る時にはさんざん悪口を言われたものが、死んでから口を極めて讃められたり、又その反対に、生前栄華の夢を見たものが、墓場に入ってからひどい辱しめを受けたりします。そしてそれが少しも御本人には関係のない事柄なのですから、考えて見ればまことに不思議な話で、煎じつむれば、これは矢張り何やら人間以上の奇びな力が人知れず奥の方で働いているのではないのでしょうか。少くとも私の場合にはそうらしく感じられてならないのでございます……。

六十六、三浦を襲った大海嘯

さて只今申し上げました不図とした動機というのは、或る年三浦の海岸を襲った大海嘯なのでございました。それはめつたにない位の大きな時化で、一時は三浦三崎一帯の人家が全滅しように思われたそうでございます。すると、その頃、諸磯の、或る漁師の妻で、平常から私の事を大へんに尊信して

くれている一人の婦人がありました。『小櫻姫にお願いすれば、どんな事でも協かなえて下くださる……。』そう思い込んでいたらしいのでございます。で、いよいよ暴風雨が荒れ出だしますと、右の婦人が早速私の墓に駆けつけて一心不乱に祈願しました。――

『このままにして置きますと、三浦の土地は皆流れて了しまいます。小櫻姫さま、何うぞあな様のお力で、この災難を免れさせて戴いたきます。この土地でお縋りするのはあなた様より外にはござりませぬ。』

丁度その時私は海の修行場で不あ相変統一の修行三昧に耽ふけって居りましたので、右の婦人の熱誠こめた祈願がいつになくはつきりと私の胸に通じて来ました。これには私も一と方ならず驚おどろきました。――

『これは大へんである。三浦は自分にとりて切つても切れぬ深い因縁の土地、このまま土地の人々を見殺しにはできない。殊にあそこには良人をはじめ、三浦一族の墓もあること……。一つ竜神さんに一生懸命祈願して見ましょう……。正しい願いであるならきつと御神助が降るに相違ない……。』

それから私は未熟な自分にできる限りの熱誠をこめて、三浦の土地が災厄から免れるようにと、竜神界に祈願を籠めますと、間もなくあちらから『願ねがいの趣聴おもむきき届とどけ

る……。』との難有いお言葉が伝わってまいりました。

果して、さしものに猛り狂った大時化が、間もなく収まり、三浦の土地はさしたる損害もなくして済んだのでしたが、三浦以外の土地、例えば伊豆とか、房州とかは百年来例がないと言われるほどの惨害を蒙ったのでした。

斯うした時には又妙に不思議な現象が重なるものと見えまして、私の姿がその夜の漁師の妻の夢枕に立ったのだそうでございます。私としては別にそんなことをしよう

という所思はなく、ただ心にこの正直な婦人をいとしい女性と思つた丈のことでした。が、たまたま右の婦人がいくらか霊能らしいものを有つていたために、私の思念が先方に伝わり、その結果夢に私の姿までも見ることになったのでございましょう。そうしたことは格別珍らしい事でも何でもないので、場合が場合とて、それが飛んでもない大騒ぎになつて了いました。――

『小桜姫はたしかに三浦の土地の守護神様だ。三浦の土地が今度不思議にも助かつたのは皆小桜姫のお蔭だ。現に小桜姫のお姿が誰某の夢枕に立ったということだ

……。難有いことではないか……。』

私とすればただ土地の人達に代つて、竜神さんに御祈願をこめたまでのことで、私

たくしじん なんはたら
 自身みづかに何の働きのあつた訳ではないのでございますが、そうした経緯いきさつは無邪気な村
 人むらびとに判わからう筈はずもございません。で、とうとう私わたくしを祭神さいしんとした小桜神社こざくらじんじやが村人
 全体たいの相談そうだんの結果けつかけとして、建こん立りされる段取だんどりになつて了しましました。
 右みぎの事情じじようが指導役しどうやくのお爺さんじいから伝つたえられた時に私わたくしはびっくりして了しましました。私
 は真紅まっかになつて御辞退ごじたいしました。――

『お爺じいさま、それは飛とんでもないことでございます。私わたくしなどはまだ修しゆ行ぎ中ちゆうの身み、力ち
 量りやうといひ、又行状またおこないといひ、とてもそんな資格しかくのあらう筈はずがございませぬ。他ほかの事ことと異ちがひ、
 こればかりは御辞退ごじたい申上もうしあげます……。』

が、お爺さんじいはいつかな承知しょうちなさらないのでした。――

『そなたが何なんと言いおうと、神界しんかいではすでに人民じんみんの願ねがいを容いれ、小桜神社こざくらじんじやを建てさ
 せることに決きめた。そなたの器量ちからは神界しんかいで何なにもかも御存ごぞんじじや。そなたはただ誠心せいしん誠
 意いで人ひとと神かみとの仲介なかだちをすればそれでよい。今更いまさら我わが俤まを申もうしたとて何なんにもならんぞ……。

『左様さような訳わけのものでございましょうか……。』
 私わたくしとしては内心ないしん多大ただいの不安ふあんを感じながら、そうお答こたえするより外ほかに詮術せんすべがないので

ございました。

六十七、神と人との仲介

以上のべたところで一通り話の筋道だけはお判りになったことと存じます。神に祀られたといえ、ちよつと大変なことのよう思われましようが、内容は決してそれほどひどいことではないのでございまして……。

大体日本の言葉が、肉眼に見えないものを悉く神と言つて了うから、甚だまぎらわしいのでございます。神という一字の中には飛んでもない階段があるのでございます。諺にも上には上とやら、一つの神界の上には更に一だん高い神界があり、その又上にも一層奥の神界があると言つた塩梅に、どこまで行つても際限がないらしいのでございます。現在の私の境涯からいえば、最高のところは矢張り昔から教えられて居るとおり、天照大御神様の知しめす高天原の神界——それが事実上の宇宙の神界なのでございます。そこまでは、一心不乱になつて統一をやればどうやら私どもにも接近されぬでもありませんが、それから奥はとても私どもの力量には及びま

せぬ。指導役のお爺さんに伺つて見ましても、あまり要領は獲られませぬ……。つまり無い訳ではないが、限りある器量ではどうにもしようがないのでございましょう。高天原の神界から一段降つたところが、取りも直さずわれわれの住む大地の神界で、ここに君臨遊ばすのが、申すまでもなく皇孫命様にあらせられます。ここになるとずっとわれわれとの距離が近いとでも申しましょうか、御祈願をこむれば直接神様からお指図を受けることもでき、又そう骨折らずにお神姿を拝むこともできます——。尤もこれは幾らか修行が積んでからの事で、最初こちらへ参つたばかりの時は、何が何やら腑に落ちぬことばかり、恥かしながら皇孫命様があらゆる神々を統率遊ばす、真の中心の御方であることさえも存じませんでした。『幽明交通の途が杜絶しているせいか、近頃の間人はまるきり駄目じや……。昔の人間にはそれ位のことがよく判つていたものじやが……。』——指導役のお爺さんからそう言つてさんざんお叱りを受けたような次第でございました。私達でさえ、すでにこれなのでございますから、現世の方々が戸惑いをなさるのも或は無理からぬことかも知れませぬ。これは矢張りお爺さんの言われる通り、この際、大いに奮発して靈界との交通を盛んにする必要がございましょう。それさえできれば斯んなことは造作もなく判ることなのでござ

六十八、幽界の神社

かれこれする中に、指導役のお爺さんからは、お宮の普請が、最う大分進行して居るとのお通知がありました。――

『後十日も経てばいいよ鎮座祭の運びになる。形こそ小さいが、普請はなかなか手が込んで居るぞ……。』

そんな風評を耳にする私としては、これまでの修行場の引越とは異って、何となく気がかり……。幾分興入れ前の花嫁さんの氣持、と言ったようなところがあるのでした。つまり、うれしいようで、それで何やら心配なところがあるのでございます。

『お爺さま、鎮座祭とやらの時には、私がそのお宮に入るのをございますか……。』
『イヤそれとも少し異う……。現界にお宮が建つ時には、同時に又こちらの世界にもお宮

が建ち、そなたとしてはこちらのお宮の方に入るのじや。――が、そなたも知る通り現幽は一致、幽界の事は直ちに現界に映るから、実際はどちらとも区別がつけられないことになる……。』

『現界の方では、どんな個所にお宮を建てて居るのでございますか。』

『彼所は何と呼ぶか……つまり籠城中にそなたが隠れていた海岸の森蔭じゃ。今でも里人達は、遠い昔の事をよく記憶えていて、わざとあの地点を選ぶことに致したらしい……。』

『では油ヶ壺のすぐ南側に当る、高い崖のある所でございましょう、大木のこんもりと茂った……。』

『その通りじゃ。が、そんなことはこの俺に訊くまでもなく、自分で覗いて見たらよいであらう。現界の方はそなたの方が本職じゃ……。』

お爺さんはそんなことを言つて、まじめに取合つてくださいませんので、止むを得ずちよつと統一して、のぞいて見ると、果してお宮の所在地は、私の昔の隠家のあつたところで、四辺の模様はさしてその時分と變つて居ないようでした。普請はもう八分通りも進行して居り、大工やら、屋根職やらが、何れも忙がしそうに立働いているのが見えました。

『お爺さま、矢張り昔の隠家のあつた所でございます。大そう立派なお宮で、私には勿体のうございます。』

『現界のお宮もよくできて居るが、こちらのお宮は一層手が込んで居るぞ。もう夙に出
 来上っているから、入る前に一度そなたを案内して置くと致そうか……。』

『そうしていただければ何より結構でございますが……。』

『ではこれからすぐに出掛ける……。』

不相変お爺さんのなさることは早速急でございます。

わたくしたち

私

達は

連れ

立ち

て海

の修

行場

を後

に、

波打

際の

きれ

いな

白砂

を踏

んで

東へ

東へ

と進

みまし

た。右

手は

のた

りた

りとい

かにも

長閑

な海

原、

左手

はこ

んも

りと

樹木

の

茂

つた

丘つ

づき、

どう

見ても

三浦

の南

海

岸を

もう

少し

きれ

いに

した

よう

な景

色で

ござ

います。

ただ

海に

一艘

の漁

船も

なく、

又陸

に一

軒の

人家

も見

えない

のが

現世

と異

つて

い

る点

で、

それが

為め

に何

やら

全

体

の景

色に

夢

幻に

近

い感

じを

与

え

まし

た。

歩

いた

道

程は

一

里あ

まり

で

ござ

いま

し

よう

か、

や

が

て

一

つ三

つ松

原を

くぐ

ります

と、

そこ

は鬱

葱

たる

森

蔭

の

小

じん

まり

と

せ

る

う

やら

昔

私

が

隠

れ

て

いた

浜

磯

の

景

色

に

似

て、

更

に

一

層

理

想

化

し

た

よ

う

な

趣

が

あ

る

の

で

し

た。

不

図

氣

が

つ

い

て

見

る

と、

向

う

の

崖

を

少

し

削

つ

た

所

に

白

木

造

り

の

お

宮

が

木

葉

隠

れ

に

見

み

えました。大さは約二間四方、屋根は厚い杉皮葺、前面は石の階段、周囲は濡椽になつて居りました。

『何うじや、立派なお宮であらうが……。これでそなたの身も漸く固つた訳じや。これからは引越騒ぎもないことになる……。』

そう言われるお爺さんのお顔には、多年手がけた教え児の身の振り方のついたのを心から歎ぶと言つた、慈愛と安心の色が湛つて居りました。私は勿体ないやら、うれしいやら、それに又遠い地上生活時代の淡い思い出までも打ち混り、今更何と言うべき言葉もなく、ただ泪ぐんでそこに立ち尽したことでございました。

六十九、鎮座祭

そうする中にいよいよ鎮座祭の日がまいりました。

『現界の方では今日はいよいよお祭騒ぎじや。』と指導役のお爺さんが説きかけてくださいました。『地元の里はいうまでもなく、三里五里の近郷近在からも大へな人出で、あの狭い海岸が身動きのできぬ有様じや。往来には掛茶屋やら、屋台

店やらが充分できて居る……。が、それは地上の人間界のことで、こちらの世界は至つて静謐なものじや。俺一人でそなたをあのお宮へ案内すればそれで事が済むので……。まアこれまでの修行場の引越しと格別の相違もない……。』

そう言つてお爺さんは一向に取済ましたものでしたが、私としては、それでは何やら少し心細いように感じられてならないのでした。

『あのお爺さま、』私はとうとう切り出しました。『私一人では何やら心許のうございますから、お差支なくば私の守護靈さまに一緒に来て戴きたいのでございますが……。』

『それは差支ない。そなたを愛まで仕上げるのには、守護靈さんの方でも蔭で一方ならぬ骨折じやつた。——もう追ツつけ現界の方では鎮座祭が始まるから、こちらもすぐにその支度にかかる致そうか……。』

毎々申上げますとおり、私どもの世界では何事も甚だ手取り早く運びます。先ず私の服装が瞬間に変わりましたが、今日は平常とは異つて、身には白練の装束、手には中啓、足には木の蔓で編んだ一種の草履、頭髮はもちろん垂髪……甚ださツぱりしたものでございました。他に身につけていたものといえばただ母の紀念の守刀

——こればかりは女の魂でございますから、いかなる場合にも懷から離すようなことはないのでございます。

私の服装が變つた瞬間には、もう私の守護靈さんもいそいそと私の修行場へお見えになりました。お服装は広袖の白衣に袴をつけ、上に何やら白の薄物を羽織つて居られました。

『今日は良うこそ私をお召びくございました。』と守護靈さんはいつもの控え勝ちな態度の中にも心からのうれしさを湛え、『私がこちらの世界へ引移つてから、かれこれ四年にもなりますが、その永い間に今日ほど肩身が広く感じられることはただの一度もございませぬ。これと申すも偏に御指導役のお爺さまのお骨折、私からも厚くお礼を申上げます。この後とも何分宜しうお依み申します……。』

『イヤそう言われると俺はうれしい。』とお爺さんもニコニコ顔、『最初この人を預かつた当座は、つまらぬ愚痴を並べて泣かれることのみ多く、さすがの俺もいささか途方に暮れたものじゃが、それにしよう愛まで仕上つたものじゃ。これからは、何と言おうが、小桜神社の祭神として押しも押されもせぬ身分じゃ……。早速出掛けると致そう。』

お爺さんはいつもの通りの白衣姿に藁草履、長い杖を突いて先頭に立たれたのでした。

浪打際を歩いたように感じたのはホンの一瞬間、私達はいつしか電光のよう

に途中を飛ばして、例のお宮の社頭に立っていました。

内部に入ってホツと一息つく間もなく、忽ち産土の神様の御神姿がスツと神壇の奥深くお現われになりました。その場所は遠いようで近く、又近いようで遠く、

まことに不思議な感じが致しました。

恭しく頭を低げている私の耳には、やがて神様の御声が凛々と響いてまいりました。

それは大體左のような意味のお訓示でございました。

『今より神として祀らるる上は心して土地の守護に当らねばならぬ。人民からはさまぎまの祈願が出るであらうが、その正邪善悪は別として、土地の守護神となった上は一応丁寧に祈願の全部を聴いてやらねばならぬ。取捨は其上の事である。神として最も戒むべきは怠慢の仕打、同時に最も慎むべきは偏頗不正の処置である。怠慢に流るる時はしばしば大事をあやまり、不正に流るる時はややもすれば神律を紊す。よくよく心して、神から托された、この重き職責を果すように……。』

産土うぶすなの神様かみさまのお訓示さとしが終ると、つづいて竜宮界りゅうぐうかいからのお言葉ことばがありました、それは勿体もったいないほどお優やさしいもので、ただ『何事なにことも六ヶむすかしい事ことはこちらに訊きくように……』とのことでございました。

私は今更いまさらながら身みにあまる責任せきにんの重おもさを感じかんずると同時に、限りなき神恩しんおんの忝かたじけなさをしみじみと味あじわったことでございました。

七十、現界の祝詞

そうする中うちにも、今日の鎮座祭きようのちんざさいのことは、早くもこちらの世界せかいの各方面かくほうめんに通じたらしく、私の両親りょうしん、祖父母そふぼ、良人おつとをはじめ、その外ほか多くの人達ひとたちからのお祝いわいの言葉ことばが、頻々ひんひんと私の耳みみにひびいて参まいりました。それは別にあちらで通信つうしんしようとする意思いしはなくても、自然しぜんとそう感じかんじられて来るのでございます。近頃ちかごろは現界げんかいでも、電信でんしんとか、電話でんわとか申すものが出来て、斯うした場合ばあいによく利用りようされるそうでございますが、こちらの世界せかいでする仕事しごとも大体だいたいそれに似たもので、ただもう少し便利べんりなように思おもわれます。『思おもえば通つうずる……。』それがいつも私わたくしどものヤリ口くちなのでございまして……。

さてその際私に感じて来た通信の中では、矢張り良人のが一ばん力強くひびきま
した。『そなたはいよいよ神として祀られることになり、多年連添った良人として決して
仇やおろそかには考えられない。しかもその神社の所在地は、あの油壺の対岸
の隠れ家の跡とやら、この上ともしつかりやつて貰いますぞ……。』

兎角して居る中に、指導役のお爺さんから御注意がありました。――
『現界ではいよいよ御霊鎮めの儀に取りかかった。そなたはすぐにその準備にかかる
ように……。』

わたくし、私も心も、その時急に引きしまるように覚えました。

『これから自分はこのお宮に鎮まるのだ……。』

そう思った瞬間に、私の姿はいずくともなく消えて失せてしまいました。

後でお爺さんから承るところによると、私というものはその時すっかり御幣の中に入っ
て了ったのだそうで、つまり御幣が自分か、自分が御幣か、その境界が少しも判らなくな
ったのでございます。

その状態がどれ位つづいたかは自分には少しも判りませぬ。が、不思議なことに、
そうして居る間、現世の人達が奏上する祝詞が手に取るようにはつきりと耳に響い

て来るのでございます。その後何回斯うした儀式に臨んだか知れませぬが、いつもいつも同じ状態になるのでございまして、それは全く不思議でございます。

不図自分に返つて見ると、お爺さんも、又守護霊さんも、先刻の姿勢のままで、並んで神壇の前に立つて居られました。

『これで俺も一と安心じや……。』

お爺さんはしんみりとした口調で、ただそう仰ッしやられたのみでした。つづいて守護霊さんも口を開けました。――

『ここまで来るのには、御本人の苦勞も一と通りではありませぬが、蔭になり、日向になつて、親切にお導きくだされた神さま方のお骨折りは容易なものではございませぬ。決して決してその御恩をお忘れにならぬよう……。』

その折の私としましては感極りて言葉も出でず、せき来る涙を払えもあえず、一竜神さま、氏神さま、その外の方々に心から感謝のまことを捧げたことでございしました。

七十一、神馬

鎮座祭が済んでから私は一たん海の修行場に引き上げました。それは小桜神社の祭神として実際の仕事にかかる前にまだ何やら心の準備が要ると思われましたからで……。

で、私は一生懸命深い統一に入り、過去の一切の羈絆を断ち切ることによりて、一層自由自在な神通力を恵まれるよう、心から神様に祈願しました。それは時間にすれば恐らく漸く一刻位の短かい統一であつたと思いますが、心が引緊っている故か私とすれば前後にない位のすぐれて深い統一状態に入つたのでございました。畏れ多くも私として、天照大御神様、又皇孫命様の尊い御神姿を拝し奉つたのは実にその時が最初でございました。他にいろいろ申上げたいこともあります、それは主に私一人に關係した靈界の秘事に属しますので、しばらく控えさせて戴くことに致しましょう。

ただ一つここで御披露して置きたいと思ひますことは、神馬の件で……。つまり不図した動機から小桜神社に神馬が一頭新たに飼われることになつたのでございます。その経緯は斯うなのでございます。

わたくしふか
私が深い統一から覚めた時に、思いも寄らず最前（さいぜん）からそこに控（ひか）えて待つていたのは、
かずま
数間の爺（じい）やでございました。爺（じい）やは今日の鎮座祭（ちんざさい）の慶（よろこ）びを述べた後（あと）で、突然（とつぜん）斯（こ）んなこ
とを言（い）い出（だ）しました。――

『姫（ひめ）さまが今（こん）回（かい）神社（じんじや）にお入（はい）りなされるにつけては、是非（ぜひ）神馬（しんめ）が一頭（とう）欲しいと思（おも）います
るが……。』

『ナニ神馬（しんめ）？』と私（わたくし）はびっくりしまして『そなたは又（また）何（なに）うしてそんな事（こと）を言（い）い出（だ）すのじゃ
……。』

『実は（じつ）姫様（ひめさま）が昔（むかし）可愛（かわい）がりになつた、あの若月（わかつき）……あれがこちら（こち）らの世界（せかい）に來（き）て居（い）るので
ござります。私（わたくし）は何（なん）回（かい）かあの若月（わかつき）に逢（あ）つて居（お）りますので……。』

『若月（わかつき）なら私（わたくし）も一度（いちど）こちら（こち）らで逢（あ）いました……。』

『もうお逢（あ）いなされましたか……何（なん）んとお早（はや）いことで……。が、それなら尚（なお）更（さら）のこと
ござります。是非（ぜひ）あの若月（わかつき）を小桜（こざくら）神社（じんじや）の神馬（しんめ）に出（しゅ）世（つ）させておやり下さいませ。若（わ）
月（つき）がどんなに歡（よろこ）ぶか知（し）れませぬ。又（また）苟（かり）且（そめ）にも一つの神社（じんじや）に一頭（とう）の神馬（しんめ）もないとあつ
ては何（なん）となく引（ひ）立ちませんでナ……。』

『そんな勝手（かたて）な事（こと）が、できるかしら……。』

『できて、できなくても一応神様に談判して戴きます。これ位の願いが許されない
とあつては、俺にも料簡がござります……。』

数間の爺やの権幕と言つたら大へんなものでした。

そこでとうとう私から指導役のお爺さんにお話すると、意外にも産土の神様の
方ではすでにその手筈が整つて居り、神社の横手に小屋も立派に出来て居るとの事でござ
いました。それと知つた時の数間の爺やの得意さと言つたらありませんでした。

『ソールお見なされ姫様、他のことにかけては姫様がお偉いか知れぬが、馬の事にかけて
は矢張りこの爺やの方が一枚役者が上でござる……。』

間もなく私は海の修行場を引き上げて、永久に神社の方に引き移りましたが、
それと殆んど同時に馬も数間の爺やに曳かれて、頭を打振り打振り歓び勇んで私の所に現
われました。それからずっと今日まで馬は私の手元に元氣よく暮して居りますが、ただ
こちらでは馬がいつも神社の境内につながれて居る訳ではなく、どこに行つて居つて
も、私が呼べばすぐ現て来るだけでございます。さびしい時は私はよく馬を相手に遊びま
すが、馬の方でもあの大きな舌を持つて来て私の顔を舐めたりします。それはまことに可
愛らしいものでございまして……。

それから馬の呼名でございしますが、私は予ての念願どおり、若月を改めて、こちらでは鈴懸と呼ぶことに致しました。私が神社に落ちついてから、真先きに訪ねてくれたのは父だの、母だの、良人だのでございましたが、私は何は措いても先ずこの鈴懸を紹介しました。その際誰よりも感慨深そうに見えたのは矢張り良人でございました。良人はしきりに馬の鼻面を撫でてやりながら『汝もとうとう出世して鈴懸になったか。イヤ結構結構！俺はもう呼名について反対はせんぞ……。』そう言つて、私の方を顧みて、意味ありげな微笑を漏したことでございました。

七十二、神社のその日その日

前申上げましたように、兎も角も私は小桜神社を預かる身となつたのでございしますが、それから今日まで引きつづいてざつと二百年、考へて見れば随分永いことでございます。私の任務というのはごく一と筋のもので、従つて格別取り立てて吹聴するような珍らしい話の種ともありませんが、それでもこの永い星霜の間には何や彼やと後から後からさまざまの事件が湧いてまいり、とてもその全部を御伝へする訳にもまいり

ませぬ。中には又現世の人達に、今ここで御漏らししてはならないことも少しはあるのでございまして……。

で、いろいろと考えました末、これからあなた方に幾分か御参考になりそうな事柄だけを拾い出して御話しをいたし、そろそろこの拙き通信を切り上げさせて戴こうと存じます。

取り敢えず祭神となつてからの生活の変化と言つたような点を簡単に申上げて置こうかと存じます。御承知の通り、私の仕事は大体上の神界と下の人間界との中間に立ちて御取次ぎを致すのでございますが、これでも相当に氣骨が折れまして、うつかりして居ればどんな間違をするか知れません。修行時代には指導役の御爺さんが側から一々面倒を見てくださいましたから楽でございましたが、だんだんそうばかりも行かなくなりました。『汝には神様に伺うこともちゃんと教えてあるから、大概の事は自分の力で行らねばならぬぞ……。』そう言われるのでございます。又私としても、いつまでお爺さんにばかりお頼りするのあまりに意氣地がないように感じましたので、よくよくの重大事でもなければ、めつたに御相談はせぬことに覺悟をきめました。で、私として真先に工夫したことは一日の区画を附けることでございました、本来

からいえばこちらの世界に昼夜の区別はないのでございますが、それでは現界の人達と接するのにひどく勝手が悪く、どうにも仕方がございません。何にしろ人間界の方では朝は朝、夜は夜とちゃんと区画をつけて仕事をして居るのでございますから……。

乃で、私の方でもそれに調子を合わせて生活するように致し、丁度現世の人達が朝起きて洗面をすませ、神様を礼拝すると同じように、私も朝になれば齋戒沐浴して、天照大御神様をはじめ奉り、皇孫命様、竜神様、又産土神様を礼拝し、今日一日の任務を無事に勤めさせて下さいますようにと祈願を籠めることにしました。不思議なことにそんな場合には、いつも額いている私の頭の上で、さらつと幣の音が致します。その癖眼を開けて見ても、別に何も見えはしません。恐らく斯うして神界から、人知れず私の軀を淨めて下さるのでございましょう……。

夜は夜で、又神様に御礼を申上げます。『今日一日の仕事は無事に勤めさせて戴きまして、まことに難有うございました……。』その気持は別に現世の時と些しも異りはしません。兎に角これで初めて重荷が降りたように感じ、自分に戻つて寛ぎますが、ただ現世と異うのは、それから床を敷いて寝るでもなく、たつたひとりで懐かしい昔の思い出に耽つて、しんみりした気分に浸る位のものでございます。

兎に角かくこ斯こうして一日いちにちを区画くわくつて働くことは指導しどう役やくのお爺じいさんからも大たいへんに褒ほめられました。『よくそれ丈だけの考えかんががついた。それでこそ任務つとめが立派りっぱに果はたされる……。』そう仰おつしやつて戴いたいたのでございます。

ナニ参拝さんぱい人の話をいたせと仰おつしやるか……宜よろしうございます。私もそのつもりで居おりました。これからポツポツ想おもい出だしてその御話おはなしをして見ることに致いたしましょう。

七十三、参拝者の種類

神社じんじやの参拝者さんぱいしやと申しまして、その種類しゆるいはなかなか沢山たくさんでございます。近年きんねんは敬神けいしんの念ねんが薄うすらぎました故せいか、めつきり参拝者さんぱいしやの数が減かずへ、又熱心またねっしんさも薄うすらいだように感かんじられますが、昔むかしは大そう真剣しんけんな方かたが多おほかったものでございます。時勢じせいの变化へんかはこちらから観みて居ると実じつによく判わかります。神霊しんれいの有あるか、無ないかもあやふやな人達ひとたちから、単たんに形式けいしき的てきに頭あたまを低さげてもらいまして、ドーにも致いたし方かたがございませぬ。神か詣まう詣まいでは矢張り真心まごころ一つが資本もとででございます。たとえ神社じんじやへは参詣さんけいせずとも、熱心ねっしんに心こころで念ねんじてくだされば、ちゃんとこちらへ通つうずるのでございますから……。

参拝者さんぱいしやの中で一ばんに数も多く、又一ばんに美しいのは、矢張り何の註文ちゆうもんもなしに、御礼おれいに来らるる方々かたがたでございましょう。『毎日安泰まいいちあんたいに暮させていただきまして誠に難有まことありがとうございします。何卒明日も無事息災ぶじそくさいに過せましますよう……。』昔むかしはこんなあつさりしたのが大そう多かつたものでございします。殊に私が神に祀られました当座とうざは、海嘯つなみで助けられた御礼詣りおれいまいの人々で賑いました。無論むろんあの海嘯で相当沢山そうとうたくさんじんめいの人命が亡びたのでございしますが、心掛こころがけの良い遺族は決して恨みがましいことを申さず、死ぬのも皆寿命みなじゆみょうであるとあきらめて、心から御礼おれいを述べてくれるのでした。私として見れば、自分の力一つで助けた訳でもないのでもございしますから、そんな風に御礼を言われると却つて気の毒でたまらず、一層身を入れてその人達を守護して上げたい気分になるのでした。斯う言つた御礼詣りに亜いで多いのは病氣平癒の祈願、就中小供の病氣平癒の祈願でございします。母性愛ぼせいあいばかりはこれは全く別で、あれほど純な、そしてあれほど力強いものはめつたに他に見当りませぬ。それは実によく私の方に通じてまいります。――が、いかに依たのまれましても人間の寿命じゆみょう命ばかりは何うにもなりませぬ。随分一心不乱ふらんになつて神様に御継りするのでございしますが、死ぬものは矢張り死んで了います。そうした場合に平生心懸のよいものは、『これも因縁いんねんだから致方いたしかたがございませぬ……

『と言つて、立派にあきらめてくれますが、中には随分性質のよくないのがない訳でもございませぬ。『あんな神様は駄目だ……幾ら依んだつて些つとも利きはしない……』そんな事を言つて挨拶にも来ないのです。それが又よくこちらに通じますので……矢張り人物の善悪は、うまく行つた場合よりも拙く行つた場合によく判るようでございます。

次ぎに案外多いのは若い男女の祈願……つまり好いた同志が是非添わしてほしいと言つたような祈願でございます。そんなのは篤と産土神様に伺ひまして、差支のないものにはできる丈話が纏まるように骨を折つてやりますが、ひよつとすると、妻子のある男と一緒にいたいとか、又人妻と添はしてくれとか、随分道ならぬ、無理な注文もございます。無論私としてはそんな祈願を受附けないばかりか、次第によれば神様に申上げて懲戒を下して戴きもします。もぐりの流行神なら知らぬこと、苟くも正しい神として斯んな祈願に耳を傾けるものは絶対に無いと思えば宜しいかと存じます。

その外には事業成功の祈願、災難除けの祈願等いろいろございます。これは何れの神社でも恐らく同様かと存じます。人間はどんなに偉くても随分と隙間だら

けのものであり、又随分と気の弱いものでもあり、平生は大きなことを申して威張つて居りまして、まさかの場合には手も足も出はしませぬ。無論神の援助にも限りはありませんが、しかし神の援助があるのと無いのでは、そこに大へんな相違ができます。もともと神靈界ありての人間界なのでございますから、今更人間が旋毛を曲げて神様を無視するにも及びますまい。神様の方ではいつもチャーンとお膳立をして待つて居て下さるのでございます。

それからモー一つ申上げて置きたいのは、あの願掛け……つまり念入りの祈願でございまして、これは大てい人の寢鎮まつた真夜中のものと限つて居ります。そうした場合には、むろん私の方でもよく注意してきいて上げ、夜中であるから良いなどとは決して申しませぬ。現世というなら丁度急病人に呼び起されるお医者様と言つたところでございますようか……。

まだまだ細かく申したら際限もありませぬが、参拝者の種類はざつと以上のようなどところでございましょう、これから二つ三つ私の手にかけて実例をお話して見ることに致しますが、その前にちよつと申上げて置きたいのは、それ等の祈願を聴く場合の私の氣持でございます。ただぼんやりしていたのでは聴き漏しがありますので、私は朝に

なればいつも深い統一状態に入り、そしてそのまま御弊と一緒になつて了うのでござ
 います。その方が参拝者達の心がずっとよく判るからでございませう。つまり私の二百
 年間のその日その日はいつとも御弊と一体、夜分参拝者が杜絶た時分になつて初めて自
 分に返つて御弊から離れると言つた塩梅なのでございませう。
 ではこれからお約束の実例に移ります……。

七十四、命乞い

ここに私が神社に入つてから間もなく手にかけて事件がございませうから、あまり珍ら
 しくもありませぬが、それを一つお話ししたて見ましよう。それは水に溺れた五歳位の
 男の児の生命を助けたお話でございませう。

その小供は相当地位のある人……たしか旗本とか申す身分の人の倅でございまして、
 平生は江戸住いなのですが、お附きの女中と申すのが諸磯の漁師の娘なので、そ
 れに伴れられてこちらへ遊びに来ていたらしいのでございませう。丁度夏のことござい
 ましたから、小供は殆んど家の内部に居るようなことはなく、海岸へ出て砂いじりをし

たり、小魚を捕えたりして遊びに夢中、一二度は女中と一緒に私の許へお詣りに来たこともありましたが、普通なら一々参拝者を氣にとめることもないのですが、右の女中と申すのが珍らしく心掛のよい、信心の熱い娘でございましたから、自然私の方でも目を掛けることになったのでございます。現と幽とに分れて居りまして、人情にかりはなく、先方で熱心ならこちらでもツイその真心にほだされるのでございます。

すると或る日、この小供の身に飛んでもない災難が降つて湧いたのでございます。御承知の方もありましようが、三崎の西海岸には巖で囲まれた水溜があちこちに沢山ありまして、土地の漁師の小供達はよくそんなところで水泳ぎを致して居ります。真黒く日に焦けた軀を躍り狂わせて水くぐりをして居るところはまるで河童のよう、よくあんなにもふざけられたものだと感じ心される位でございます。江戸から来ている小供はそれが羨しくて耐えなかつたものでございまいし、自分では泳げもせぬのに、女中の不在の折に衣服を脱いで、深い水溜の一つに跳び込んだから耐りませぬ。忽ちブクブクと水底に沈んでしまいました。しばらく過ぎてからその事が発見されて村中の大騒ぎとなりました。何にしろ附近に医師らしいものは居ない所なので、漁師

達が寄つてたかつて、水を吐かせたり、焚火で煖めたり、いろいろ手を尽しましたが、相当時刻が経っているために何うしても氣息を吹き返さないのでした。

いよいよ絶望と決まつた時に、私の許へ夢中で駆けつけたのが、例のお附の女中でごございました。その娘はまるで半狂乱、頭髪を振り乱して階段の下に伏しまろび、一生懸命泣き乍ら祈願するのでした。――

『小櫻姫様、どうぞ若様の生命を取りとめて下さいませ……。私の過失で大切な若様を死なせて了つては、ドーあつてもこの世に生き永らえて居られませぬ。たとえ私の生命を縮めましても若様を生かしていただきます。小供の時分から信心して居る私で

ございます、今度ばかりは是非私の願いをお聴き入れ下さいませ……。』

私の方でも心から氣の毒に思いましたから、時を移さず一生懸命になつて神様に命乞いの祈願をかけましたが、何分にも相当手遅れになつて居りますので、神界から、一応は駄目であるとお告でございました。しかし人間の至誠と申すものは、斯うした場合に大した働きをするものらしく、くしびな神の力が私から娘に、娘から小供へと一道の光となつて注ぎかけ、とうとう死んだ筈の小供の生命がとりとめられたのでございました。全く人間はまごころ一つが肝要で、一心不乱になりますと、軀の内部から何や

ら一種の靈氣と申すようなものが出て、普通ではとてもできない不思議な仕事をするらしいのでございます。

兎に角死んだ筈の小供が生き返つたのを見た時は私自身も心から嬉しうございしました。まして当人はよほど有難かつたらしく、早速さまざまのお供物を携えてお礼にまいったばかりでなく、その後も終生私の許へ参拝を欠かさないのでした。こんなのは善良な信者の標本と言つても宜しいのでございましょう。

七十五、入水者の救助

今度は一つ夫婦のいさかいから、危く入水しようとした女のお話を致しました。……。太たい夫婦争いにあまり感心したものは少のうございまして、中には側で見ている方が却つて心苦しく、覚え顔を背けたくなる場合もございます。これなども幾分かその類でございまして……。

或る日一人の男が蒼白な顔をして、慌てて社の前に駆けつけました。何事かしらと、じつと見て居りますと、その男はせかせかとはずむ呼吸を鎮めも敢えず、斯んなことを

訴えるのでした。――

『神さま、何うぞ私の一生の願いをお聴き届け下さいませ……。私の女房奴が入水すると申して、家出をしたきり皆目行方が判らないのでございます。神様のお力でどうぞその足留めをしてくださいますよう……。実際のところ私はあれに死なれると甚だ困りますので……。私が他所に情婦をつくりましたのは、あれはホンの当座の出来心で、心から可愛いと思つてゐるのは、矢張り永年連れ添つて来た自家の女房なのでございます……。ただ彼女が余んまり嫉妬を焼いて仕方がございませんから、ツイ腹立まぎれに二つ三つ頭をどやしつけて、貴様のような奴はくたばつて了えと呶鳴りましたが、心の底は決してそうは思つていないのでございます……。あんなことを言つたのは私が重畳 悪うございました。これに懲りまして、私は早速情婦と手を切ります……。あの大切な女房に死なれては、私はもうこの世に生きてゐる甲斐がありませんね……。』

この男は三崎の町人で、年輩は三十四五の分別盛り、それが涙まじりに斯んなことを申すのでございますから、私は可笑しいやら、気の毒やら、全く呆れて了いました。でも折角の依みでございませうから、兎も角も家出した女房の行方を探つて見ますと、すぐその所在地が判りました。女は油ヶ壺の断崖の上に居りまして、しきりに小石を拾つ

て袂の中に入れて居るのは、矢張り本當に入水するつもりらしいのでございます。
そしてしくしく泣きながら、斯んなことを言つて居りました。――
『口惜しい口惜しい！ 自分の大切な良人をあんな女に寝とられて、何で黙つて置ける
ものか！ これから死んで、あの女に憑依いて仇を取つてやるからそう思つて居るがよい
……。』

平生はちよいちよい私のところへもお詣りに来る、至つて温和な、そして顔立ちもあま
り悪くはない女なのでございますのに、嫉妬の爲めには斯んなにも精神が狂つて、まるき
り手がつけられないものになつて了うのでございます。

見るに見兼ねて私は産土の神様に、氏子の一人が斯んな事情になつて居りますから、
何うぞ然るべく……と、お願いしてやりました。寿命のない者は、いかにお願いして
もおきき入れがございませぬが、矢張りこの女にはまだ寿命が残つて居たのでござい
ましよう、産土の神様の御眷族が丁度神主のような姿をしてその場に現われ、今
しも断崖から飛び込まうとする女房の前に両手を拵げて立ちはだかつたのでござい
ます。

不意の出来事に、女房は思わずキャツ！ と叫んで、地面に臀餅をついてしま

したが、その頃の人間は現今の人間とは異いまして、少しは神ごころがございすから、この女もすぐさまそれと気がついて、飛んだ心得違いをしたと心から悔悟して、死ぬることを思いとどまったのでございました。

一方私の方ではそれとなく良人の心に働きかけて、油壺の断崖の上に導いてやりましたので、二人はやがてバツタリと顔と顔を突き合わせました。

『ヤレヤレ生きていてくれたか……何と難有いことであらう……。』

『これというのも皆神様のお蔭……これから仲よく暮しましょう……。』

『俺が悪かった、勘弁してくれ。』

『お前もこれからわたしを可愛がつて……。』

二人は涙ながらに、しがみついていつまでもいつまでも離れようとしませんでした。その後男はすっかり心を入れかえ、村人からも羨まるほど夫婦仲が良くなりしました。現在でもその子孫はたしか彼地に榮えて居る筈でございす……。

七十六、生木を裂れた男女

あまり多愛たあいのないお話はなしばかりつづきましたので、今度は少しばかり複雑こみいなお話……一つ願掛けのお話を致いたして見みましょう。この願掛けにはあまり性質たちの良よいのは少すくなうございませう。大たいていは男おとこに情婦おんなができて夫婦仲ふうふなかが悪わるくなり、嫉妬やきもちのあまりその情婦おんなを呪のろい殺ころす、と言いったのが多いようおおで、偶たまには私わたくしの所ところへもそんなのが持もち込まれることもあります。でわたくしわたくしも私わたしとしては、全然ぜんぜんそう言いった厭いやらしい祈願きがんにはかかり合あわないことにして居おります。呪呪のろいが利きく神かみは、あれは又別またで、正ただしいものではないのでございませう。話はなしの種子たねとしては或あるはその方ほうが面おも白しろいか存ぞんじませぬが、生憎あいにく私わたしの手許てもとには一つもその持もち合あわせがございませぬ。私わたしの存ぞんじて居おりますのは、ただきれいな願掛けのお話ばかりで、あまり面白おもしろくもないと思おもいますが、一つだけ標本みほんとして申もう上あげることいたに致いたしませう……。

それは或あるる鎌倉かまくらの旧家きゆうかに起おこりました事件ことで、主人夫婦あるじふうふは漸ようく五十ごになるか、ならぬ位の年輩ねんばい、そして二人ふたりの間にたあった一人の娘むすめがありませう。母親ははが大たいへん縹緞きりようよしな分ぶんなく仕込しこまれて居おりました。此これが年頃としごろになつたのでございませうから、縁談えんだんの口くちは諸方しよほうから雨あめの降ふるようにかかりましたが、俚諺ことわざにも帯おびに短みじかし襷たすきに長ながしとやら、なかなか思おもう壺つぼにはまつたのがないのでございませう。

すると或る時、鎌倉のある所に、能狂言の催しがありまして、親子三人連れでその見物に出掛けました折、不図間近の席に人品の賤しからぬ若者を見かけました。

『これなら娘の婿として恥かしくない……。』両親の方では早くもそれに目星をつけ、

それとなく言葉をかけたりしました。娘の方でも、まんざら悪い気持もしないのでした。

それから早速人を依んで、だんだん先方の身元を調べて見ると、生憎男の方も一

人息子で、とても養子には行かれない身分なのでした。これには双方とも大へんに困り

抜き、何とか良い工夫はないものかと、いろいろ相談を重ねましたが、もともと男の方

でも女が気に入って居り、又女の方でも男が好きだったものでございますので、最後に、

『二人の間に子供ができたならそれを与る』という約束が成り立ちまして、とうとう黄

道吉日を選んでめでたく婿入りということになったのでした。

夫婦仲は至って円満で、双方の親達も大そう悦びました。これで間もなく懐

胎つて、男の児でも生れれば、何のことはないのをございますが、そこがままならぬ浮世

の習いで、一年経つても、二年過ぎてても、三年が暮れても、ドウしても小供が生れないの

で、婿の実家の方ではそろそろあせり出しました。『この分で行けば家名は断絶する：

。』——そう言つて騒ぐのでした。が、三年ではまだ判らないというので、更に二年は

ど待つことになりましたが、しかしそれが過ぎても、矢張り懐胎の気配もないので、とうとう実家では我慢がし切れず、止むを得ないから離縁して帰ってもらいたい、ということになって了いました。

二人の仲はとても濃かで、別れる気などは更になかったのでございますが、その頃は何よりも血筋を重んずる時代でございましたから、お婿さんは無理無理、あたかも生木を裂くようにして、実家へ連れ戻されて了ったのでした。今日の方々は随分無理解な仕打と御思いになるか存じませぬが、往時はよくこんな事があつたものでございまして……。兎に角斯うして飽きも飽かれもせぬ仲を割かれた娘の、その後の歎きと言つたら又格別でございました。一と月、二た月と経つ中に、どことはなしに軀がすっかり衰えて行き、やがて頭脳が少しおかしくなつて、良人の名を呼びながら、夜中に臥床から起き出してあるきまわるようなことが、二度も三度も重なるようになって了いました。保養の為に、この娘が一人の老女に附添われて、三崎の遠い親戚に当るものの離座敷に引越してまいりましたのは、それから間もないことで、ここではしなくも願掛けの話が始まるのでございます。

七十七、神の申子

或る夜社頭の階段の辺に人の氣配が致しますので、心を鎮めてこちらから覗いて見ますと、其処には二十五六の若い美しい女が、六十位の老女を連れて立つて居りましたが、血走った眼に洗い髪をふり乱して居る様子は、何う見ても只事とは思われないのでした。女はやがて階段の下に跪いて、こまごまと一伍一什を物語つた上で、『何卒神様のお力で子供を一人お授け下さいませ。それが男の子であらうと、女の子であらうと、決して勝手は申しませぬ……』と一心不乱に祈願を籠めるのでした。

これで一通り女の事情は判つたのでございますが、男の方を調べなければ何とも判断しかねますので、私はすぐ其場で一層深い精神統一状態に入り、仔細にその心の中まで探つて見ました。すると男も至つて志線の確かな、優さしい若者で、他の女などには目もくれず、堅い堅い決心をして居ることがよく判りました。

これで私の方でも真剣に身を入れる氣になりましたが、何分にも斯んな祈願は、まだ一度も手掛けたことがないものでございますから、何うすれば子供を授けることができるのか、更に見当がとれませぬ。拠なく私の守護靈に相談をかけて見ましたが、あち

らでも矢張りよく判らないのでございました。

そうする中にも、女の方では、雨にも風にもめげないで、初夜頃になると必らず願掛けにまいり、熱誠をこめて、早く子供を授けていたきたいとせがみます。それをきく私は全く気が気でないのでございました。

とうとう思案に余りまして、私は指導役のお爺さんに御相談をかけますと、お爺さんからは、斯んな御返答がまいりました。――

『それは結構なことであるから、是非子供を授けてやるがよい。但しその方法は自分で考えなければならぬ。それがつまり修行じゃ。こちらからは教えることはできない』

……。

私としては、これは飛んでもないことになったと思いました。兎に角相手なしに妊娠しないことはよく判つて居りますので、不取敢私は念力をこめて、あの若者を三崎の方へ呼び寄せることに致しました……。つまり男にそう思わせるのでございますが、これはなかなか並大ていの仕事ではないのでございまして……。

幸いにも私の念力が届き、男はやがて実家から脱け出して、ちよいちよい三崎の女の許へ近づくようになりました。乃で今度は産土の神様をお願いして、その御計らいで

首尾よく妊娠させて戴きましたが、これがつまり神の申子と申すものでございましょう。只その詳しい手続きは私にもよく判りかねますので……。

これで先ず仕事の一段落はつきましたようなものの、ただこの俵に棄て置いては、折角の願掛けが協つたのか、協わなないのか、さっぱり人間の方に判りませんので、何とかしてそれを先方に通じさせる工夫が要るのでございます。これも指導役のお爺さんから教えられて、私は女が眠っている時に、白い珠を神様から授かる夢を見せてやりました。御存じの通り、白い珠はつまり男の児の徴号なのでございまして……。

女はそれから引きつづいてお宮に日参しました。夢に見た白い玉がよほど気がかりと見えまして、いつもいつも『あれは何いう訳でございますか?』と訊ねるのでございしましたが、幽明交通の途が開けていないために、こればかりは教えてやることはできないので甚だ困りました。——が、その中、妊娠ということが次第に判つて来たので、夫婦の歡びは一通りでなく、三崎に居る間は、よく二人で連れ立ちてお礼にまいりました。

やかて月満ちて生れたのは、果して珠のような、きれいな男の児でございました。俗に神の申子は弱いなどと申しますが、決してそのようなものではなく、この児も立派に成

人して、父親の実家の後を継ぎました。私のところにまいる信者の中では、この人達などが一番手堅かった方でございました……。

×

×

×

×

斯う言つた実話は、まだいくらでもございますが、そのおうわきは別の機会に譲り、これからごく簡単に神々のお受持につきて、私の存じて居るところを申し上げて、一とまずこの通信を打ち切らせていただきます。とうございます。

七十八、神々の受持

神々のお受持と申しまして、これは私がこちらで実地に見たり、聞いたりしたところを、何の理窟もなしに、ありのまま申し上げるのでございますから、何卒そのおつもりで書いて戴きます。こんなものでも幾らか皆さまの手がかりになれば何より本望でございます。

現世の方々が、何は措いても第一に心得て置かねばならぬのは、産土の神様でございます。これはつまり土地の御守護に当らるる神様でございます、その御

本体は最初から活き通しの自然靈……つまり竜神様でございます。現に私どもの
 土地の産土様は神明様と申上げて居りますが、矢張り竜神様でございます……
 ……稀に人霊の場合もあるようにお見受けしますが、その補佐には矢張り竜神様が
 附いて居られます。ドーもこちらの世界のお仕事は、人霊のみでは何彼につけて不便が
 あるのではないかと存じられます。

さて産土の神様のお任務の中で、何より大切なのは、矢張り人間の生死の間
 題でございます。現世の役場では、子供が生れてから初めて受附けますが、こちらでは
 生れるずっと以前からそれがお判りになつて居りますように、何にしましても、一人の人
 間が現世に生れると申すことは、なかなか重大な事柄でございますから、右の次
 第は産土の神様から、それぞれ上の神様にお届けがあり、やがて最高の神様の
 お手許までも達するとの事でございます。申すまでもなく、生れる人間には必ず一人
 の守護靈が附けられますが、これも皆上の神界からのお指図で決められるように承つ
 て居ります。

それから人間が歿なる場合にも、第一に受附けてくださるのが、矢張り産土の神
 様で、誕生のみが決してそのお受持ではないのでございます。これは氏子として

是非心得て置かねばならぬことと存じられます。尤もそのお仕事はただ受附けて下さるだけで、直接帰幽者をお引受け下さいますのは、大國主命様でございます。産土様がみさまからお届出がありますと、大國主命様の方では、すぐに死者の行くべき所を見定め、そしてそれぞれ適当な指導役をお附けくださいますので……。指導役は矢張り竜神様でございます。人霊では、ややもすれば人情味があり過ぎて、こちらの世界の躰をするのに、あまり面白くないようでございます。私なども矢張り一人の竜神さんの御指導に預かったことは、かねがね申し上げて居ります通りで、これは私に限らず、どなたも皆、その御世話になるのでございます。つまり現世では主として守護霊、又幽界では主として指導霊、のお世話になるものとお思いになれば宜しうございます。

尚お生死以外にも産土の神様のお世話に預かることは数限りもございませぬが、ただ産土の神様は言わば万事の切盛りをなさる総受附のようなもので、実際の仕事には皆それぞれ専門の神様が控えて居られます。つまり病氣には病氣直しの神様、武芸には武芸専門の神様、その外世界中のありとあらゆる仕事は、それぞれみなうけもちの神様があるのでございます。人間と申すものは兎角自分の力一つで何でも

できるように考え勝ちでございますが、実は大なり、小なり、皆蔭から神々の御力添えがあるのでございます。

さすがに日本国は神国と申されるだけ、外国とは異つて、それぞれ名の附いた、尊い神社が到る所に見出されます。それ等の御本体を調べて見ますと、二た通りあるように存じます。一つはすぐれた人霊を御祭神としたもので、橿原神宮、香椎宮、明治神宮などがそれでございます。又他の一つは活神様を御祭神と致したもので、出雲の大社、鹿島神宮、霧島神宮等がそれでございます。ただし、いかにすぐれた人霊が御本体でありまして、その控えとしては、必らず有力な竜神様がお附き遊ばして居られますようでございます。

今更申上ぐるまでもなく、すべての神々の上には皇孫命様がお控えになつて居られます。つまりこの御方が大地の神霊界の主宰神に在しますので……。更にそのモ一つ奥には、天照大御神様がお控えになつて居られますが、それは高天原……つまり宇宙の主宰神に在しまして、とても私どもから測り知ることのできない、尊い神様なのでございます……。

神界の組織はざつと右申上げたようところでございます。これ等の神々の外に、

この国^{くに}には観音様^{かんのんさま}とか、不動様^{ふどうさま}とか、その他^{ほか}さまざまのものがございますが、私がこ
ちらで実地^{じつち}に調べたところでは、それはただ途中^{とちゅう}の相違^{そうい}……つまり幽界^{ゆうかい}の下層^{かそう}に居^お
眷族^{けんぞく}が、かれこれ区別^{くべつ}を立てているだけのもので、奥^{おく}の方は皆^{みな}一つなのでございます。
富士山^{ふじさん}に登^{のぼ}りますにも、道^{みち}はいろいろつけてございます。教え^{おし}の道^{みち}も矢張り^{やは}そうした訳^{わけ}
ものではなからうかと存^{ぞん}じられます。では一と先^まずこれで……。

(完結)

青空文庫情報

底本：「靈界通信 小桜姫物語」潮文社

1985（昭和60）年7月31日第1刷発行

1998（平成10）年7月31日第9刷発行

底本の親本：「靈界通信 小桜姫物語」心霊科学研究会出版部

1937（昭和12）年2月初版発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※横組み中のダブルミニユニットには、底本では、JIS X 0213規格票の、縦書き用字形が用いられています。

入力：浅野和三郎・著作保存会（泉美、老神いさお、MUPやへら）

校正：POKEPEEK2011

2012年9月18日作成

2014年6月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

霊界通信 小桜姫物語

浅野和三郎

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>